

767
169

×
複
写



0004213-000

767-169

孫文全集

外務省調査部・訳編

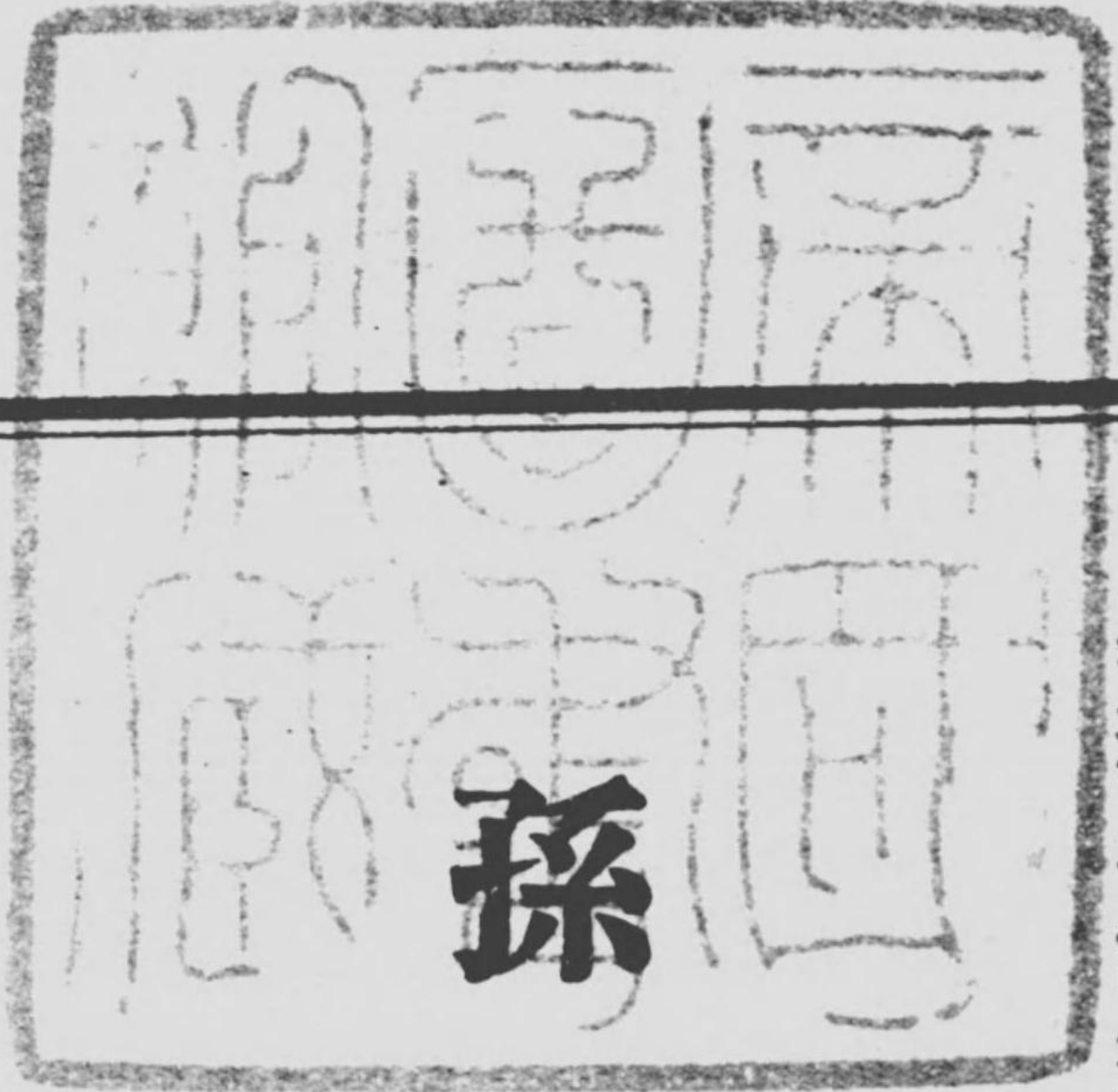
第一公論社

第2卷

昭14

ABB

35.10.19



外務省調査部譯編

孫
文
全
集
(第二卷)



767
169

建 國 方 略

目 次

第一章 心理學建設(孫文學說)

孫文 自序……………三

第一節 飲食を以て證と爲す……………一七

第二節 用錢を以て證と爲す……………二六

第三節 作文を以て證と爲す……………三〇

第四節 七事を以て證と爲す……………三七

第五節 知行總論……………四六

第六節 能く知れば必ず能く行ふ……………五三

附錄 陳其美の黃興(克強)宛書翰……………六一

第七節 知らざるも亦能く行ふ……………六九

第二章 物質建設(實業計畫)

第八節 志有れば竟になる(孫文自傳).....一六

孫文 自序.....一六

第一節 總論(國際共同中國實業發展計畫書).....一九

第二節 第一計 畫.....二〇

第一項 北方大港 第二項 西北鐵道系統 第三項 蒙古新疆への

殖民 第四項 中國の北部中部を水路に依つて連絡する運河を開き且

つ北方大港に達せしむること 第五項 河北山西の鐵石炭鑛を開發し

て製鐵所を設立すること

第三節 第二計 畫.....二四

第一項 東方大港 第二項 揚子江の整理 第三項 内河開港場の

建設 第四項 現存水路及び運河の改良 第五項 大洋灰工場の創設

第四節 第三計 畫.....二六

第一項 廣州市を改良して世界一流の貿易港たらしむること 第二項

廣州水路系統の改良 第三項 中國西南鐵道系統の建設 第四項

沿海開港場及び漁港の建設 第五項 造船所の創立

第五節 第四計 畫.....三五

第一項 中央鐵道系統 第二項 東南鐵道系統 第三項 東北鐵道

系統 第四項 西北鐵道系統 第五項 高原鐵道系統 第六項

機關車客車貨車製造工場の設立

第六節 第五計 畫.....三八

第一項 食糧工業 第二項 衣服工業 第三項 建築工業 第四項

交通工業 第五項 印刷工業

第七節 第六計 畫.....四〇

第一項 鐵鑛 第二項 炭鑛 第三項 石油鑛 第四項 銅鑛

第五項 特殊鑛 第六項 鑛業用機械の製造 第七項 製煉所の設立

第八節 結論.....四二

附錄 一、廣州重慶鐵道及び蘭州支線借款竝に工事請

負契約草案.....四三

二、駐華米國公使「ヂョンス」氏の返信譯文.....四二

三、米國商務長官の返信一通.....四六

四、「イタリー」陸軍大臣「カヴィリア」將軍の返信……………四三七

五、北京交通部顧問鐵道專家「ビゴール」君よりの來信……………四三八

六、米國名士にして「ローマ」に寓居し世界に於ける都市計畫者として著名なる「エヂソン」君の返信……………四三九

第三章 社會建設(民權初步)

孫文自序……………四四三

第一 會議の成立

第一節 臨時集會の組織方法……………四四九

第一項 會議の定義 第二項 會議の規則 第三項 會議の種類 第四項 召集の普通様式 第五項 開會の秩序 第六項 議長の選舉 第七項 被指名者多數ある場合 第八項 指名の附和贊成 第九項 書記等の選舉 第十項 委員會

第二節 恒久的機關の成立方法……………四五六

第一項 會の成立 第二項 章程及規則 第三項 職員 第四項 職員の選舉 第五項 其他の選舉 第六項 當選者なき場合 第七項 大多數と比較多數 第八項 團體の成立

第三節 議事の秩序及び定足數……………四五六

第一項 恒例事項 第二項 議事の公式順序 第三項 定足數の定義 第四項 定足數は開會前の必要事項なり 第五項 開會後定足數を缺くに至りたる場合の效力 第六項 定足數の計算方法

第四節 會員の權利義務……………四七五

第一項 議長の義務 第二項 議長の權利 第三項 會員の權利義務 第四項 副議長並に書記の權利、義務 第五項 全體の權限並に缺員、廢置、特別會等に關する規定 第六項 特別會議

第二 動議

第一節 動議……………四八二

第一項 動議 第二項 處理手續 第三項 動議の措辭 第四項 動議は何時發すべき乎 第五項 提出手續 第六項 動議の附加贊成 第七項 贊成の形式 第八項 極端は當然避くべきこと

第二節 變則的動機並に地位の釋義……………四九二

- 第一項 動議撤回の公例 第二項 撤回の方式 第三項 例外事項
- 第四項 分開動議 第五項 對等動議 第六項 地位釋義 第七項 地位の取得

第三節 討 論……………四九七

- 第一項 討論の權利 第二項 討論の定義 第三項 討論の時期
- 第四項 討論方法 第五項 討論の制限 第六項 廢言方法 第七項 駁論の言辭 第八項 地位の競争 第九項 地位の遜讓 第十項 討論上の友誼 第十一項 一致可決

第四節 討論停止の動機……………五二二

- 第一項 討論停止動議 第二項 討論停止動議の效力 第三項 討論停止動議の討論 第四項 討論停止動議の提案方法 第五項 停止動議と本題動議との區別 第六項 停止動議の他動議に對する效力 第七項 停止動議の本題の一部分に對する效力 第八項 時期を定むる討論停止

第五節 表 決……………五二八

- 第一項 表決方式 第二項 舉手並に起立 第三項 採用方法を定

- むべきこと 第四項 拍手は表決の用に用ひざること 第五項 兩方面共に上呈すること 第六項 表決の疑問 第七項 同數 第八項 議長の特權 第九項 議長は表決の權利を有す 第十項 點呼表決 第十一項 投票表決 第十二項 少數に依る採決、半數以上の數に依る採決

第六節 表 決 の 復 議……………五三八

- 第一項 復議の定義 第二項 復議の動議の效力 第三項 復議の動議を發すべき時機 第四項 何人が復權動議を發すべきか 第五項 折衷方法 第六項 復議の討論 第七項 慣勝の解釋 第八項 復議の提案方法 第九項 復議不可能の議案 第十項 復議動議は慎重なるべし 第十一項 取消動議 第十二項 兩動議の效力

第三 修 正 案

第一節 修正の性質及び效力……………五三七

- 第一項 修正の性質 第二項 修正案は原案と相關關係に在るものたるべし 第三項 修正案の效力 第四項 第一及び第二の修正案 第五項 第一第二修正案の提案形式 第六項 同時に一個以上の修正案を許す場合 第七項 先事聲明 第八項 修正案の承認

第二節 修正の方法……………五八

- 第一項 修正の三方法
- 第二項 修正案説明の方法
- 第三項 加入方法
- 第四項 加入案の否決效力
- 第五項 意義變更の必要
- 第六項 削除の方法
- 第七項 削除修正案否決の效力
- 第八項 削除案上呈表決の方式
- 第九項 己に廣棄せる字なりとも他の箇所に加ふるを得
- 第十項 「不」の字
- 第十一項 削除加入法
- 第十二項 削除及び加入修正案否決の效力
- 第十三項 代替

第三節 修正案の例外事項……………五九

- 第一項 款項及び時間の空位
- 第二項 人名
- 第三項 修正を受けざる動議
- 第四項 再議案
- 第五項 修正の順序

第四 動議の順序

第一節 附屬動議の順序……………五六

- 第一項 順序の定義
- 第二項 獨立動議、附屬動議
- 第三項 七種の附屬動議及び其の順位等級
- 第四項 議案順序の討論形式
- 第五項 七種の附屬動議の目的
- 第六項 順位を定むる事の理由

第二節 散會及び擱置動議……………五七

- 第一項 散會動議
- 第二項 獨立の散會動議
- 第三項 散會議議の

- 制限
- 第四項 散會の效果
- 第五項 散會の時期
- 第六項 擱置動議
- 第七項 擱置動議の效力
- 第八項 抽出動議

第三節 延期動議……………五九

- 第一項 有期延期
- 第二項 效力
- 第三項 本動議に對する制限
- 第四項 無期延期動議
- 第五項 本動議の效力

第四節 委員附託動議……………五六

- 第一項 委員附託
- 第二項 委員附託動議の效力
- 第三項 訓令を附帶する委員附託動議
- 第四項 問題の一部分
- 第五項 委員の選舉
- 第六項 獨立の委員附託動議

第五節 委員及び其の報告……………五九

- 第一項 委員の性質
- 第二項 委員の權限
- 第三項 報告
- 第四項 報告の上呈
- 第五項 報告の要求
- 第六項 少數の報告
- 第七項 報告の形式
- 第八項 再委員附託動議

第五 時宜問題と秩序問題

第一節 時宜問題……………五九

- 第一項 時宜問題の性質
- 第二項 時宜問題の定義
- 第三項 效力
- 第四項 提案方法

第二節 秩序問題……………六〇五

第一項 秩序問題の定義 第二項 議長の職務 第三項 秩序問題の效力 第四項 申訴 第五項 申訴表決票の賛否同数なる場合 第六項 順序 第七項 秩序問題及び之が提案方法……………六二九

第六 附 録……………六二九

一、章程及規則の範例……………六三四

二、議 事 表……………六三〇

第一章 心理建設(孫文學說)

孫 文 自 序

文の國事に奔走すること三十餘年。畢生の學力ここに盡萃し精誠間なく百折回らず、滿清の威力の屈する能はざる所、窮途の困苦の撓むる能はざる所、吾が志の向ふ所一往無前愈々挫け愈々奮ひ、再接再勵もつて能く風潮を鼓動し時勢を造成し、遂に全國人心の傾向と仁人志士の贊襄とに頼り、專制を推覆して共和を創建することを得た。本これよりして繼進し革命黨の抱持する三民主義と五權憲法と、革命方略に規定する所の種々なる建設の宏謨とを實行せざれば則ち必らずや能く時に乗じ一躍して中國を富強の域に登し斯民を安樂の天に躋らしめんとしたのである。然るに圖らずも革命初めて成るや黨人はただちに異議を起すに至つた。彼等は謂ふ余の主張する所は理想太だ高く中國に適せずと。衆口金を鑠かして一時に風靡し同志の士も亦悉く之に惑つた。之を以て余が民國總理たりし時の主張は、むしろ革命領袖たりし時の效ありて而して之が施行を見たるに若かず、これ革命の建設ならず破壊の後國事更らに之に因つて非なる所以である。それ

一滿洲の專制を去りて轉じて無敵強盜の專制を生出し、その毒の烈しきこと前に較べて尤も甚しく、茲に於いて民愈々生に聊んぜざる状態となつた。吾が黨革命の初心に溯るに本と救國救種を以て志と爲し、斯民を水火の中より出して之を衽席の上に登さんとしたものである。今反つて之をして水に陥ること益々深く火を蹈むこと益々熱からしめ革命の初衷と大いに相違背する所以は、固より余の徳薄くして同僚を化格するなく余の能鮮なくして群衆を駕馭するに足らず、以て之を致したるは勿論なるも、吾が黨の士に於ても革命の宗旨、革命の方略に信仰篤からず、奉行を力めざるの咎あるを免れ得ない。而してその然る所以は盡く功成り利達して心を移せるが爲にはあらず、實に多く思想の錯誤を以て志を懈たらしむるが爲である。思想の錯誤とは何ぞや、即ち「之を知るの難きに非ず之を行ふこと惟れ難し」と言へるが如きものである。此説は傳悦の武丁に對へたる言に始まり數千年來深く中國の人心に中り已に牢として破るべからざるものである。故に余の建設計畫は一々皆此説の打消す所となつた。實に此説は余が平生の最大の敵であつて、その威力はまさに滿清に萬倍するものである。惟ふに滿清の威力はただ能く吾人の身を殺すに過ぎずして、吾人の志は奪ひ得ざるも、此敵の威力は能く吾人の志を奪ふのみならず、且つ以て億兆人の心を迷はしむるに足る。此故に滿清の世余が革命を主張するに當つては猶ほ能く日に

起つて功あり進行已まざりしも、民國成立の日より余の主張する建設は反つて半籌展ぶるなく一敗地に塗るるを致し、吾が三十年來精誠間無き心は幾んどこれがために氷消瓦解し、百折回らざるの志は幾んどこれがために槁木死灰せんとするに至つた。畏るべき哉此敵、恨むべき哉此敵。兵法に云へるあり攻心を上と爲すと。之れ吾が黨の建國計畫は即ちこの心中の打撃を受けたのである。それ國は人の積にして人は心の器、而して國事は一の人群心理の現象であり、此故に政治の隆汚は人心の振靡に係はるものである。吾が心其の行ふべきを信すれば移山填海の難も終に成功の日あり、吾が心その行ふべからざるを信すれば反掌技折の易きも亦效を收め得る期がない。心の用たる大なる哉。心は萬器の本源である。滿清の顛覆は此心に依つて成り、民國の建設は此心に依つて敗れた。惟ふに革命黨の心理は成功の初めに於て「之を知るの難きに非ず之を行ふこと惟れ難し」の説の奴とする所と爲り、吾が策を視て空言と爲し遂に建設の責任を放棄したのである。斯の如くんば則ち今後の建設の責任は革命黨の能く専らにし得ざるものであり、民國成立してより後建設の責任は當さに國民の共に負ふべき所である。然れども七年以來猶ほ建設事業の進行を觀ず、國事は日に紛糾を形はし、人民は日に苦痛を増し、午夜之を思へば痛心痛首に勝へず、實に民國の建設事業は一刻も視て綬圖すべからざるものである。國民よ、國民よ、畢竟何

の心をか成す、能はざる乎、行はざる乎。吾れそれ能はざるに非ず行はざる也。行はざるに非ず知らざる也。もし能く之を知れば建設の事業は反掌折技の如からん可。回顧するに當年余の耳提面命して革命黨員に傳授し、而も河漢視せられて理想の空言と爲された所のものも、今に至つて之を觀れば適々世界潮流の需要に應じ、亦當さに民國建設の資材となるべきものなるを覺ゆ。乃ち之を書に筆し名づけて、建國方略と曰ひ以て國民の法を取る所と爲す所以である。然れども尙ほ躊躇審顧する所あり、則ち今日の國人社會の心理には猶ほ七年前の黨人社會の心理の如く依然として「之を知るの難きに非ず之を行ふこと惟れ難し」の大敵が其中に横梗するを以て、吾が計畫は理想の空言として拒まるべきを恐れる。故に先づ學説を作つて此心理の大敵を破り國人の思想を迷津より出さば庶くば余の建國方略は再び國人が視て以て理想の空談と爲さざるに至るであらう。若し斯の如くんば乃ち能く萬衆一心急起直追、我が五千年文明優秀の民族を以て世界の潮流に應じて一の政治最も修明にして人民最も安樂なる國家とし、民の有する所、民の治むる所、民の享くる所のものを建設し、その成功は必ずや革命の破壊事業に較べて尤も速かに尤も容易たり得るであらう。(民國七年十二月三十日孫文自序於上海。)

第一節 飲食を以て證と爲す

革命の破壊作業が告成し、建國の門出に上つた當初余は無限の歡びとともに感情の高調を禁じ得なかつた。余は平常の抱負と積年の研究に依つて得た所に依據し、建國の計畫を定め之を實施せんと欲した。それに依つて吾が中國をして一躍富強隆盛の地壇に登らしめんと冀つた。が、余の非難者は余に向つて謂つた。「先生の志は餘りにも高遠である。先生の策は餘りにも深奥である。それ之を知るは難きに非ず之を行ふの難きを奈何せん」と。余は最初この言葉を聞いて惶然自失した。蓋し「之を行ふは難し」の説は余の心もまたそれを信じて疑がはぬ所のものであつたからである。余はおもへらく古人我を欺かず……と。そこでどうかして各人の心を支配してゐるこの障碍・難關を打破し、吾が建設の目的を達したいと深慮した揚げ句、王陽明の知行合一性を藉りて同志を激勵・鞭撻した。余は徒に久しい期間をそれに過ごした。かくした後に於て余は積極的にこれに——迷妄の打破に——奮進努力すべきであることを自覺した。そこで余は廣東を棄てて廢然上海に返り、知易行難問題の奥底を究むべく専らそれに没頭した。

かくて若干の歳月を費した後、始めて恍然として古人の傳ふ所と、近世人の信ずる所とが似て非なることを悟つた。之がため豁然得る所があり、欣然として喜んだ。

中國の從來の不振は慢然として行はなかつたためではなく、實に慢然として知ると云ふことが無かつたこと及び既得のことすら之を行はなかつたにあることを知つた。則ち知るは易く行ふは難しの説に誤まられてゐたのである。若しよく「知るは易きに非ず行ふは難きに非ざる」ことを立證し、吾が中國人の心に行ふことの畏るべきでないとの觀念を植ゑつけ、實行を樂しむやうに誘導したならば中國の事たる大いに期待すべきものがあるであらう。茲に於て余は思索の結果、構想し得た所の十項の事柄を擧げて「行ふは難きに非ず知るは難し」の事實を指摘・驗證して學者の研究に供し、又以て世人の迷蒙を破りたい。

之を知るは難きに非ず之を行ふは難しの一語はこれを傳へて數千年。これを教へ廣めて全國に徧く、四億の民衆の心理に天經地義の眞理のその如き深い根を下してゐるのであるから、その謬見を正しい方向へ移進させることは實に至難の業とせねばならない。で、今ひとたびこの謬見に向つて、それが古來の本義とは似て非なるものであると指摘し、且つ眞理と背馳するものだとの眞正なる批判を下しても世人の多くは恐らく遽かにこれを信ぜぬであらう。故に最も卑近な事

柄——日常容易に行はれてゐる所の事柄を以て之を驗證することにしやう。

處で第一に飲食を擧げる。飲食は最も卑近な而して行ひ易い事柄である。同時にまた人生の最も重要事で一日も缺くことの出来ない事柄である。凡そ一切の人類物類は皆よく之を行ひ能ふのである。嬰兒はひとたび母胎を出づれば直ちに之を能くし、雞鶏はひとたび蛋殻を脱すれば直ちに之を能くする。其れは誰の教へを待つまでもないのである。しからば試みに飲食の一事に就て自省自問して見られよ。吾人は果して能く其の蘊奥を曉知してゐるであらうか……と。

普通一般人が之を知り能はぬばかりではない。近代の科學は已に大なる發達を遂げてゐる。しかも生理學家・藥學家・衛生學家・物理家・化學家など各部門の専門大家がそれぞれ飲食の一道に專心的研究を傾け始めてから今日に至るまで已に數百年を経たのであるが、尙ほ依然其の奥底を窮め得られずにあるのである。

吾が中國は近代的文明進化に於て事に皆人後に落ちてゐるが、飲食の道に於る進歩發達は今日に於ても尙ほ文明各國の遠く及ばぬ所である。中國人が日常嗜好してゐる飲食物の實質的價値は之を今日の歐米の最も優れた醫學・衛生家の研究にかゝる最新の學理の結果に比較して毫も遜色がない。彼等の研究の結果も中國の食物以上に達してゐないのである。何を以てかく言ふかと謂

ふに中國で發達した多くの食物は古の所謂八珍の如き平素の食膳に上らぬものは今ここで論ぜぬが、常食物たる茸豆腐もやし等は營養價值から見て粗食の最良なるものであるのに、歐米各國ではこれらの食物たることも其の製法も料理法も全く知らない。肉食に就て見ても六畜の臟腑の如き中國人の最も嗜好し美味とするものであるが、米英人は從來之を食はなかつた。近年やうやく其のうまさ分り、此を食ふものをちよいちよい見受けるやうになつた。余が初めて廣東に赴いた頃は、西歐人は中國人が豚の血を料理して食ふのを見て一圖に粗暴野蠻の遺風だと見做してゐた。が、どうであらう。醫學衛生家の研究の結果、豚の血には多量の鐵分が含まれ滋養強壯劑として無上品たることが證明された。凡そ病後・産後及び一切の貧血症者の衰弱恢復には從來は多く鍊化調製の鐵劑を用ひたが、今日では一樣に豚の血を用ひるやうになつた。蓋し豚の血に含まれてゐる鐵分は有機體の鐵分であつて、之を無機體の鍊化調製の鐵劑に較べれば遙かに人體に適してゐるからである。故に豚の血を平素の食物として食へば、有病者にとつては補血劑となり、無病者にとつても保健上に裨益するところが少くないのである。中國人が從來、之を好んで食つてゐたことは粗暴野蠻の遺風ではないばかりか、其れが極めて科學的衛生に合致してゐたものだと言ひ得やう。之れは僅かに一種の食料品について述べたに過ぎない。其他古來から傳つた

中國の食物で西歐人の未知のものを摘出すれば際限がない。鱈の翅・燕の巢などは中國人にとつては高價な最上の食物であるが、西歐人は中國人が之等の食物に舌鼓を打つて食ふのを見て一種奇怪の感を抱くのである。夫れ目を悦ばしむるの繪畫・耳を悦ばしむるの音樂は孰れも藝術とされてゐる。さらば舌を悦ばしむるの割烹がどうして獨り然らざることがあらう。然り、割烹も亦藝術の一道である。西歐に於る烹調の術は佛蘭西より善きはなく、西歐に於る文明も亦佛蘭西より高きはない。之れ烹調の術は本來文明より生れたもので、深奥なる文明の種族でなければ、微妙な味を解する舌をもつてゐない。所謂味覺は發達してゐない。味覺が發達してゐねば烹調の術に妙であり得ない。故に中國の烹調の妙はまた文明進化の深さを表象するに足るのである。支那と西歐諸國とがまだ交易を開始しなかつた以前にあつては、西歐人中、僅かながらも烹調の道を中心得てゐた佛蘭西は世界の王座を占めてゐたが、ひとたび中國の料理を味ふや、世界人は擧つて中國を斯界の王座に据えた。近代の西歐人で中國の國內を徧く歴遊したのは赫氏を以て最初となすであらう。彼は清の道光年間に各省に潜行歴遊して遠く西藏にまで足跡を印してゐるが、彼の著した遊記には中國の文明は一端にとどまらぬが、就中中國の料理は世界に冠たるものであると記述されてある。

近年華僑（中國の海外移住民）の渡航地では何處でも中國料理が盛に擴まつてゐる。米國の紐育では中國料理屋の數は數百軒に達してゐる。米國の有名な都市で中國料理屋のない處は殆んどない。米人の中國料理嗜好熱は國を擧げて狂躁的、壓倒的勢ひを示してゐると謂つても過言でない。米人に、中國料理が彼の國の料理界を風靡してゐる。それがために彼の國の料理業者の大なる嫉妬を惹起し、遂ひに中國人の用ゆる醬油には毒素が含まれてゐるから衛生上有害だとの謠言が捏造流布された。その揚句、彼等料理業者は市政廳を動かして中國人の醬油使用禁止案を議決せしめた。その後醫學衛生家の嚴密なる分析試験の結果が發表された。その結果はどうであつたか。醬油は毒素を含有してゐないのみか多量の肉精を含有してゐる。その精分は「ソップ」と異ならない。故に衛生上無害である以上に滋養に富み身體に有益作用をなすものであることが立證された。禁止令は即座に撤回されたのであつた。中國の烹調の術は「アメリカ」大陸を風靡しただけにとどまらず、歐洲諸國の大都市にも亦漸次中國料理業者の出現を見つつある。日本は維新以後、風俗・趣味・制度を悉く西歐から採つたが獨り烹調の一道は中國のそれを珍重がつてゐる。故に東京には中國料理屋が林立してゐる。之れ口の嗜好は人類同一のものであることを知るに足る。而して中國は古來から工夫發明された食物の種類多數な點並に烹調術の優れた點に於て各

國の到底及ぶことの出來ぬ地位を占めてゐる。しかも中國人の嗜好物は近代の科學衛生に暗合してゐる。この點も亦各國一般人のそれを望むも及び得ない所である。

中國人が常用の清茶・素飯それに加ふるに野菜料理・豆腐等の飲食物は現今の衛生家の實驗の結果に徴すれば最も營養に富むものとされてゐる。故に中國の邊僻な寒村に棲んで殆んど酒や肉を口にせぬ人々は多く長壽である。又中國の人口の繁榮と中國人の疾疫を拒止する力の絶大な點なども、亦平素の飲食が衛生に暗合してゐるに外ならない。若し更によく科學に従つて衛生上の工夫をめぐらすべくその知識を求め、これが改良進歩を圖つたならば中國人種の強健は必らずや更に今日を凌駕するであらう。

西歐人の粗食唱道者は科學衛生の知識に基いて壽命の増進を求めんとする者で、其の工夫された粗食物は、中國のその如く美的でなく、且つその調味法も中國のそのやうに精巧でない。故に熱心なる粗食家の多くは菜食過多で營養分の不足を告げ、却つて保健上の支障を來すといふ弊がある。で、粗食の風は全國に普及し難い。

中國の粗食者は必ず豆腐を食ふ。夫れ豆腐は實に植物中の肉性分である。この食物は肉性分たるの效果をもつてゐる上に、肉性分の毒をもつてゐない。故に中國に於ては粗食が一般的習慣と

なつてゐる。其れは學者の提倡を待つまでもなく普遍的である。歐米人の間では濁酒を飲みまた肉食が普通となつてゐる。故に最初には科學によつて其改善が提倡され、後には禁酒令の如き法律による嚴禁を見るに至つた。最近「ロシア」と米國では禁酒を勵行してゐるが、遽かにここに移し易へることは不可能のやうである。單に飲食の一道に就て之を論ずれば、中國の嗜好は各國の上に超絶してゐる。これ人生に於る最重要事でしかも中國人は何人の勧誘強制を待つなく能く之を習得して最も自然的な効果を收めてゐる。實に一大幸福と謂ふべきである。吾人は之を保守し失ひさへせねば世界人類の師導者たり得るものである。

古人の言に「人は一小天地である」とあるが、まことに然りである。然り、之を一小天地と見做すよりも寧ろ一小國家と見做したならば更に適切であらう。蓋し體内の各臟腑の管掌する全體的功能は、國家の各機關が全國の政務を分掌處理するのそれに恰も異らないからである。ただ人身の各機關は其の組織の完備と運用の靈妙なる點に於て現世國家の組織の到底及び能はざるところ、しかして人身の靈妙は尙ほ人類の今日の知識を以てしては窮め能はざるところである。

最近、科學者の研究に據れば人類および動植物を創生せる造物主は生物の元子であると謂ふ。生物の元子——學者は多く之を譯説して細胞と謂つてゐる。余は特に之を「生元」と創名し、か

く呼ぶことにする。蓋し生物元始の意を汲めるものである。

生元とは何か。曰く其物たるや精矣・微矣・神矣・妙矣・不可思議矣、なるものである。按ずるに今日の科學の力を以て窺ひ得た所は生元もまた「物」たることである。これは乃ち知覺靈明を有する物である。動作思爲を有する物である。主意計畫を有する物である。更に換言すれば人體構成の精妙・神奇は生元から生じたものである。人生の聰明・知覺は生元から發したものである。動植物の状態の奇々・怪々不可思議、其等はみな生元を造物主とするものなのである。生元が人頭及び萬物を構造するのは恰も人類が家屋・船車・都市橋梁等を築造するのに等しい。天空を飛ぶ鳥は生元の造れる飛行機であり、水中の鱗介は生元の造れる潜航艇である。孟子の謂ふ所の良知良能は他の何ものでもない。生元の知・生元の能たるのみ。

「キュリー」氏の生元の發見(註、原子説の發表者は「ジョン・ダルトン」で「キュリー」は新元素「ラジウム」の發見者)によつてこの理を知つた後、前時代の哲學者の明かにし得なかつた點、科學の解し得なかつた點、進化論の通じ得なかつた點、心理學の指摘し得なかつた點、其れらの諸點が凡て皆之に由て豁然、明瞭とされ、別に一新天地が開かれ、學術上の試験臺となつてゐる。

人體は生元の構造する所の國家である。則ち體内の飲食機關は、生元の糧食製造廠である。人

間が飲み食ひする品物は生元の營養料および需用材料である。生元が人體に依つて生活してゐるのは、恰も人類が地球に依つて生活してゐるのに似てゐる。生元が人體の各部分に結聚してゐるのは恰も人類が各都市に居住してゐるやうなものである。人生の生活は飽食暖衣が先決問題とされてゐる。生元も亦然りである。故に其の需要は燃料を以て緊急としてゐる。而して材料が之に次ぐ。吾々の飲食總量の八九分は燃料に充用され、一二分が材料に用ゐられる。此の燃料の用途は二種ある。一は保温で、これは恰も人間が焚火して防寒に資するやうなものである。他の一は工作——活動素である。此の方は丁度工場が石炭を燃料として動力を起すのと同様である。之れが故に労働者は燃料をより多く必要とするので概して食欲が大量である。之に反して労働せぬ者は燃料の要求が少ないから食欲は少量である。若し食物が足つて體内の燃料に餘分を生ずれば之を脂肪に化して體内に蓄へ、不時の需めに備へる。則ち燃料が十二分に供給されなかつた場合、生元は此の體内に蓄藏されてある脂肪を攝つて燃料の補充とするのである。脂肪が盡くれば肉體を搾取する。小食家や營養不良者の容姿が概して瘦悴してゐるのはこれが故である。材料は生元の營養および身體の建築材料である。材料の攝取が過多なれば其れは悉く燃料に化されて了ふ。材料としては體内に蓄藏されないのである。これは恰も都市内に建築材料が餘りに過多であれば

却つて無用物視され、薪木に用ゐられるやうなものである。故に材料の攝取が過多なのは不可である。過多なれば體内の消化機關は非常な活動力を費して之を消化し、燃料と化する。其質が若し燃料となすに適せねば消化後體内に殘滓として残り、腎臓の活動によつて殘滓を清除するが、其れを司る臟腑に過勞を生じ、生理上面白からぬ結果を招來するから宜しくない。

食物の效用は之を分けて二種となる。一は燃料でその養分は菜食からより多く攝取される。一は材料でこれは肉食から多く攝取される。材料の供給が多過ぎた場合には燃料に轉化されるが、燃料の攝取が過剰し、材料に缺乏を來してゐても燃料が變化されて材料の不足を補充することは不可能なのである。故に材料の缺乏は絶體禁物である。若し缺乏を來せば必ず元氣を損ふ。同時に又材料の過剰も不可である。過剰なれば臟腑を傷ふからである。世人がよくこの理を會得したならば養生長壽の道も思ひ半に過ぎるものがあらう。

近年生理學家が食物の分量を説明する場合、物質の數量を言はず、生ずる所の熱力の割合を標準として説明するのが普通である。その方法は檢熱器を用ゐて物質を燃化し、その熱力を測るのである。則ち「グラム」の水を攝氏の零度から一度までに至らしめる熱量を一熱率と稱してゐる。この食物は幾熱率あるとか、或は又人間はどれだけの熱率を必要とする、攝取せねばなら

ぬと謂ふ風なことが謂はれてゐるのである。これは已に生理學上の慣用語となつてゐるのだから、今後はこの語を用ゐて食量を表示するやうにならう。

食物の重要種類は三種ある。即ち窒素類・含水炭素類・脂肪類で、この外に水・鹽・鐵・磷・「マンガン」の各質分並に生氣質（これはまだ化學者がその元素を實證し得ないものである）等は皆人間にとつて必要缺くべからざるものである。窒素類一「グラム」は四・一熱率。含水炭素一「グラム」は同じく四・一熱率。脂肪一「グラム」は九・三熱率であつて、窒素類は蛋白を純粹性分としてゐる。而して畜類及び魚類は窒素類を多分に含んでゐる。植物中にも窒素類は含まれてゐる。その含有量は大豆・青豆に最も多い。各人一日の營養材料の攝取割合は各生理學者によつてその主張を異にしてゐる。蛋白質の攝取量は一日百「グラム」を限度とするとも謂ひ、或は五十「グラム」で十分だと主張する學者もある。攝取熱率の割合に就て塊太利の那典氏の研究によると人間の體量一「キロ」に就て輕労働者は三十四乃至四十熱率、重労働者は四十乃至六十熱率を攝取すべきであると發表してゐる。則ち體量七十「キロ」の人は輕労働者であつたならば二千八百熱率の食料を、また重労働者であつた場合には三千五百熱率から四千熱率に相當するだけの食物を攝らねばならぬ譯である。佛列查氏が體験上の實驗に據ると氏はその體量八十六「キ

ロ」に對し毎日蛋白質四十五「グラム」。燃料千六百熱率を攝れるに、その後體量に於て十三「キロ」を減少したが、健康状態は従前に比し遙かに勝つてゐた。その後更に食量を再減し三十八「グラム」の蛋白質、千五百八十熱率の燃料を攝つた處、平常の健康を繼續し得た。生理學者でこの種の實地試驗をなす者は實に多いのである。それらの發表を綜合してみると、身體の構成材料として需むる所の蛋白質は五十「グラム」乃至百「グラム」の範圍内にある。また身體の燃料として需むる所の食物は三四千熱率の範圍内にあると見て誤りあるまい。若し極めて過激な労働をなす場合は熱率五六千を需めねばならぬが、それは常態とは見做されない。

人類の疾病の過半は飲食の不節制に原因されてゐる。あらゆる動物は皆その自然の性に順ふものである。則ち生元の節制に聽従する。故に飲食の量はその度を滿せば最早や食慾は停止して多くを食べなくなる。上古の人類や今日の野蠻人種は文化未開、天性未漓で飲食なども極めて自然的である。それだけに食ひ過ぎ病などに憑かる者は極めて稀である。之に反し今日の進化人は文明の程度愈々高く、高くなればなるだけ自然的欲求とか、状態とは愈々遠く離れ、自ら作る（ワザハシ）も多くなる。酒の如き、煙草の如き、鴉片の如き、「コカイン」の如き、此の種の刺戟物は日に現れて日に繁く、人の嗜好を邪道に向はしめることも文明進化につれて愈々激甚となる。近代の

人類社會では、これらの飲食に原因する疾患者は實に夥しい數を計上してゐるのである。

余も曾つて食ひ過ぎ病に犯された。乃ち胃の不消化症で、最初はほんの微症に過ぎなかつたが、事忙忽略の祟りで漸次重症となつた。で、自ら藥治を行ひ稍や癒つたが、またく東奔西走を事とし、手當を忽略おろそかにするやうなことが幾度となく繰返されたので、藥石も效を失ひ、僅かに消極的豫防を講じ、硬ひ物・不消化物を一切口にせず、食物としては牛乳・粥・「ソツプ」の程度に止めて了つた。此の消極的豫防も最初の間は、頗る効果があつたが、半年も繼續してゐる間に此の流動物療法も無效に歸した。しかも病勢は日に激しく、胃の甚痛が頻りに募り殆んど治療の術もないので従來の手術方法を一變して外治を施さうと、先づ按摩の手術によつて胃の消化を助けることにした。此の按摩療法も初めは奇效を奏したが、數ヶ月後にはまたく舊病再發し、その都度重さを加へるので遂に按摩手術者で醫學にも通曉せる東京の高野太吉先生の治療を受けた。先生の手術は固より凡俗を超越してゐた。しかも其の著作にかゝる抵抗養生論の一書があつた。此の飲食療法は又普通の其れと全然異なるものであつた。普通西醫の飲食療法と謂へば一概に患者に消化し易き物を攝らせ、堅硬質の物は避けさせるのであるが、高野先生のは、患者に一切の肉類及び流動物、乃ち粥・牛乳・鶏卵・「ソツプ」等を戒め、堅硬質の野菜、果物などつとめて消化

し難い物を攝取させ、胃腸抵抗の自發作用を起させて其の本來の自然的機能に復歸せしめると云ふにあつた。余は最初、此の療法に疑を抱いた。否それを信じなかつた。さうして依然、粥・牛乳などの流動物を攝つてゐた。かくて半年を経過したが、疾患は終に快癒しなかつた。で、抵抗方法を試みて見やうかとの氣になつたので、再び先生の手術を受けることにし、余の固疾は果して全癒するものかどうか訊ねた。先生は曰く「手術は一時的治法に過ぎない。病根を斷ち健康・長壽を欲するならば、我が抵抗療法に遵はぬ限り絶対不可である」と。で、余も遂に先生の言に従つてその療法を實行した。果せる哉、それは奇效を奏した。快癒！然り快癒したのであつた。其後數ヶ月を経て偶々肉・牛乳・鶏卵・湯・茶・酒などを口にすると痛みが再發した。最初は何ぞ別の原因によるもので、之等の物を食つたからだとは思はなかつたが、三四回同様の時に同様の痛みが繰返へされたので、遇發的でないことを悟り、同時に高野先生の療法に如かずと、信賴を愈々深し、肉類・牛乳・鶏卵・湯・茶・酒の類と一切の刺戟物を戒め遠ざけ、毎日硬い飯と野菜および極く少量の魚類を攝り、果物を茶代りに嚙つた。以來、さしもの宿病も快癒・寂滅し今に至る二年の間に食慾は増加し、健康は昔に勝り、食後、腹の靠たることもなく一種の快さを感じる。斯様な快感は最近十年來、經驗したことがなく、此の二年來漸くにして味ひ得たところで

ある。

余は曩に醫學を肄業し、生理・衛生の學に對しては内心自誇する所があつた。で、却つて人並以上に食物とか養生に注意したために胃の本來の消化力を減退し、其れが嵩じて遂に胃病を生じ殆んど不治かとまで昂進したが、幸ひ高野先生の抵抗療養術によつて積年の舊症を兎にも角にも取除き得た。是實に醫道中の一大革命である。茲に於て見るべし、飲食の一事に於てすら、之を知ることの難き、實にこの如きであるを。且つ人の稟賦は各自同じくない。故に飲食物は、甲に宜くもそれが悉く乙に宜いとはされない。食ひ過ぎ病を治療する方法も亦各自その術を異にするのであつて一概に此の療法がいい、あの治療がいいと論斷することは出来ない。ただ通常の飲食養生の大要は節制あるに外ならない。過量の食をなさぬことが則ち養生の第一要諦である。

又、肉食は元來身體構成の材料及び身體補充の材料たるもの、元氣・精力の頼り繋る所の至要物で、些かでも虧缺しては不可である。その必要量は各自身體の大小に應じて一定の比例がある。上述せる如く材料の攝取が過多なのは宜くない。過多ならば浪費が多く益が少ない。故に肉食の量を過ごせば健康を損ふ。同時に肉食にのみ傾けば疾患を生ずる。肉食の分量は老幼の差に應じ同一でない。發育盛りの青年は、肉食が多少過ぎても差支へないが、發育の已に定つた壯年

者は宜しく肉食の量を減少すべきである。老人は更に大減せねば不可である。

夫れ粗食は延壽長命の祕義である。それは現代の科學家・衛生家・生理學家・醫學家の均しく共に認めてゐる所である。就中、中國人の粗食の食物は、生理上最も適合してゐる。ただ豆腐は肉食と同視すべく、肉食同様の効果・作用を及ぼすものであるから量を過ごすは宜しくない。されば飲食物は審さにその精を擇び、同時に其分量も亦身體の需要に適合すべきである。然しただ之だけでは飲食の奥義を十二分に熟知せるものとは謂ひ得ない。

飲食物が口に入つた後、如何に變化するか。又己に之を消化して胃腸に由て吸収し血管に送つた後、如何に其れが變化するか。其の奥妙な作用は、それがまだ口に入らなかつた前の物質に比べて更に知り難いところの事柄である。

食物が口に入ると先づ舌尖きにてそれを試験する。胃腹に適せぬ物は直ぐに吐出し、胃腸の消化に適應する物は滋味として歡納する。かくて歯牙で之を咀嚼し、唾液にて調和溶解する。澱粉質の物は直ぐに糖分に化される。それ以外の精分は歯牙にて嚼み碎き、舌尖きで捲いて食道に送り入れる。食道は之を引伸して胃に送る。食物が胃に入ると、胃の下口は直ぐに密閉されて食物を胃の中に收蓄する。適度の量に至れば胃の生元は腦に報告する。そこで腦は食事停止を發令

する。吾人はこれを覺えた状態を名づけて「満腹」と謂つてゐる。これは胃の作用の一つで、其の都度都度に必要とする攝取物の分量がここで定められるのである。故に満腹を感じたならば直ちに食事を停止すべきであつて、若し更に多食すれば健康を損ねる。食物が胃に満ちると胃液を分泌し蛋白質を消化する。それは恰も唾液が澱粉質を糖化するのと同様である。胃の褶皱は伸縮搖磨運動を起して食物を揉み碎き糜粥と化し、始めて下口を開いて之を小腸に送る。糜粥が小腸の上部に達すると甜肉汁（膵液）と混和する。唾液と胃液とで消化し得なかつた物はここで膵液によつて完全に消化され、どろどろの乳糜となる。それから二十餘尺の小腸を輾轉廻旋して小腸の機關が之を吸収する。廻管から肝臓に入るのである。身體の滋養に適する養分は、そこから心臓に導入され、心臓は之を鼓して動脈に押し出す。かくて身體全體に分配され、生元の滋養及び燃料となるのである。身體の滋養に適せぬ物は肝臓にて之を淘汰して血に混入させない。それは更らに膽嚢に導入し、再び小腸に導き、大便の粘液に利する。小腸に吸収し盡したる残物は乃ち残滓で大腸に送られる。大腸にも滋養分の吸収機關があり、小腸で吸収しきれなかつた滋養分を吸収する。かくて大腸から直腸に送り込んだものは全く身體の用に適せない残滓で、直腸は残滓が溜ると之を肛門から外部へ排泄する。これ飲食の終始過程である。但し食物が消化の過程を経て

血管に入つた後にも種々なる變化が行はれるが、これは専門的に生理學に従事してゐる者でなければ容易に了知出来ない。否、生理學の専攻者でも完全に之を知り盡すことは不可能なのである。

此飲食の事を管む體内の組織に關しては、天然的のもので吾人の本來知り難き事に屬する。飲食物がまだ身體に入る前の各種問題——糧食の生産・糧食の輸送・糧食の分配及び饑饉の防備等の純然たる屬人問題に就ても亦之を知ることには容易でない。

近代國家の實施してゐる民生政策——社會政策——は獨逸の組織を以て最も進歩せるものとされてゐる。而して此次の歐洲大戰がひとたび開かるや、獨逸の海面は英國に封鎖された。それがために糧食缺乏の虞れを屢々生じ社會は忽ち恐慌を起し、國民は種々の苦痛を受けた。かくて二年後に始めて巴特基氏が全國糧食總監に任命された。巴氏は科學的方法を用ゐて糧食經營に當つたので缺乏問題も始めて虞れなきを得、恐慌状態も漸熄し、國民の個人的苦痛も亦漸減した。以後、獨逸は更に能く二ヶ年の久しきを支持し得たのである。若し然らざれば獨逸はもつと早く糧食缺乏のために降伏を餘儀なくされたであらう。

按ずるに巴氏の糧食經營前に於ては民間の食料品購入者は常に食糧店の店頭に黒山のやうに押

寄せ、警察官の取締で辛うじて秩序を維持し、店員は購入者に對し先着順で販賣に従ふことを得た。購入者の方では先着者は所要の品を需め得たが、賣切れとなれば店は閉じられ、後れて來た者は空しく素手で歸るより外なかつた。そんな有様であつたから食料品を手に入れやうと欲する者は多く夜通しがけて、夕刻頃から食料店の前に陣取り、夜の明けのを待つて所要の品を買つて歸るといふ悲惨な光景を演出してゐた。當時獨逸の或る醫學博士はこの光景を諷して謂つた。「油を買はんとする婦人達は六時間とは睡つてゐられない。しかも彼女達の身體に含蓄されてゐる油を消耗した量は彼女達が油店で買つて來た量よりも遙かに多い」と。當時の悲惨な困苦の情景が想像されるではないか。

處で、巴氏の科學的經營法も畢竟、節用と均分的消費を圖るに外ならぬのである。同戰前に於る獨逸の糧食產出額は全國消費高の八割以上を供給するに十分であつた。即ち外國からの輸入は二割前後に過ぎなかつた。然かも各民家の勝手元及び料理屋の臺所で日々冗費される高は二割に止まらなかつた。且つ各個人の日々の食事に於ける必需品以外の攝取物や過食も亦二割を越へてゐた。故に巴氏は先づ第一に各個人の臺所に於る無駄な消費を絶止させ、各個人一日の食糧高に制限を加へ、糧食の供給分配制を實施した。その平均分配は各人一回の食糧何熱率カロリーといふ風に熱

率を以て標準とされた。かく出入の間に浪費を排除し得たので、食ひ且つ綽然として餘裕あらしめ得た。その後更に生産の擴張に従ひ、公園・花壇・運動場および一切の荒地を悉く開墾して田園と化した。一方また種々なる化學的食糧原料を製造したので糧食の缺乏をして全く憂ひなからしめた。前二年間に國民の蒙りつつあつた甚大な苦痛は救済の途なしと見做されてゐたが、巴氏の救済法がひとたび實施されるや、家給人足、食はみな能く均分され、各自所要のものを得、除外の民なからしめた。行ふは難きに非ずして實に之を知ることこそ困難なのである。

總括して之を言へば、食物の口に入りたる後、その消化の作用・吸収の作用・淘汰の作用・身體の構成作用・燃燒作用等の種々の作用は何が之を爲すか。譬へば、或る男が、原料が工場に運ばれ機械の發動を経て精美な製品と變裝され、世人の用に供さるるのを指して曰く、機械がかく仕上げたのだと。可か。不可である。蓋し其れは職工が機械を使驅し精美なる製品に仕上げたのであるからである。體内の消化機關の靈妙なる作用も亦消化機關が自ら之を爲すのではない。體内の生元が之を掌理してゐるのである。由此觀之、體内消化の事たる人々之を行ひ而して終身其の道を知らざること既に斯くの如くである。而して身外の食貨問題に關しても人々之を心得てゐるとは謂へ、全般的に其の理の不明なること又彼の獨逸の場合に於るが如くである。以て「之を

行ふは難きに非ず、之を知るは實に至難である」ことを立證するに足るであらう。
或は曰く、飲食の事柄は天性の然らしむる所、故に終身之を行ひ而して其の道を知らないのである。其餘の人事的事柄に至りてはこれを同日に語るべくもあるまい、と。余は更に下章に於て人事的行爲に關する事柄を以て余の説を驗證するであらう。

第二節 用錢を以て證と爲す

余はこの章で用錢——金錢の使用・效用・用途——の問題を擧げて「行易知難」の驗證を試みるであらう。

夫れ人生に於る金錢使用の一事は先天的本能ではなく、後天的習慣である。凡そ文明社會に生存する人類は幼少の時から之を使用し以て終身に至る。而して如何なる時に於ても吾人の身邊に介在し、媒介をする。飲食にも錢を用ひねば不可であるし、衣服にも錢を用ひねば不可である。居住にも錢を用ひねば不可、旅行にも錢を用ひねば不可である。吾人は日日之を行使してゐるので恰も自然的存在物かの如くに之を見做してゐる。而して錢さへあれば萬事意の如く、之を使驅すれば資源を自由に開拓し得ることを知つてゐる。錢の行使が不可能ならば人生の事は何一つ解

決し得ず、萬事が滯滞して進退維れ谷る。故に孜々として金錢の獲得を求め、之に頼らんとせぬ者はない。社會が愈々文明となり、産業が愈々發達すれば、金錢の效用は愈々絶大となる。金錢の用途は愈々廣範となり、人生の生死禍福・悲喜憂樂が、殆んど悉く錢の支配・裁斷に委ねられる。茲に於て金錢萬能の觀念は益々深刻に人心に食ひ込む。人類の錢に對する觀念は既に斯の如く切要なるものがある。また人間の金錢使用はかく慣習的となつてゐる。然らば錢は畢竟、何物であらうか。如何なる性質に屬するか。世に之をよく知る者幾人ありや。

余は今讀者と共に先づ金錢の性質に就て之が研究を試みやう。

「貨幣は貨物を易へ以て有無を通ずる所の物である」と古人の言に見えてゐる。泰西の經濟學者も亦かう述べてゐる「貨幣も亦貨物に屬する。而して二つの重要な效用を具有してゐる(一)能く百貨交易の中介(媒介)たり得ること(二)百貨價格の標準たり得ること」そこで余は此の二つの效用を一括して「中準」と創名し、かく呼ぶことにする。處で、この語を用ゐて次の如き簡明な定義を下しておく。即ち「貨幣とは百貨の中準である」と。

中國上古の貨幣は、最初、龜貝・布帛・珠玉を以て之となした。次いで金銀銅錫が之に代つた。現今文化未開の種族社會に於ける貨幣は多く吾が上古初期のそれと同様である。遊牧の國で

は牛・羊を以て貨幣となし、漁獵の郷では獸皮・貝類を以て貨幣となし、耕種の民は果實・粟を以て貨幣となしてゐた。現在、蒙古・西藏では尙ほ鹽・茶を以て貨幣となしてゐる。要するに貨幣の種類は一種類に止まらない。各種族はその最も便宜な物に基き、それを採つて貨幣となしてゐるのである。専門の貨幣學者は次の如く論じてゐる。

凡そ物質にして百貨中準の效用をなすに最も貴重なる次の七種の重要性を具備してゐれば貨幣そのものの選擇に適合する。(一)價値の標準となり得ること(二)携帶に便なること(三)磨滅破損せざること(四)品質の純淨たること(五)價値の變動少く一定の價値を保有し得ること(六)分開し易きこと(七)識別し易きこと。

凡て貨物でこの七種の性質を具備するものは優良の貨幣となり得るのである。

周代の貨幣制度は、黄金を以て上幣とし、白金を以て中幣とし、赤金を以て下幣とした。秦は天下を併吞すると、幣制を統一し、金鎰・銅錢を貨幣と定め、珠玉・龜貝・布帛・銀錫の類を廢して貨幣となさなかつた。周・秦の後、屢々幣制上の變革を見たが大體に於て金銀銅三種の金屬を以て貨幣となすに一致してゐた。而して現今の文明各國も亦この三種の金屬を貨幣に採用してゐる。金を以て正貨とし、銀銅を補助貨とし、或は銀を正貨として銅を補助貨としてゐる國もあ

る。古今中外孰れも金銀銅を貨幣に採用してゐるのは、其の品質が百貨の中準に適するからである。されば凡て生産物にして百貨の中準に適合するものは貨幣たるの資格をもつてゐる。而して金錢も亦貨物の一種たるに外ならない。

然らば何を以て今日金錢のみが獨りこの萬能作用を具有するか。答へて謂ふ。金錢は本來、無能力なものである。金錢の機能は乃ち貨物——生産品——の買賣によつて生ずるのである。若し貨物がなければ金錢は泥沙に等しい。貨物あるも買賣・交易が行はれねば金錢は效力を有さない。茲に二つの事例を擧げて之れを明かにするであらう。

今から數十年前、山西・陝西兩省が大饑饉に襲はれ、人間同志が共食ひをし、千餘萬の饑死者を出したことがある。元來この二省は、その昔「沃野千里・天府の國」と稱された程に、物産豊富、金錢至多で各省の金融業者は皆山西人か然らざれば陝西人で厚利を獲得せぬ者はなく、年々各省の金を自省に持去り巨萬の富を祕藏してゐる者の數は夥しい。處が、連年の大旱魃に五穀實らず、物産日に竭き百貨は耗盡し、ただ錢のみが減ずることなく残存した。而して餓死者はと謂へば巨萬の富を擁した資産家で、類々皆之であつた。即ち萬金を以てしても一粒の粟に易へることが能はなかつたのである。かくて竟に富豪も貧者も歸する處を同じくして終盡したのである。

蓋し貨物無ければ金銭の機能は完全に消失するものなのである。又讀者は曾つて「ロビンソンクルソー」の漂流記を読んだことがあらう。身を冒険に委ねた彼は巨金を携へてゐたが、船の難破から無人島に漂流し、金を挾んで上陸して島地をめぐる。風光の明媚、人に親しみ樂しませる花鳥、林には果實が實り、石上の清泉は掬すべく、此の時島内の萬象は悉く彼の所有に外ならず、財寶は彼の欲するがまゝに之を取るも禁ずる者はなかつた。之を用ひて竭す矣、の境涯に彼は身を置いてゐたのである。さりながら彼は飢ゆれば自ら果實を取つて飢に充てねばならなかつた。渴すれば自ら泉水を汲んで渴を療さねばならなかつた。自己の力で衣食の途を講ぜねば生活してゆけぬのである。この孤島に於ては財寶も食物も豊富ではあつたが、買賣がないから金銭は無用に等しい。此の孤島での人間生活の依り所は金銭にあるのではなく、たゞ自己の勞力あるのみである。金銭萬能か。勞力萬能か。然り金銭が文明社會に於て萬能的效力を生ずるのは、それによつてあらゆる資源を盡求し得るからである。

余は更に讀者とともに金銭の效用に就て研究を試みやう。

夫れ金銭の威力は買賣によつて示される。が、買賣は元來、金銭の出現に由て起つた經濟現象である。故に金銭がまだ出現しなかつた時代には買賣と云ふことはなかつた。然らば其の時代に

於て金銭の誘因をなしたものは何であつたか。また買賣の導線となつたものは何であるか。それを穿鑿・検討したならば始めて能く金銭の效用に就ての蘊奥を窮めることを得るであらう。

金銭の誘因・買賣の導線を知るためには、人文進化の起源に溯つてこれを尋ねねばならない。按ずるに今日未開化の種族の大部分は各小部落を成し、深山・幽谷に棲み、自ら耕して食ひ、手づから織りて衣、鶏犬の聲を友とし、老死相往來せず、其の風氣は吾が古籍に記載するところのそれの如く質朴淳良である。その稍や開化せる者は河流や原野に居を構へ、その土地は肥沃で物産は豊富に交通の利便もある、茲に於て部落と部落との間に始めて交易が行はれてゐるのを見る。此の嚴然たる事實は今に由て以て古を證するものであらう。これによつて吾々は次のやうなことを推知し得るのである。

古代未開化の時代に於ても人類は各々部落を成さぬはなく、自ら耕して食ひ、手づから織つて衣、自給に満足し外部からは何物をも求めなかつた。稍開化時代に入ると交易が行はれ、それに従事せぬものはなかつた。舊態を墨守する者と雖も交易を許し、粟を以て冠と易へ、粟を以て器と易へねばならなかつたのである。實に交易こそ買賣の導線をなしたものである。或は問ふであらう、「交易と買賣と何の區別があらうぞ」と、交易は貨を以て貨に易へるのである。買賣は錢

を以て貨に易へるのである。貨幣のまだ出現しなかつた時代に於ては、世の中にはただ交易が行はれてゐただけである。蓋し自ら耕して食ひ、手づから織りて衣、一人或は一部落にて生活に缺くべからざる種々な仕事を兼ねてゐたが、かくては耕作に支障を來す場合や手織に差障りを來す場合が起り、通工分勞の利の大なるに如かぬので、耕作者は耕作に専念し、織者は手織に専念し、時間の浪費、仕事の失敗の憂ひを無くし、僅かの勞力を以て甚大の成果を得るの效を生じた。これより生産は増加し、各自餘分あれば交易した。これ交易の自耕自織に比して進化せるの所以である。交易の發生後、人類は漸やく農工を兼ねることを免がれたが、商を兼ねることを免れなかつた。何を以てかく言ふか。則ち農耕者は粟の餘分あれば其粟を持出して交易を求めねばならず、織者も亦布の餘りあれば其布を持出して交易を求めねばならなかつた。これらから類推して漁師・獵人・牧者・樵夫・工匠・鍛冶匠等は皆それぞれ自己の所産の剩餘品を持出して交易を求めねばならなかつたのである。然らざれば、各自の所産の剩餘物は之を他に棄てねばならぬ虞れがあつた。一方不足者は所要の物品の取得方法がなく、一人で農工兩業を兼ね不便障礙と戦はねばならなかつた。かくて交易の發生に由て農工を兼ねることは除かれたが、各自は商を兼ねることを免れなかつた。それに交易には少なからぬ缺陷もあつたし、また種々な不便と困難を多く

伴つてゐた。近年の著である「ウェルス」氏の南洋遊記には次のやうなことが記載されてある。彼が未開化の郷に到つた時には終日一食を得ぬやうなことが屢々あつた。それは土蕃の間には買賣がなく、金の效用を識らないからであつた。それに用意して行つた交易品は蕃人達の需要に適合してゐないので食物と交換が出来なかつたのであると。

又、古人や野蕃人の社會では次に述べるやうな困難には屢々遭遇したことであらうと想像される。

則ち農夫は粟の餘分をもち布を得やうと欲して粟を携へて織匠の處に赴いて粟と布と交易せんことを求むる。併しながら織匠は粟を欲せず、羊を欲してゐるとすれば粟を餘分に所持してゐる農夫は困却する。織匠はこの所持する餘分の布を携へて牧者の處に赴き羊と布と交易せんことを求むる。處が牧者は布を欲せず器を欲してゐるとすれば織匠は早速困却する。牧者はその餘りある羊を牽いて工匠を訪ね、羊と器とを交易せんと求むる。併しながら工匠は羊を望まず粟を欲求してゐるとすれば今度は牧者が困る。工匠はその餘分の器を携へて農夫に向ひ粟に易へて貰ひたいと望む。處が、農夫は器を欲せず布を手に入れんとしてゐる。そこで工匠も亦困却する。此の四者は各自餘分の財物を有し、その中の一人が所持する剩餘物を需めてゐるのであるが、其需む

る所と提供物とが互に食ひ違つてゐる。それがために四者共に交易が出来ず困却してゐるのである。

太古の未開時代には交易機關はなかつた。其れがために勞のみ多くして獲る所が少なかつた。而してかかる状態下に於ては文化的進歩は全く期待し得ないのである。神農氏はここに見る處があつて民に「日中に市を爲す」ことを教へ、天下の民を寄せ、天下の貨を聚め、交易して退き、各々其の所を得さしめた。ここに日中に市を爲すの制が生れ、交易上の困難が除かれた。上述の四者は同時に市に赴き、一地に集合し、各剩餘の財物を持出し以て需むる處の物を求め、彼我轉接し、錯綜交易して各其の所を得た。これ時間、空間を利用せる交易機關となす。日中に市を爲すの制がありて以後、交易機關は發生されたのである。茲に於て貨物を以て貨物に易へ、有無通じ各省の所持する貨物は能く暢達して阻まれる所がなかつた。貨物は貨幣と異るとは雖も其の效果に於ては同様であつた。故に余は茲に於て創言して曰く「日中に市を爲すの制は實に今日の金錢の根源をなしたものである」と。

世界の經濟學者は多く金錢の根源は交易にありとなしてゐる。其れは交易時代に中介機關の存在したことを知らぬからである。それは恰も買賣時代に中介機關が有るが如くである。買賣時代に

於ては金錢を以て百貨の中介となしてゐる。而して交易時代に於ては日中に市を爲すことを以て百貨の中介をなしたのである。人類は媒介機關を利用することによつて能く交易して退き、各々その所を得るの利を受けた。これを利用せねば生活上に交易上に種々な困難・不便を受けねばならなかつた。そうして未だ金錢の出現しなかつた時代に於ては、人類の交易に於ける便利は、日中に市を爲すの制に過ぎるものはなかつた。故に余は謂ふのである「日中に市を爲せることが金錢の根源である」と。

日中に市を爲すの制が興つてから交易は愈々通じ、百貨は愈々出て、人類の勞力の濫費は漸次に省け、同時に人類の欲望も亦漸次に啓けた。茲に於て必需品の交換にのみ止まつてゐた交易は今や漸進して、必需品にあらざる裝飾品、玩好物などが交易されるやうになつた。かくて之等の裝飾品、玩好物たる龜甲・貝殻・珠玉の如きものは轉じて百貨の中準となつたのである。これ貨幣の起源である。此故に貨幣とは本來、不急の物——冗物——である。ただ物々交易が漸變して買賣となつた後に於て貨幣の效用は至大となつた。貨幣を以て貨物と易へるやうになつてから需要・供給の作用は圓滑となつた。生産の剩餘あればこれを賣却し得、また足らざるものは任意に購求し得ることとなつたのである。またこれが媒介を專業とする者が生れた。即ち商人であ

る。今や人々は直接交換を要しなくなつた。乃ち貨幣の出現によつて人類の勞力は更に一層節約され、生産者は勞力を生産に集中することが出来、生産率は増進された。之を日中に市を爲すの利に比すれば其の効果の甚大なる幾層倍と謂ふべきであらう。人類は貨幣の利用を得るに於て、進歩の加速・文明の發達・物質の繁昌、駭々乎として一日千里の勢を示した。想ふに中國の貨幣の起源は神農氏の日中に市を爲すの制の後にあらう。而して周代に至つて『文物の盛、己に大備せり』と稱されてゐる。其の間前後二千年に過ぎない。しかも周代の文化は古に超絶せるのみならず、吾が後代の文化を以てしても及ばざる所である。これ實に貨幣發生の齎せる一大躍進とすべきである。

由此觀之、貨幣は文明の一重要利器である。世界人類は貨幣を有して後、乃ち能く野蠻より一躍して文明に進んだ。貨幣が出現して數千年の後、始めて近代の機械が發明され、機械の發明後、人文の進歩は更に高く更に速かに、而して物質の發達は既往に超絶した。蓋し機械は天地自然の力を制御し以て人力に代つた。前時代に人力の到底爲し能はなかつた事も機械はよく之を成し遂げ、その重務に堪え得るのである。一指、まさに萬人の負擔に當る。遠くは一日數千里の道程に達し得べく、之を以て耕せば、一人にて數百人の穀物を收穫し得る。之を以て織らば一人に

て數十人の衣を織り得る。この一大躍進を経て茲に産業革命の成就を見、天地の更新となつた。而して金錢の威力はここに至つて已にその效用を失した。何を以て爾言ふ。

夫れ機械の未だ出現せざりし時代に於ては世界の生産は全く人工に委ねられてゐた。で、取引高も亦金錢效用の範圍外に出ることがなかつた。然るに今日世界の生産は、人工と自然力の綜合によつて行はれてゐる。其の生産高は手工業時代に較べて幾千萬倍となつた。同時に其取引高も亦幾千萬倍となつたのである。即ち今日の産業取引は已に金錢效用の範圍外に出たのである。故に大宗取引は現金を殆んど用ゐず手形を使用してゐる。

譬へば今此處に四川省の商人が百萬元の貨物を上海に運び、之を十回に分けて賣捌き、其都度一割の利益を收むれば、取引毎に十一萬元を得る。若しこれを現金で受取ると現行の一元銀貨で換算して毎回四千九百五十斤に相當し、銀貨で換算して毎回四千九百五十斤に相當する銀を受取らねばならない。一々之を收め之を藏ひ、然る後更に市場に往つて仕入をする。これ又十回に分つて仕入をする。其都度貨幣の取引の外に現金の受け渡しを要する。かく一商人が生産品を十回に分つて賣却し、一回毎に巨額の現金を受取り、更に又他の貨物を十回に仕入れ、其都度現金で支拂をする。斯様な取引をやつてゐたのでは、時間の空費・心勞の消耗、全く煩に堪へないので

ある。然も同様の取引が各方面で行はれる。乃ち何百何千の大商人がそれぞれ數百萬といふ大取引をする。それが爲に各自が同様に數日の時間を現金受渡しのために空費して處理せねばならぬのである。今各自が百數十萬元の取引をしたと假定する。十人で千數百萬元、百人で一億數千萬元となる。かくも巨額の現金が一市内に存してゐるであらうか。故に大宗の取引は最早、金錢の力では如何ともし難くなつた。金錢の效用には自ら限度がある。然ると否とに拘らず漸次手形の流通が貨幣に代りつつある。然るに人類はまだこの變革に氣付かないのである。然らば手形は如何なる效用をなしてゐるか之は商業界に身をおくものでなければ一寸聞いただけで直ぐ了解することは困難であらう。前述の四川省の商人の場合に就て言へば百萬元の貨物を上海に運び十回に分つて取引し、一割の利益を收め、第一回到十一萬元を收得する。この十一萬元は四千九百五十斤の現金ではなく、上記の金額を書き込んだ一枚の紙片に過ぎない。この書付は銀行手形とか、金融業者の振出し手形とか或は取引先の小切手乃至約束手形若しくは支拂期日を明記した支拂證文といふ類のものである。即ち彼の商人が十回に賣却した貨物の代價として十枚の書付が遣り取りされただけである。乃ち貨物の受渡しの外、現金の受渡しは行はれない。四川の商人が上海で仕入れた貨物も上記の如き書付の讓渡で取引されたのである。かく二重に行はれた取引は貨物の受

渡しがあつたのみで、主客の間には四萬九千五百斤の現金運搬の勞は省かれたのである。且つ運送の際に起る種々の危険、即ち盜竊・遺失其の他の危険を免がれた上に時間の節約、煩務の省略、及び安全にして憂なきを得、利する所甚大である。一取引に於て已に斯の如くである。社會全般の商取引上の利益に就て謂へば其利する所幾許たるを知らない。故に今日の文明社會に於ては手形を用ゐずしては取引は不可能である。猶ほ金錢萬能と云ふや。而して世の多くの迷蒙者は依然、周末時代の考へと異なる處がない。農家者流の徒は依然自ら耕して食ひ、手づから織つて衣るの舊習を墨守してゐる。彼等は、日中に市を爲すの制がひとたび興つて以來、自ら耕して食ひ、手づから織りて衣るの兼業が廢り、金錢の出現によつて日中に市を爲すの制は廢れ、更に手形の出現によつて金錢の效用も廢れつつあることを知らぬのである。

民國元年の折であつた。余は曾つて貨幣を廢し、之に代ふるに銀行券を以てし、以て國家の困窮を紓め産業の興振を計らんことを提議したが、これを聞いた者の間に動搖が起つた。而して全然不可能な事だと思つたやうである。然るに今次の歐洲大戰に世界の各國は多く貨幣を廢して紙幣を行使せしめた。これは全く余が七年前に主張した所のものであつた。蓋し之を實施するにその法を得ば紙幣と貨幣とは其の效用に於て等しい。或は謂ふであらう。『元明兩期は孰れも紙幣

を發行したために國民の窮乏と國家の疲弊を馴致し卒ひに亡ぶるに至つたではないか」と。或は又、かう謂ふであらう。「米國の南北戦争の際に於ても亦紙幣を發行しこれが害を受けたではないか」と。そは何故か。答へて謂う。それは紙幣の亂發に陥つたからである。其發行に限度なく遂に紙幣のみ多く市場に流出し、それに伴ふべき貨物が少なきに失したからである。又謂ふであらう「北京に於て去年、不兌換令を發したが、之貨幣を廢し、之に換へるに紙幣の發行を以てせるものではないか、どうしてその効果を見ずして、而も却つて市面の恐慌と人民の困苦を出態したのであるか」と。答へて謂ふ。北京政府の不兌換令は、人眞似的な無定見極るもので、其一半を學び、他の一半を識らない。不兌換制を確立するためには紙幣の不兌換を實施すると同時に政府は現金を收納すべきではない。然るに北京政府は不兌換と同時に現金を收納した。これ貨幣を廢せずして不兌換紙幣の流通を強制せるものである。換言すれば流通券を以て金錢の欺取を計つたに外ならない。これ北京政府の失敗せる所以である。英國に於ては不兌換紙幣の發行と同時に現金を受納せず、凡そ政府の賦税、借債其の他一切の國庫收入は紙幣でなければ受取らず、其歳費の支出、毎日六七千萬元は全部紙幣にて發給した。而も市場の流通は些かも凝滯する所なく、國民は歡んで之を行使した。そは何が故で在るか。即ち政府は數ヶ月間に必ず公債を發行した。一

回の募集額數十億萬元は悉く紙幣で受納し、現金は絶対に受取らなかつた。現金所持者は物品購入や納税の場合には銀行で現金を紙幣に換へて貰はねば用をなさなかつた。然らざれば現金は廢物に等しかつた。これ英國の採用した不兌換法である。然るに北京政府は其の發行にかゝる紙幣を受納しない。之自ら破産を宣告するに異ならない。天下豈に自ら信ぜざるの券を以て能く他人をして之を信ぜしめ得やうぞ。奸商市儈と雖も猶ほ且つ斯の如き奸策を弄しない。而して堂々たる政府が之をなすとは其愚も甚しい。これ皆貨幣の效用を知らざるが故に起る失態である。世人よく錢を用ゐて而して錢の效用を知らない。古今内外、類として皆然りである。

昔、漢は秦の疲弊を承けて興り、丈夫は軍旅に従ひ、老弱は糧餉を運び作業劇しく、しかも財政に窮した。で、最初におもへらく錢の少きためにかくも困窮するのであらうと。そこで人民をして錢を鑄造せしめたが、後に錢徒らに多くそれに悩まされた。で、直ちに人民の鑄錢を禁じたといふが、これなども其の當を得ぬ結果の反映である。

それ一國の貧富は錢の多少にあるのではなく、貨物の多少と貨物の流通如何にある。漢の初、貨物少く、爲に困弊し、後には貨物の流通不能のために又困憊した。茲に於て桑弘羊出て均輸平準の法——物價調節策——を行ひ、天下の貨物を盡く封じ、市價貴ければ賣り、賤ければ買ひ以

て民の用を均ふし而して國家を利し、遂に國は饒に民は足るの效を收めた。弘羊は實に錢の效用を知るものと謂ふべきである。惜むらくは弘羊の後、其法行はれず、遂に今日の中國の如く金錢の困厄を受けること昔に較べて一層甚しき状態に至つた。

歐洲大戰の勃發するや交戦國は國を擧げて從軍し、生産は停滯し、貨幣價値は低落した。そこで各國政府は全國の産業事業を悉く國家經營に移し、戦費の調達に便すると同時に國民の消費を調節するの策をとつた。此の政策は先づ獨逸によつて實行され、後に各國も之に倣つた。之また弘羊の遺策を繼げるものである。

歐米の經濟學者は人類の生活程度を分けて三段階となしてゐる。第一は必需段階で此の段階では所用の貨物に缺乏を來せば安適を得られない。第二は安適段階で此の段階では所用の貨物に缺乏を來せば安適を得られない。第三は繁華（奢侈）段階で此の段階では所用の貨物は有つてもよし無くてもよい。有れば生活上に其快樂を加へ、無くも亦安適を妨げない。此の生活段階は、これを同時代・同社會の人間生活に就て論ずると一方には必需程度の生活を營でゐる者があり、他方には安適生活を、また一方では享樂主義の生活を演つてゐるといふ風で其の限界は甚だ模糊としてゐるが、これを時代的に論ずると、其限界は頗る明瞭となる。で、余は時代的論據に

立つてから謂ひたい。貨幣のまだ出現しなかつた時は必需時代である。蓋し當時に於る人類の最大の欲望は僅かに暖衣飽食を求める程度に過ぎなかつた。これ以外の何物をも求めやうと欲しなかつた。事實また他の物を欲求しても求め能はなかつたのである。貨幣の出現後は即ち安適時代である。蓋しこの時代に於ては人類の欲望は始めて必需品以外の物を求めるやうに啓發された。否、此の時代に入つて始めて人間社會には安適生活をなすべき幾多の生産品を見るに至つたのである。機械の發明以後が即ち奢侈時代である。蓋しこの時代に於て漸く生産の激増・過剰を生じ、貧を憂ひとせず、分配の不均衡を憂へるといふ社會現象を生じたのである。而して産業發達の國は市場の擴張・獲得に汲々とし、生産の販路を海外に求め、所謂對外貿易政策を採るに至つた。而して文明社會には奢侈を以て世を利するものだとの謬見をさへ見るに至つた。

此の三時期の進化に由り貨物中準の變遷を知ることを得やう。故に曰く必要時代は日中に市を爲すことを以て金錢となした。安適時代は金錢を以て金錢となした。繁華（奢侈）時代は手形を以て金錢となした。此の三時代の交易中準は各々其の時代に於て孰れも人類の最大幸福を造成する上に寄與してゐる。そしてまた其の目的を達するためには之を用ひ、之に據らねば不可であつた。然り同時にまた前時代の中準物が併用されなかつた譯ではない。日中に市を爲すの制度が實

施された後に於ても自ら耕して食ひ、手づから織つて衣るの自給自足の原始生活を營んでゐるものはあつたし、金錢の出現後に於ても日中に市を爲すの制は並行された。吾が國の都邑の緣日、特産物農産物の市の立つことなど皆それである。且つ未だ繁華時代に入らざる時代に於ても人類は己に早く手形を使用してゐたのである。唐の飛券鈔引(註、甲地の券を携へ行きて乙地で現金を受取る即ち爲替兌換券)宋の交子・會子(註、前者は慶曆年間、蜀人が現錢携帶の不便から起つた私券。後者は高宗の末年に發行された官制紙幣)は即ち之である。但し現今の取引に於ては手形を用ゐねば商業上の活動は不可能なのである。同時にまた金錢を併用することも己を得ない。ただ手形を用ゐることの便にして利の大なるに如かぬのである。これ又用錢者の知つておくべき所であらう。

吾が中國今日の生活程度は尙ほ安適時代にある。蓋し吾が農工事業は人力に依つて生産されてゐる、未だ機械を使用し自然力を制御する所の蒸氣・電氣・火力・水力等を以て人工を扶ける方は普及されてゐない。故に開港・通商の後、吾が商業が立ち所に失敗を見たのは洋商の金力が我に勝つたのではない。實に外國からの輸入貨物は輸出に比し年額二億萬元以上を超過し、従つて現金の流出も年々二億萬元以上にある。一年で二億萬元、十年で二十億萬元。若しこの状態が將來に長く續くなら銅山・穴を所有することもこの流出を遮るべくもないのである。而して民は

窮し、財は渴くるの日を迎へねばならぬのである。即ち吾れもまた機械を使用して生産の激増を計つたならば能くこの窮乏状態を救済し得るであらう。

按ずるに産業發達國に於る年々の所得利益は一人平均七八百元を計上してゐる。而して手工業時代にある吾が國の一年の所得利益は老幼男女を推算して平均一人の所得七八元に過ぎない。若し吾が國人もよく機械使用の技術を修得し、生産力を助けるに於ては前記産業發達國と同様の効果を獲得し、現在各人一年の所得七八元をして一躍七八百元に達せしめ富力は今日に百倍するであらう。かくて吾が國も初めて繁華の段階に進み得るのである。

近世、歐米各國の物質的發達は産業革命の影響によつて突如的現象を示した。そうして各個人の生活程度は安適の地位から忽然として繁華の地位に進んだ。其の社會的影響はまことに「ジョージ・ヘンリー」氏の著「進歩と貧困」に記述されてゐる通りである。現代の文明進歩は恰も一本の錐を社會の上下階級の間突き刺して揉み廻したやうなものである。其の尖端たる上部は極少數の資本家によつて占められ、錐の廻轉につれて上に昇る。錐の下部には大多數の勞働者が群居し錐の廻轉につれて下へ、下へと揉み落される。かくして富者は愈々富み、貧者は愈々貧するこの事實は何を物語るか。それは産業革命の結果がその人群に寄與した處の恩恵は極めて少數の

人に限られ而して人群に與へた苦痛は極めて大多數の人に與へられたことを語つてゐるのである。故にひとたび産業革命を終るや社會革命の風潮は凄じい勢で擡頭したのである。蓋し不平既に鳴る！。大多數の人間が極少數の人間の犠牲に供されてゐるといふ事態が永續せぬのは公理の然らしむる處である。

人群の大多數がこの極大の痛苦を受けた所以は變計以て時勢に應ずるの途を知らぬからである。因に手工業時代に於ては豪強の壟斷を制し、商人を放任して自由競争をなさしめた。一般國民は之に因つてその利を享受したのである。この事たるや之を世に行ふ數千年矣、然るを「スミス」氏始めてその理を發見し、之を鼓吹し、十八世紀の末、其著「富國論」の一書が世に現はれるや世を擧げて驚倒し、恰も聖書の如く之を奉じた。蓋しこの事は既に世に行はれてゐた事であり又人の習得してゐた所であつたが、説明されてゐなかつたために「スミス」氏の道破する所となつたのである。卒直に謂へば人の言はんと欲して言ひ能はなかつた所を看破したが故に世の歡迎する所となつたのである。而して今日に至るも猶之を信奉してゐる者がある。

「スミス」氏の著書が世に出て百年を滿たぬに産業革命が馴致された。この革命を経た後世界は機械を使驅して生産に従つた。而して機械の所有者は其財力を以て天下を鞭ち、四海を宰制す

るの資格者となつた。この時代に於て猶ほ自由競争の訓を守るのは之れ恰も跋が自動車と競争するに異るなく、僥倖を期待し得やうか。これ「ビスマルク」が國家社會主義を獨逸に於て行つた所以である。而して各國は相前後してその制度を效つた。「ビスマルク」の如きは金錢の效用を心得し者と謂へやう。まことに近世の桑弘羊とすべきか。

由此觀之、人文の進化を綜攬し、詳に財貨の源流を究むるにあらざれば金錢の效用を知ること出来ぬ。又、經濟學を研究し、商工業の發達史・銀行制度・幣制の沿革等を究むるにあらざれば金錢の現状を知ること出来ぬ。

要するに今日の歐米の一般人の金錢に對する知識も亦中國人士のそれの如くただ金錢萬能の一事を識るに過ぎない。彼もまた深く知る所がないのである。經濟學者も亦金錢は元來物貨であるといふことを僅かに知つてゐるだけである。而して社會主義者（余は之を名づけて民生學者と曰ふ）のみが、始めて金錢は實に勞働に基くものなることを知つてゐる（これ勞働全收權主張者の言である）此の故に萬能とは勞働であつて金錢ではない。故に余は謂ふ。世人は錢を行使し得るに止り錢の本質に就ては知らない。これ「之を行ふは難きに非ず之を知るは難し」の證となすに足るであらう。

第三節 作文を以て證と爲す

余は更に中國人の文章を以て「行易知難」の驗證を試みるであらう。

中國は數千年來、文を以て尙しとなし、上は帝王から下は庶民・山賊・海盜の徒に至るまで文藝を羨仰せぬ者はなかつたのは其弊である。文に湛能なることを以て萬能とし、多數の俊才が百藝を放棄して一圖に文に力を傾倒した。之が國勢を弱めた所以でまた民情の進まなかつた所以である。さりながら其文章に就て論ずるならば、まことに豊麗殊絶と謂はざるを得ない。庖羲の畫封から今日に至るまで文・字の進歩は滯ることなく遞進して五千年を逾えた。現在吾が四億の民衆は悉く讀書し得るとは謂ひ得ないが、しかし吾が中國文字の直接間接の陶冶を受けたものは獨り吾が民族ばかりではなく日本・高麗・安南・交趾の諸族は皆其影響を陶冶享け同文と稱してゐる。文字の永續性に就て言へば遠く「バビロン」・埃及・希臘・羅馬の死語に遙かに優つてゐる。又文字の傳布流用に就て謂へば、英語は現在最も廣く流布されてゐると言ふが其數は二億人であつて、中國文字の使用總數の半にも及ばないのである。蓋し一民族の進化は文字の暢達・至能なる點にある。それは誠に容易なことではない。しかも其文字の勢力はよく四隣に普及し、他

民族を同化し惹きつけた。故に吾が中華民國は五千年前僅かに黃河流域の一小區に生棲してゐたに過ぎなかつたが、今や永き歴史の進展を経て世界無二の鉅國を形成したのである。もつとも其積弱は屢々異民族の吞噬を蒙らぬではなかつたが、侵入民族は中華民族を同化し能はなかつたばかりか、反對に中國に同化されたのである。文字の功の偉大なることよ。

今日新らしき教育を受けた學徒中には中國文字廢止論をなす者があるが、余はこの議論に對し、中國文字は斷じて廢止する要なきものであるとの反對意見を抱くものである。余が前章に所述した機械並に貨幣に關する問題は物質文明に屬する事柄で其の使命は人類の物質生活をして安適・繁華に向はしむる點にあるが、文字の用は之とは異り、人類の精神文明の發達を支援するにある。此の人類進化の二要素たる物質文明と精神文明とは事實上に於ては相關關係をもち、相俟つて發展するものである。従つて近代の物質文明の進歩に缺けてゐる中國は精神文明の進歩に於ても遲緩的たるを免れない。けれども吾が古典の研究はこれを埋没して了ふべきではない。中國近代の文明程度は之を歐米の其れに比較して物質的方面は遙かに遠く及ばないが、精神的方面は彼に及ばぬ點もあるが、また能く彼に頡頏し得る點も少くない。而して彼の我に優れる點も所謂比較的のものたるに過ぎない。故に中國文明を一概に抹殺して了ふなどは思ひも寄らぬことであ

る。且つ中國人の精神上の理想は古人の打ち建てた軌範に基いてゐるのであるから、其の進歩改良を圖らうと欲する場合には須らく遠祖の精神的理想に就てその源流を究め、其利害得失を考察すべきで、かくて偏頗な理想を匡正し、弊習を救済するの途を知り得るのである。

由來、文字は思想傳授の媒介を勤め來つたものである。其效用は貨幣が貨物交換の仲介をなすのと相ひ類してゐる。そこで中國の文字を廢絶したなら又何に由て古代思想を研究し得るであらうか。

抑も人類有史以來、四五千年の事跡が眞に間斷なく記述されてゐるのは獨り中國文字が有るのみである。されば學者にとつて之程の貴重なる文獻はない。想ふに吾が古典を涉獵し、利用したならば古人が諸制をいかによく運用し、危險に墮ちなかつたか、又古人が人を使役して、奴隸となさなかつたか、其の真相を知り得やう。然し之等の事柄は皆吾が典籍に俟たねばならない。そして吾等は古人を吾等の書記として此の方面の研究の糸を操ることが出来る。

歐米の學者は埃及・「バビロン」等の文學に對し、國は亡び種族は滅し既に久しく用ひられたこともなくまた現に用ひるに適せぬところの文字の破片を蒐め、其の破碎の集積の中に彼等古代文化民族の舊跡を見出さんものと苦心してゐる。これは古人の思想が現代の學問にとつて資とする

に足るからである。されば中國の文字をいかでか廢止し得やう。但し中國の言文は一致してゐない。本來文字の源は言語から出てゐる。而して言語は時代に隨つて變遷し、文章を形成するのである。吾が國の文體にも古今の別があるが、それは言語の變遷に隨つて變化し得なかつた。故に三代以前、即ち文字が創成された時代に於ては文化は黃河流域の一區域に限られ、言語と文章とが一致してゐたことは疑ふ餘地がない。周代に至つて文化四播し、黃河流域外の巴庸荆楚吳越江淮の諸族も中國の文字の感化を受けた。然して各族は之を習得するにそれぞれ方言を以てした。茲に於て言文は始めて分れた。言文分離の最初の岐路はここから發生されたのであつた。周が衰へて戎狄、四方から侵入し、ここで外來の言語が中原に混入した。降つて五胡乃至五代更に遼・夏・金・元に及び各々その力を以て中國を蠶食し、其言語も亦湖北に遺留されなくてもなかつた。而して文字と言語とは益々相ひ距り相ひ異つたのである。漢朝以後文字は事に踵いで増加され修飾された。一方言語は各々便する所に隨つた。茲に於て最初は極めて僅かであつた岐れ目が各々その路に向つて馳せたために、しかも相當永い期間に互つて繼續されたために相ひ距ること愈々遠くなつた。

顧るに言語には變遷があつたが進化がなかつた。之に反して文章は古代に於てすら修飾・技巧

の術は日々精研を極めつつあつた。故に中國の言語は世界中の最も疎劣なもので文章なら達し得るところの意思が言語では傳達されないことが往々にある。これ即ち中國人は決して文章に巧みでないのではなく言葉の使用に拙なる者なのである。同時にまたかういふことが謂へる。文章は後世に傳へ得る性質のものであるが故に故人の作を模倣することも難くない。處が、言語になると、古來修辭に妙を得た傑出的人物も無かつた譯ではないが、その風流餘韻の寄託する所なく時代と共に湮滅し遂に學者のこれを繼承する所とならなかつた。文章は進歩し、言語が退歩したことは故なきにあらずである。

抑も歐洲の文字は音韻に基けるものである。音韻は即ち言語を表示する。従つて言語に變化あれば文字は直ちに之に隨ふ譯である。中國文字の構成は象形會意(註、字と字とを組合せて新字を作る)を主としたものである。故に言語が變つても文字は之につれて變化し得なかつた。要するに之は言語の不進歩であつて中國人が文字に缺けてゐたのではないのである。否、歷代能文の士の創作が他國人のそれに超絶してゐることは公論の一致する所である。蓋し中國の文章は一種の藝術をなしてゐる。能文の士は専ら藝術家として立つた。殊に天分を有するものは終身の精力をそれに注いだ。従つてその造詣の深さは及び易からぬものがある。ただ全國の人士が國を擧げて一種の藝術を範と

し、それに精勵耽溺して他の途を廢絶したことは前にも述べた如くで斯くて其弊は遂に世の誹謗の的となつたのである。さりながら中國文字の努力は偉大にして歷代能文の士は頗る多かつたのである。但し試に問ふ。歐米に超越せる中國文藝家中、果して能く作文の法則を熟知せるものがあつたか。余は之に答へて謂ふ「否」と。

中國には古來、文法文理の學問がない。其の作文の修業は文章を玩索し之を模倣してゐるうちに久しからずして忽ち之に通するのである。若し一定の文法が存するならば各自の作がそれに暗合したに過ぎないのである。また能く自ら文章を解析し得ても其字句の所用の正確と其然る所以を窮めたものは未だ見ないのである。其れを窮めてゆけば結局、行き詰る。乃ち神の明示でも受けぬ限り、各人の自解・獨斷に俟たねばならぬ。學ぶことなくして何を知らんやである。

夫れ學者の責ぶ所は其正確と然る所以を知ることにある。若し其れに根據してゐないならば貴重となさない。文字の正確を知らうと欲するならば第一文法から始めねばならない。又其然る所以を知らうと欲するならば文理から始むべきである。文法とは何か。即ち歐洲人の謂ふ「گرامマー」である。それは詞品を分類し、詞を聯ねて句となし文章を造成して意思を達するの法則である。泰西諸國にはそれぞれ文法學者があつて各自國の言語文章の法則について書いて居る。初

學者は必ずこの徑に由て文章の作り方を學ぶ。故に西歐の兒童は十歳前後で自國の文法に通じ其の習得せる文字を運用して簡単な文章を草し得るのである。故に兒童は就學後、間もなく深淺の論は別として「ペン」を執て文章を作り得る。則ち深きは深いままに、淺きは淺きがままに意を達し得ないといふことはない。また意が通ぜぬと言ふ風の弊は極めて鮮い。中國は由來、文法學がない。故に作文を學ぶ者は多くの時間を古文の暗誦や朗讀に費し、古人や先輩の文章を熟讀して其の格風・調子を十二分に會得せねば筆を執つて文を成すことが不可能である。故に文章に通達せる者は其の全般に互つて通曉してゐるが、其通ぜぬ者に至つては十年窓下に在つても仍ほ詞句を聯ねて文を成すことを得ない。で、就學の道程にある間は殆んど高低の別がない。若し兒童が日常の教育にて一日十字を學び、悉くその意を解し、讀み得たとして、一年に三千字を習得する。之をよく運用し、使驅したならば簡單なる文章を作り得る筈であるが、それが不可能なのである。これは文法學がないからで、徑捷な途によつて目的を速かに達することが出来ない。之れは恰も渡し場に舟も橋もないと同様、數十層倍の繞り道をせねば彼岸に達せぬのである。中國の文人たる誠にナミ大抵の業ではない。

『馬氏文通』が世に出た後、吾が國の學者は始めて文法學のあることを知つた。馬氏は自稱し

てかう言つてゐる。「十餘年の勤學檢討の功を積みたる後、此の一書を成したのだ」と、しかし其の實績を審るに「中國古人の文章が文法に暗合せぬものはない」ことを證明したに過ぎない。同書は參考證據の資となすには足るけれども初學者の橋渡しとはならない。馬氏が次いで出版した法文書は初學者でも作文し得るやうに作られてゐるが、惜むらくは著書はまだ其深處を盡究してゐない。で、幾多の誤謬を免がれない。且つ古人の文章を引證し、現今通用されてゐる言語に觸れてゐぬので、依然文章に——古文に通曉せる者でなければ會得出来ない。既に文章に通曉せる者にとつて又何ぞ文法の用があらう。これでは矢張り繞り道をして彼岸に達するより外ない。抑も舟とか橋の必要は何處にあるか。舟や橋の價値は未だ川を渡らざる時に於てである。故に文法を需むる所以は十歳以下の幼童及び筆は執り得るも文を作り得ない人の爲にある。望む所は吾が國の好學深思の士が廣く各國最近の文法書を涉獵し、精義を擇つて中國文法を編み以て今日通用の言語を演譯して之を改良せんことにある。文法が編れて言語を規正し、國民一般に普通知識を習得せしめれば言語から文法を知ることを得る。而して文法を通じて古人の文章を窺へば、難解とされた文意も掌を反すが如くであらう。また言文一致も亦これによつて復活されるであらう。

文理とは何か。即ち西歐人の謂ふ「ロジック」である。余はここで文理を假りに「ロジック」と稱したが、之れを以て適當となすものではない。乃ち「ロジック」なる一語を文章上に引用し文理の意に當嵌めたに過ぎない。近人で此の學を推論に應用する者が殊に多い。吾が國では此の語を翻譯して論理學とも謂ひ、辨學とも謂ひ又名學とも謂つてゐるが皆其の至當を得たものではない。殊に嚴又陵氏が之を名學（唯名論）と翻譯したのは全くあて推量である。名學とは「ノミナリズム」である。「ロヂック」ではない。「ノミナリズム」は歐洲の中世紀時代に理學の二大思潮の一つをなしたもので他の一つは實學と名づけられてゐる。此の二大思潮は十一世紀の頃、大爭論を惹起し、十二世紀の中葉に至つて熄んだ。以後、名學の傳習も終息した態であつたが、近代に至つてまた「ノミナリズム」を唱ふる學者が現はれた。英國の哲學者「ミル」氏は其の健將である。しかも「ミル」氏も亦名學によつて「ロジック」を説いたのである。其著書も名學とは名づけられてゐない。該書の原名は「論理學體系」と稱されてゐる。嚴又陵氏が之を名學と翻譯せるに至つた動機は恐らく「ミル」氏の著書に述べられてゐることが名理の事のみ多いので遂に名學を以て「ロジック」を統べるものと推量されたのであらうが、名學は「ロジック」の一端たるに過ぎないのである。凡そ論理學・辨學・名學を以て「ロジック」の譯語としたのは孰れも華僑が西班牙

を呂宋と稱する様なものである。呂宋は南洋群島の一つで中國に一番接近せる位置にある。千數百年來、中國の航海者は常に該島を訪れてゐた。そんな關係で支那人は其名を熟知してゐた。そして近代になつて呂宋が西班牙の占領する所となるや該地方に渡航した中國の移民は西班牙人を呂宋人と稱した。其後更に「メキシコ」・「ペルー」・「チリ」等の諸國が西班牙の統治を受けるとこれも亦呂宋人と呼んだ。が聽て所謂呂宋は其由來する祖國のあることを知つたので西班牙を大呂宋と呼び、南洋群島中の本家本元の呂宋を小呂宋と稱し今日に至つてゐる。學者流の眼光で之を見做すならば西班牙に呂宋を總括して呼ぶことは可なるも、呂宋に西班牙をひつくるめて呼ぶことは不可である。乃ち華僑は最初西班牙の存在を知らなかつた。そして呂宋のみを知つてゐた。故に斯く稱したのである。今問題にした「ロジック」の譯語の選擇に際しその一端の名辭をとつて之に附するは乃ち此の類と爲し得る。然らば「ロジック」とは何か。どんな譯語を附したなら妥當であらうか。余は此の機會に極めて簡單に之が考察を試みたい。

一寸涉獵しただけで「ロジック」とは諸學諸事の法則の學問であることを知らう。それは思惟を云爲するの門徑である。人類は之に由りながら其道を知らぬ者が衆い。而して中國には今日に至るも尙ほ其名さへないのである。余は之を稱して「理則」と命名しやう。抑も此の理則の學は

今日に至るも尙ほ學理上の統一を見ぬので斯學專修者の持論も區々に分れてゐる。それは一般學徒の理則家に對する態度は大體、陶淵明の讀書に於るが如く徹底的解釋を求めない。が、人類の稟賦は其の胸中に理則の感覺を具有してゐるので、能文の士は研精構想以て不朽の文章を創作し、それが理則に暗合しないことはないのである。かくして其の造詣の道を叩けば彼も亦其何故たるかを知らぬのである。此故に文法の學を知らねば文學の正確なる構成を知るを得ない。

曾國藩は晚清の宿學文豪である。彼の文章中には「春風風人、夏雨雨人。解衣衣我。推食食我。入_二其門_一而無_二人門_一焉者。入_二其閨_一而無_二人閨_一焉者。」といふやうな句を散見する。其の風に於る風、或は雨と雨、衣と衣、食と食、門と門、閨と閨等孰れも重疊的敘法を用ゐてゐるがこれを分解してみると上の一字は實字實用で下の一字は實字虚用となつてゐる。而してかうした敘法は彼によつて創作されたもので古人の未だ創發しなかつた所である。しかも千古の文章の祕奥を極めてゐる。然り文法を以て之を説明すれば上の一字は名詞で下の一字は動詞である。此文義は當然の事で、しかも宿學文豪の知らなかつた所である。強いて之を解説すれば實字虚用となすものである。又、理則の學を知らねば文章の「然る所以」を知るを得ない。今人某の著した文法要略の第三章第二節に次の如き引例が見へる。

本名字は人・物占有の名稱で共通のものでない。侯方域の王猛論に曰く、亮は心を漢に始終せる者也。猛は心を晋に始終せる者也。と、又孔稚圭の北山移文に曰く、蕙帳空兮夜鶻怨。山人去兮曉猿驚。の如き亮と猛とは同じく人類であり、鶻は鳥類、猿は獸類であつてその亮と曰ひ、猛と曰ひ、鶻と曰ひ、猿と曰ふは即ち本名である。人を指して亮・猛とは謂はない。亦鳥を見て鶻とは謂はず、獸を見て猿とは謂はない。故に本名字と曰ふ。

これ亮・猛・鶻・猿を一律同視せるもので理則の書を涉獵せずとも一見ただけで其誤謬に氣付くであらう。若し些かでも理則的感覚を以て留意したならば一層明確にその不當を感知するであらう。世界古今の人類はただ一亮・一猛其人があるのみ。而して世界古今の鳥獸は豈に獨り一鶻一猿のみならんや。これ辨を待たざるも明かである。然るを著者は何を以てこの大錯誤をしたか。それは往來中國に理則の學がなく、各人が理則的感覚の働きに慣れてゐないことに原因してゐる。中國の文章は豊富にして絢爛である。中國の文人は多々にして傑出してゐる、その文章たるやまことに揚雄の謂ひし如く、深きは黄泉に入り、高きは蒼天に出で、大は元氣を含み、細は無間に入る矣。とある通りである。然り而して數千年以來、中國の文人はただ能く文章を作るも文章そのものを知る事を得なかつた。故に文法の學と理則の學を今日まで發見する人がなく、外

人の輸來を待つて始めて吾が文學上の缺陷を知つたのである。これ「之を行ふは難きに非ず之を知るに難し」を證するに足るであらう。

第四節 七事を以て證と爲す

余が前三章で引證した知難行易の事柄の第一は飲食の問題である。之は全人類の誰もが行ふ所の事柄である、第二は用錢——金錢の使用・效用・用途——の問題で文明社會の人類は之を行使する。第三は作文に關する問題で之れは文明社會に於る知識階級に於て行はれる。此三つの事柄は人類が之を行ひ始めてから已に久しいもので之を心得てゐない者はない。しかも其の實を究むれば人類はたゞ之を行つてゐるといふに止り、之を了知し能はなかつたのである。偶々好學深思の士がゐて専心其の理の研究に従ひ、その生涯を賭し、星霜を重ね、しかも徹底的に之を知り能はなかつたのである。之れ則ち行ふの難きに非ず知るは難しであることを此の三つの事柄によつて證し得たと同時にそれは動かし得ない鐵則となつた。そこで或は謂ふであらう。此の三つの事柄は成る程、お説の如くである、が、其他の事柄は必ずしも悉くが然りではあるまい、と。余は今更に建築・造船・築城・運河・電氣・化學・進化等の事柄を引證し、其の然るか、否かを驗證

するであらう。

人類が家を建て、そこに安棲するやうになつてから幾許の星霜を経たかを知らない。かくて遙か後世になつて始めて建築の學が生れた。中國には今猶ほ此の建築學なる學問は存しない。従つて中國の家屋は殆んど全部が建築學に基いて構築されたものではない。之れ「行ふを知らざる」ものである。外國に於る現今の家屋・建築物は建築學に基かぬものは稀である。先づ設計圖を製作し、然る後に工事に従事する。之れ「知りて後に行ふ」ものである。上海租界の洋館の設計圖作製者は外國の技師である。其の垣を結び、棟を架けたのは誰であらうか。それは中國の苦力である。之れ、之を知るは外國の技師にして之を行へるは中國の苦力である。斯様な知行分擔によつて一個の建築物は完成されたのであつた。之を表面的に觀察せば、設計者は指頭を動かし筆先で描寫を試みたに過ぎないが、施工者——苦力は手に豆をつくらせ足を棒にして働いたのであつて、技師は容易で苦力は至難の如くに感ぜられる。しかし内面的にとくと觀察せばそこに天壤の差あるを見出すであらう。今假りに或る男が萬金を投じて住宅を建てやうと欲し、其趣好と種種な希望を技師に告げ、設計を求めたならば技師は事の順序に従ひ先づ建築費一萬金を豫算として、どんな材料をどれだけ購入すべきかを算定するであらう。これは經濟學の應用によつて測定

し得る。次で全體の面積・建坪・建物の高低と地礎の壓力如何・梁柱の按配等に就ての精確を求めらる。これらは多く物理學によつて知り得る。それから室内の光線をどうするか、空気をどう流通させるか、寒暖の防禦をどうやるか、穢物をどう排渫するか、これらは居住衛生學を参考とし、それによつて知り得やう。最後に應接間をどう裝飾するか、食堂の設備をどうやるか、書齋をどう間取るか、寢室をどう按配するか、其れらは流行の好尚に應じて工夫する。其れを社會心理學で知るであらう。技師はきつと以上の事柄は以上の各科學に根據して設計する。其れでこそ建築學の名家、即ち名技師の稱を得るのである。現在上海に新築された高層建築や洋式住宅の多くは此の種の知識を有する技師の設計によつて生れたものである。そして建築の直接實行者は皆中國の苦力なのである。由此觀之、知るは易きか、行ふは易きか。此の建物の事柄は知難行易の鐵證として其四に數へられるであらう。

民國七年十月上海の中國造船所で二千噸大の汽船を建造し進水式を行つた。英字新聞は「中國人の手に成つた船舶中、其の大きさに於て首位を占めるものだ」と謂つて之を稱揚したものである。誠に中國造船所が此の船を竣工するためには其法を泰西に效ひ、近代科學の智識を藉り、外國の機械を用ゐて之を竣成したのである。按ずるに近來、上海・香港及び南洋各地の外人經營の

造船所に於る造船職工は殆んど全部が中國人で一二の技師及び作業監督だけが西歐人である。其建造船數は數千噸級の巨船ばかりでも數へきれない程ある。之を要するに東方に在る西歐人經營の各造船所から建造される船舶は悉く中國人の建造せるものだと言ふも不可ではない。但し其建造作業が悉く中國人に屬するに過ぎない。

余は嘗つて此の方面の造船所を數ヶ所觀遊したことがあつた。其の時余は屢々華匠（中國人の職工）に向つて造船術に關し質問を試みたが、彼等は皆一樣に「建造作業は決して六ヶ敷いことではない六ヶ敷いのは設計圖を作成することだ」と、かういふ答を余に與へた。誠に設計が定まれば後は圖に按じて作業すればよいので其成功は期して待つばかりである。

先年米國は獨逸に宣戰するや第一に必要とされたのは船舶の補充であつた。茲に於て破天荒的計畫を試みねばならなかつた。そこで造船所の總動員によつて一年四百萬噸の船舶建造を期した。此の説がひとたび傳はると全世界を擧げて之に驚倒した。若し平時にこんな説をなす者があつたなら狂人と目さぬものはないであらう。かくて計畫が定ると米國の造船界は數十日間で一萬噸級以上の汽船を竣成するといふ基本計畫に基き全國百數十ヶ所の造船所が作業に参加し同一時期に大型汽船數十隻小型汽船十數隻を竣成することとなり、各造船所は一齊に作業を開始した。

而して所定の期日に得た成果は豫期以上のものであつた。

最近、日本の川崎造船所は僅か二十三日間の日子を以て九千噸の汽船を建造した。しかも其速度は世界一と稱されてゐる。之れ皆、科學の進歩發達の賜である。其知る所に基いて進行を決定せば其成功は斯くの如くである。

今、科學の發達せざりし以前に於ける同一事業を以て之を比較し知行難易に一瞥を投げやう。

明初、成祖は太監の鄭和に命じて使を七度海外に派遣した。其第一回は永樂三年六月に巡洋の命を受け永樂五年九月歸國した。この間、二十八ヶ月間の日子を費して南洋各地を巡船し瓜哇の西の三佛齋スミイラに至つて止んだ。往復の水路及び巡航各地の滯留日子等を見積れば如何にしても十數ヶ月の時間を要さねば、これだけの巡航は不可能である。今假りに彼の所用の總時間を折半して考へるも鄭和が巡航の命を奉じてから出帆の日まで所謂出航準備期間として彼に與へられた時間は十四ヶ月間に過ぎない。彼はこの十四ヶ月間に全乗組員二萬八千萬人の糧食武器及び巡航に要する一切の準備を整へ、且つ又六十四隻の一大巡洋船隊を建造したのであつた。

明史の記述する所に據れば各船舶の長さ四十四丈、幅員十八丈、吃水の深淺は明記なく知るによしないが全體の構造から推量して一丈以上と想像される。其積量總噸數は四五千噸。船體の長

さは現今の外國最大級汽船のそれに等しい。當時は科學の智識を以て計畫を助けるといふこともなく、外國の機械を以て人工に代るの術もなかつた。其れに鄭和は造船學の専門家でもなかつた。當時の世界に於ても亦斯の如き巨大な巡洋船は無かつた。其れにも拘らず鄭和は能く十四ヶ月間に六十四艘の巨船を建造し、乗組員二萬八千餘人を率ゐて南洋諸島を巡遊し、威風を遠く海外に示した。それが中國の史上に冠絶せる壯舉でなくて何であらう。今だに南洋の土人は猶ほ當年の三保(註、鄭和の號で中國人は彼を三保太監と呼んでゐる)の雄風遺烈を懷想してゐる。まことに壯と謂ふべしである。然り、現在の中國人は科學の知識と外國の機械を藉りて猶ほ一艘三千噸の汽船を建造することを難事としてゐる、鄭和の成績を視て如何となすか。これ、行ふの難きに非ず知るの難きを語るものである。造船の事柄は知難行易の鐵證として其五に數へられるのであらう。

中國の最も有名なる陸上築造物は萬里長城である。秦始皇帝は蒙恬に命じて長城を築造せしめ匈奴の禦ぎとなした。東は遼瀋より起り西は臨洮まで山を凌ぎ谷を越へて五千餘里。工程の大なる古に其類ひなく世界獨歩の奇觀である。秦の時代には固より科學の發達なく、機械の發明なく、人工も今日の如く多大ではなく、物資も亦今日の如く豊富ではなく、建築學も今日の深奥なるには到底及びも得なかつたのである。しかも竟に能くこの偉大なる築造を達成した。其道いづ

くにか在る。曰く「必要の迫るところ行はざるを得ず」となすものである。西諺にも亦かうある「必要は創造の母なり」と。

秦始皇帝は一世の雄。六國を併呑し、中國を統一した。しかし彼は湖北を一掃して匈奴を滅ぼすことは出来なかつた。で、國境守備兵を置いて飄忽無定の遊騎を防いだが、これ亦その煩に堪えなかつた。そこで一勞永遠の計を樹て長城を築いて之が禦ぎとなした。始皇帝、無道と雖も長城の功は後世に於て在つた。それは實に大禹の治水の功績にも等しい。今にして之を觀るに、若し長城の堅壘のなかりせば中國の北狄に亡ぼされしは宋・明を待たずして楚漢の時代にあつたであらう。斯くの如くんば中華民族は必ずや漢・唐の發展昌隆なく、また南方の種族を開化し得なかつたことであらう。而して吾が民族の同化力が強固なものとなつた後に及んで蒙古に亡ぼされた。けれども蒙古は吾れの開化する所となつた。再び滿洲に亡ぼされたが滿洲も亦吾れの同化する所となつた。其初めに於てよく吾が同化力の胚胎期を庇護せるために北狄の侵入に夭折しなかつたことは長城の功の鮮少でないことに歸せねばならない。だが、當時長城を築きたるは、たゞに其一姓の私を保全せんがための子孫帝皇萬世の業たるのみ。而も未だ曾つてそれが後世に於て獲得せる所の効果の如何ばかりか廣く且つ遠大なりしを知らなかつたのである。彼は必要に迫ら

れて敢然力行し以て之を成就したのみ。其當初に於ては固より事業の絶大なると經費の巨額なるを豫算しなかつたのである。これまた之を行つて其道を知らざる者である。

今日の科學は發達し、機械は完備し、人工・物資も往昔に優り、建築學の進歩も遙かに當時を凌駕してゐる。さりながら試みに學術經驗に富める技師に向つて萬里長城の設計を請ひ、幾許の材料・幾許の人力・幾許の經費・幾許の時間を要するやと其意を叩いたならば技師は之に答へて何と謂ふであらうか。余は思ふに彼はきつとかう答へるであらう「これを知るは容易な業でない」と。更に技師の煩を憚らず數年の時間を費させて詳細に測量せしめ精細なる計畫を作成させて現世の人に示したならば人々は必らずかう謂ふであらう「之を知るは難きに非ず之を行ふは難い、今日、秦始皇帝に效ふて一萬里の長城を再築せんとしても到底不可能である」と。余はそこで學者が歐洲の戰場を見物せんことを望む。

獨逸軍は第一次巴里攻撃が失敗に歸するや直ちに攻撃を止めて防禦戦に移つた。彼等は必要に迫られて數ヶ月の間に長蛇の塹壕を、北海の濱から瑞西の山麓に至る長さ千餘里のそれを築いた。それは第一線の外に第二、第三の三線を有する三重の防禦線を成してゐた。各塹にはそれぞれ陰溝・地窖・甬道・棧房などがあり、工事は堅固、複雑で三線の合計里數は萬里の長城の工程を

遙かに凌ぎ、其延長里數は五千里を下らない。英佛軍側で築いた長壕もまたこの如くであつた。兩者を合すれば長さ一萬餘里。之を中國の長城に比較すれば其距離に於て倍以上である。この一萬餘里の大工事は其初め豫定の計畫があつて起工されたものではない。各部隊が時に臨み地に隨つて起工したもので其作業の遠大と竣成の迅速さはまことに鬼斧神工の業とも謂ふべく人力の不可思議を語るものであつた。しかして東部戦線はと謂ふにこれまた「ポーランド」の海岸より歐洲大陸を横斷して黒海に至る其距離は西部戦線に約三倍し、彼我各々長大なる塹壕を築いて防戦したのである。しかも工事の規模、竣成の時間は孰れも西部戦線のそれに等しかつた。かくも浩大迅速の大作業は事實を目撃せる者でなくば之を語るも信じ難く、また想像し難いのである。さりながら歐洲東西兩戦線の總計四萬餘里に及ぶ長大なる塹壕は今や已に抹殺し得ない歴史の物語りとなつたのである。而して専門の建築家も恐らく亦其の概略をさへ測定し難いのである。由此觀之、之を行ふは難きに非ず之を知るは難しである。始皇帝の長城、歐洲大戰の塹壕の事柄は知難行易の鐵證として其六に數へられるであらう。

中國にはも一つ、浩大な工事がある。それは長城と相伯仲すべき大運河がそれである。大運河は南は杭州から起り江蘇・山東・直隸三省を貫き、長江・黄河・白河を経て通洲に至る實に三千餘

里。距離の長大なる點に於て世界第一の運河で南北交通の要道を成してゐる。其國計民生に利するところ測るべからずである。

中國と西歐諸國との交易後、楊子江上に汽船の游航を見、海運大ひに拓けたが運河は日に泥沙に塞がり漸やく水患を蒙るに至つたので最近、江淮一帶を浚渫し水利を興さんと議が起り、西歐の技師を招聘して測量せしめたが、已に工事の大なるを覺り吾が財力では辨じ能はぬとの見地から外債の借入を謀り着手せんとしてゐる。

夫れ浚渫は開鑿に較べて容易である。局部的工事は全局的工事に比して更に更に容易である。而して今の人は此の局部的浚渫の測量・計畫を聞いただけで其難工事なるに驚いた。若し全局の開鑿に就て聞く所があつたなら慄然として生氣を喪ふであらう。乃ち古人が三千里の實に長大なる運河を疏鑿して之を貫通し、事なく遂行し得たのは何が故か。曰く「其の六ヶ敷は進行の後にあるに非ずして計畫の初めに在るなり」である。古人は今人の如き學問知識を有しなかつた。故に凡そ大工事を興し、大事業を成就する場合、其の殆んど多くの企圖は準備・計畫を抜きにして直ちに實行に着手し、一圖に其進行を圖つた。則ち必要の迫る所、之を行つて遂行せざるはなく之を到して到達せざるはなし、で、其成功は不測に出づるものであつた。中國の大運河開鑿の當

初に於ても固より豫定計畫といふ如きことはなかつたのである。

近代に至つて竣工を見た世界の運河は、一二に止まらない。其中最も著名にして吾が國民の熱知してゐるのは「スエズ」・「パナマ」の兩運河である。「スエズ」運河の地峽部は紅海と地中海を遮斷し、東西洋の海路交通を隔絶してゐたのであつた。古來已にここに運河を開鑿せんとの議があり、千七百九十八年、「ナポレオン」が埃及を占領するや「スエズ」運河の開鑿を發意し技師に命じて同地を測量せしめた。其報告の結果に據ると地中海と紅海との落差が約二十九呎あることが分明されたので工事は停止された。更に五十年後に佛人が再び測量に従事し、前記の落差が不確とされた。其後「レセツプ」氏は會社を創立し「スエズ」運河の開鑿を提唱したが、當時世人の多くは之を目して難事業とした。就中英國人は舉國的に之を非とし斷然不可能の事と信じてゐた。然し「レセツプ」氏の苦心孤詣と多年の勸説の結果、佛國資本家及び埃及國王の賛成を得遂に千八百五十八年會社の成立を見、翌年起工し千八百六十九年完全なる成功を告げた。此の成功は英人を極度に震駭せしめた。茲に於て英國首相「ヂズレリー」は百方手を盡し埃及國王の所有する「スエズ」運河株券を買收して之を英國政府の掌中に納め、後更に埃及を併呑して英國領土となした。蓋し該運河の支配權を掌握することは東西洋の咽喉を把握するも同様で、印度との

交通連絡に重大關係をもつものなのである。

「レセツプ」氏は「スエズ」運河の開鑿に成功するや其の名聲は一時に高まり、世の重する所となつた。「レ」氏は更に進んで「パナマ」運河を開鑿して大西・太平洋の交通を聯絡せんことを提倡し資金を募集したが、此の企圖は咄嗟に成立し千八百八十二年に起工し千八百八十九年に至り圖らずも一敗地に塗れた。そればかりか「レセツプ」氏は破産を宣告された上に刑に問はれた。其の末路の不遇なりしはまことに憐憫の情に堪へぬものがある。其のこゝに至つた原因の一は豫算の超過にあつた。他の一因は疾病の流行による多數死亡者の續出によつて工事の繼續が不可能となつたことであつた。

豫算の超過は尙ほこれを挽救するの途もないではないが、疾病の流行は救ふことの出來ぬ痛手であつた。蓋し當時、科學は今日の程に進歩しをらず、風土病は不可抗力とされ、衛生上の深い注意が拂はれなかつた。處が最近の科學の進歩につれ一切の疾病は皆微生物から發生するものであることが發見され、且つ「パナマ」地方の「マラリア」は蚊の一種、「アノフェレス」から傳染することが判明した。

其後、米國政府は「パナマ」運河の繼續開鑿を決議し千九百〇四年先づ蚊退治に着手し衛生的

豫防施設を終つた後、千九百〇七年から工事を開始し千九百十五年告成した。かくて茲に大西・太平兩洋の交通の聯絡が實現されたのである。

由此觀之、「レセツプ」氏の失敗の最大原因は蚊の害を知らず之を忽略したことにあり、而して米國政府の成功の原因は蚊の害を知つて先づ之を退治したことにある。これ之を行ふは難きに非ず之を知るは難しである。内外運河の事柄は知難行易の鐵證として其七に數へられるであらう。

古來、藝術的器物や物理的發明品に於ては中國は各國に先んじてゐた。その創造物は世界文明の進歩に大なる貢獻をなした。而もそれは一二に止まらない。印刷・火藥・陶磁器・糸・茶等は孰れも必要以上の必要品として人類社會に役立つたのである。も一つ人類に重大な寄與をなしたものがあつた。それは今日の世界交通の盛運を誘導し、地球をして恰かも一家の團樂の如き觀をなさしめたところの磁石盤（羅針盤）が其れである。古籍に見へる指南車は黃帝の創造したものだとも謂はれた周公の創造せるものだとも稱されてゐて其の孰れが正しいかは分明しないが、中國が磁石の性質を發見し、之を用ゐて指南車を造つた由來は非常に古い時代に屬してゐることは疑義を挟むべくもない。而して遙か後世に至つて西歐人は之を模倣し、之を航海上に用ゐ、航海

事業の發達を遂げたのである。若し磁石盤の方向を定むるの術がなかりせば澎湃として水天一色天涯果なき海洋に誰か遠く岸邊を離れて、深踏迷路、知るべからざるの地に赴くの冒險をなそうものぞ。然り、若し磁石盤の航海を指導することがなかつたならば航海業は發達する由もなく、而して世界文明は今日の地位に達することを得なかつたであらう。磁石盤の效用たる誠に大なる哉である。然らば磁石盤は何物であらうかこれ一簡單なる電機に外ならない。人類が帶電體を用ゐたのは指南針を以て最初とする。指南針が使用されるやうになつてから人類は磁針の指南に關する研究に注意した。磁石の引鐵作用は幾千萬年の時間を経、無窮の心思學力を竭した後、電氣の理を發見した。乃ち電とは無質の物たるを知つた。其性たるや光熱と通すれば相互に變化作用を起す。それはまた全宇宙を包み、充滿して居る。地上に於る運行は一定の方向をもち南から北へ向ふ。磁鐵が電氣を感受すれば遂に南北に向ふ性となる。其れは風計針が風を受ければ風向に支配されるのと同じの理である。往昔、電氣學の不明時代には人類は雷電を神明であるとし、之れを崇めたが、今日では之を視ることさながら牛馬の如く之を使役してゐる。かくて今日の人類の文明は電氣時代へと進んだ。以來、人は電氣と須臾も離れ難いものとなつた。讀者諸君は都市に於る電氣の需要・利用の日に増加しつつあるを觀るであらう。點燈にも電氣を用ゐ、交通にも

電氣を用ゐ、通話にも電氣を用ゐ、通信にも電氣を用ゐ、治病にも電氣を用ひ、工業にも電氣を用ゐ、炊事にも電氣を用ゐ、防寒にも電氣を用ゐるの世となつたのである。今後、電氣學は更に一層明瞭とされ電氣の用途は益々激増されるであらう。

今日に於て論ずるならば世界の電氣の使用者は決して少くはない。さりながら能く電氣の本質を知るものは幾許であらう。新製の電氣器具が現はるれば世を擧げて之を使用する。最近の大發明は無線電信である。之れは發明後、數年を出でぬに全世界を風靡して了つた。然り、其の研究時代に於て幾許の星霜を費し無數の學者の智を絞り竭し、おの／＼が一臂の貢獻をなして、而して後此の無線電信完成の知識へと到達せしめたのである。其の知識上の確實さと學理の深遠さに基ける機械の作製は差して難事ではない。機械が作製されるれば之を使用することは更に容易である。之れ今日無線電信を利用して通信することは誰しもが之をよくし能ふ所である。そして無線電信を司る技手は人の頼信あるがままに應じ、これ亦何等の苦心を費さずして之をなし能ふのである。無線電信機を作製したる職工も亦設計圖に按じて作製せるに過ぎないから些かも難事たるを感じない。其最も困難にして貴ぶべきは則ち無線電信を研究發明せる知識の人である。學識上の難關を一過すれば其他の進行は掌を反すが如くである。電氣效用の一事を以て之を觀るに人類

は毫も電氣學の知識を有さぬ時、已に磁鐵を用ゐ磁石盤を作製し、航海指南の用となした。而して後、電氣學の知識ひとたび發達するに及べばこの知識に基いて奇々怪々頻出窮まらざるの電氣器具が續製され、世界のあらゆる事業の用をなすに至つた。これ之を行ふは難きに非ず之を知るは難しである。電氣の事柄に知難行易の鐵證として其八に數へられるであらう。

近世の科學發達時代に於ては學界に於る一部門の特殊的進歩發達は許されない。其れは直ちに他の各部の學術研究に貢獻し寄與する。相互に資助しあひ而して彼我各々の學理の發見と進歩を得る。電氣學と最も密接關係をもつは化學である。若し化學の進歩がなかつたならば電氣學も發達し難かつたであらう。同時に電氣學の發見によつて化學の研究も一段と進歩したのであつた。

處で、化學の鼻祖は道家の燒鍊術にある。古人は不死の藥を得んと欲し、はしなくも道士の燒鍊の術が創められ、これによつて不死の藥を求めんと苦心したが、不死の藥はしかく容易に得られるものではなかつた。が、種々の化學的工藝がここから興つた。朱・火藥・陶磁器・豆腐等の發明は其顯著なものである。其他の化學に關係をもつ工藝品で燒鍊の術から生み出されたものは數へきれない。中國の化學的製造事業は已に數千年の星霜を閲してゐる。しかし之を行ふて其道を知らない。また其本質を知らない。類々皆之である。吾が國の學者の多くは現に泰西の科學に

驚倒してゐる。而して科學の最も神奇奧妙なるは化學に如くはない。化學の最も研究し難い點は有機體の物質に如かない。有機體の物質中最も重要なものは糧食に如くはない。近來、泰西の生理學家は六蓄の肉には毒素が多分に含まれてゐることを實驗によつて證明した。故に肉食の人の多くは、この害をうけ、生命を損ねる。しかし人體の需むる滋養物は肉食を以て最多とされてゐる。肉食を廢せば何を以て之が滋養を補ふか。代用食物を求めざる道のないことに苦しんでゐる。この食料衛生問題は泰西の學者が解決を欲してから一日ではない。近年に於ける生物學の進歩は非常な迅速さで發展してゐる。佛國の化學者でこれに關する偉大なる發見をした者は實に夥しい裴在格代の有機化學を創出せる如き、化學的方法によつて有機物を作り出し、且つ化學的研究によつて滋養物の生産を圖つた。巴斯德氏は微生物學を創發し生物化學を成就した。高弟業氏は生物學に根據して食料品を研究し、肉食の毒素を明かにし菜食の優れることを説いた。余の友人である李石曾君は佛國に留學し、巴氏高氏の門に學び専ら農學を研究し殊に大豆の研究に意を注ぎ「萬國乳會」を創立して豆乳を主張した。且つ豆乳を以て牛乳に代ふるべく之を推し廣めんと圖つた。而して豆食を以て食に代へんことを主張し、化學諸學者の理論を引例し、粗食衛生の需要に應ずべく茲に巴里豆腐公司を起したのであつた。

夫れ中國人のなんと豆腐を稱美することよ、中國人の豆腐の製造者のなんと多きことよ。甚しきは邊鄙極る寒村、三軒村の中にさへ一軒の豆腐屋を見出すではないか。吾人の眼にはこれらの渡世者は社會の端しくれに生命を繋いでゐる殘業としてか映じないが、これが最も奇妙なる有機體化學の製造事業たることを、又、これが最も衛生に適合せる最も經濟的・合理的食料品たることを知つてゐるであらうか。又、この社會の端しくれに生命を繋いでゐる殘業者の製品が泰西に於る今日の最も著明なる科學者の苦心研究して猶ほ獲得し得なかつた所のものであることを知るであらうか。

陶磁器製造の由來は之また甚だ古い。「バビロン」・埃及では瓦を用ひて書とし、瓦を用ひて城廓とした。「メキシコ」・「ペルー」等の地方でも西歐人の「アメリカ」大陸發見以前に已に陶器を有してゐた。近代文明國の祖先達は皆それ〴〵陶器を造る術を心得てゐた。土を焼いて器物を成すことを知つてゐたのである。凡そ人類の文明が一躍進して火食時代に入ると、此の技工が人類の生活の中にとり入れられたのであつた。ただ磁器のみは中國の獨創品であつた。而して今日に至るも猶ほ中國の製品を以て最も精美なるものとされてゐるのである。千五百四十年の頃、佛蘭西人の白里思氏は佛蘭西の貴族社會に於て中國の磁器が珍重されてゐるのを見、これを模造

して一般民家にもこの珍寶を行き互らせやうと決心し、苦心慘愴、研究に研究を重ね、十六年の心勞を費して始めて一種の磁質に似た陶器を製出した。これが歐洲に於る中國磁器模倣の最初のものであつた。

近年、泰西の化學は大ひに究明され、各種工藝もこれにつれて發達した。かの磁器製造事業も亦化學の知識に基いて施工し始めてよく中國の磁質と相伯仲するに至つたが、明朝の景泰・永樂、清朝の康熙・乾隆等の時代に作成された各種美術磁器のそれに見る如き色彩・品質は今に至るも模倣し能はないのである。近時、化學の進歩は其の最高峰に達せりと謂ふを得べく、其神妙なること固より我が古代の燒鍊術の如き此の比ではなく、恐らく二十年前の化學者の夢想だになかつた所であらう。舊時代の化學に於ては有機體化合物と無機體化合物とは區別されてゐたのであるが今日では已にこの限界が除かれた。化學の技術は遂に無機體を變じて有機體となさしめることに成功したのである。又、前の所謂、元素とか、元子とかの説はこれまた覆返された。因に「ラヂウム」の發明後、所謂元素は更に元素を以て之を成し、元子は更に元子あつて之を成すことを知つた。以來、化學界は一新天地を開いたのである。

西歐人の中國磁器模倣は専ら化學的分析に依て研究が積まれた。磁器の質、磁器の色料、それ

には皆化學的實驗に徴し、細微の點まで見逃す所がなかつた。さりながら彼の燒鍊の技術は則ち人工と物理の關係に屬してゐた。で、それらの技術は今もう失傳し遂にかの美藝も跡を絶つた。故に模倣するに由ない。これがために歐米各國に於ては中國の明清兩代の磁器を寶物として數十萬金を投じて一器を求むる有様である。現に佛・英・米諸國の博物館に藏せられてゐる品は孰れも稀世の珍器、珍寶とされてゐる。さりながら吾が國の工匠はかくも美事なる工藝品の成作に従事しつつも物理化學の何物たるやは全然知らなかつたのである。これ、之を行ふは難きに非ず之を知るは難しである。化學の事柄は知難行易の鐵證として其九に數へられるであらう。

進化論は十九世紀の後半、「ダーウキン」氏の『種の起原』の出現の後、始めて大發展を見て以來、宇宙の萬象は皆進化の法則によつて成れるものなるを知つた。

古今、聰明睿智の士にして天地萬象發生の由來を究めんと欲した者は多かつたが、其眞理を了知し能はなかつた。二千年前の昔、希臘の哲學者「ピタゴラス」氏及び「ヘラクリスト」氏は已に宇宙の萬象は進化によつて成れるものなることを説き、以後この種の説を繼述する者がなかつたが、「ソクラテス」、「プラトール」二氏の學が興るに至つた後は進化説は之に因つて反つて晦澁となつた。歐洲の「ルネッサンス」以後思想は漸次自由に復し、獨逸の哲學者「スピノザ」氏及

び「ライブニッツ」兩氏の窮理格物(註、理智的思考を重んずる合理派の哲學)が生れ、進化論の階梯が再び開かれた。「ダーウキン」氏の祖は則ち「ライブニッツ」氏である。嗣後科學は日に昌となり、學者の幾多の發見が公にされた。其最も顯著なるは天文學に於る「ラブラアス」氏、地質學に於る「リエル」氏、動物學に於る「ラマアク」氏等である。之等の學者は皆各其部門に従つて進化の理則から推論し、それぞれ偉大なる發見に到達せるもので洵に進化論の先驅をなすものであつた。「ダーウキン」氏は則ち動物の實際に従事し二十年の日子を探究検討に費した功によつて始めて「種の起原」の一書を完成した。以て生存競争・自然淘汰の理則を發見した。「ダーウキン」氏の著書の出でた後、進化の學は豁然と朗かに開かれ、偉大なる光明を放つて世界の思想を一變した。これよりあらゆる學術は進化の原理に依歸するやうになつた。

夫れ進化は自然の道である。而して生存競争・適者生存不適者淘汰は物種進化の原則である。この物種の原則に關しては人類は石器時代以來、已によく之を利用して物種の改良淘汰を圖つて來たのであつた。野草を化して五穀となし、野獸を化して家畜となした如き、利用厚生は凡てこれである。然り之を用ゐる千萬年、而して其道を知るに由なく、科學昌明の時代を待たねばならなかつたのである。即ち「ダーウキン」氏の二十年間の苦心と仔々として倦むことを知らない勤

勉・研究の功によつて始めて之を知つたのであつた。其之を知るの難きこと斯の如くである。夫れ進化は時間的作用である、故に「ダーウキン」氏の物種進化の理が發見されると學者は多く之を稱して時間的大發見であるとし、「ニュートン」氏の引力に於る空間的大發見とともに科學界に於る双美となした。

余は進化の時期を分つて三階梯となすものである。第一階梯は物質進化の時期である。第二階梯は物種進化の時期である。第三階梯は人類進化の時期となすのである。原始の時太極 (一) イデア (二) 動いて電子を生じ、電子凝結して元素と成り、元素合して物質成り、物質聚つて地球を成した。これ世界進化の第一階梯期である。現に大空・諸天體の多くは猶ほこの期間の進化過程を彷徨してゐる。而して物質の進化は地球を形成することを以て目的となしたのである。吾人の地球は其進化に幾許の年代を要したことか。それは不可知の事である。地球の形成後の年代に於ては科學家の地層變動に根據しての推算に徴すれば已に二千萬年を経過してゐる。生元の始生より人間を形成するに至つた期間が第二階梯期の進化期間である。物種は微より顯れ、單純より複雑に進み、生存競争の自然淘汰の法則に本づいて幾多の優勝劣敗・生存淘汰・新陳代謝の千萬年を経て人類は乃ち創成された。人類が地上に現はれた當初は禽獸と異なる所がなかつた。再び幾千萬

年の進化の期間を経て始めて人性が育成され、かくて人類の進化の頁がここから起原されたのであつた。此の階梯期に於る進化原則は則ち物種の進化原則とは同一でない。物種は競争を以て原則となすものであるが、人類は互助——相互扶助——を以て原則となすものである。社會・國家は相互扶助の體であり、道德仁義は相互扶助の用である。人類は此の原則に順へば昌運を來し、此の原則に順はざれば亡ぶ。此の原則を踏み行ふて人類は數十萬年を辿り來つたのである。然り而して人類は今日猶ほ此の原則を墨守し得ないのである。それは本來、人類も亦物種から進化し來つたもので其第三階梯期の進化に入つて日尙ほ淺い。故に一切の物種の遺傳性が未だ悉く驅除されずにあるからである。然り而して人類は文明に入りて後、則ち天性の趨く所、已に之を爲さんとばかりて爲し、之を致さんとはかりて致し相互扶助の原則に向つて人類進化の目的を達求した。人類進化の目的とは何か。孔子の所謂、大道の行たるや天下を公と爲すであり、耶穌の所謂「バラダイス」で地上に樂園を建設することである。これ人類の希望する所で現在の痛苦の世界を化して極樂の天堂となすのがこれである。

近代の文明進歩は日に速かさを加へ、最後の百年は既往の千年に勝る。而して最後の十年は既往の百年に勝る。斯の如く推進せば太平の世も遠きに在るまい。乃ち「ダーウケン」氏の物種進

化に關する生存競争・自然淘汰の原則が発見された後、學者の多くは仁義徳道は皆虚無に屬するものだと見做し生存競争こそ現實的理論だとし、殆んど物種の原則を以て人類の進化を律せんとしてゐる。が、こは人類が已に經過し來つた階梯を知らぬものである。人類今日の進化は已に物種の原則の上に超脱してゐる。之れ、之を行ふは難きに非ず之を知るは難しである。進化論の事柄は知難行易の鐵證として其十に數へられるであらう。

若し猶ほ余の知難行易の説を信ぜられぬならば請ふ孔子の「民をして之に由らしむ可く、之を知らしむ可からず」の「可」の字が如何に用ゐられ如何に解すべきかを仔細に味はれよ。されば知るであらう。古の聖人も亦嘗つて之を看破し之に言及せることを……惜むらくは其語義詳かならず故に後人之を忽にし、遂に迷路に漸入した。一往不返、之を知るは難きに非ず之を行ふは難しの説を深く信ぜしめて了つた。其流毒の猛烈亡國滅種に致らしめたのは誠に懼るべき哉である。中國・印度・安南・高麗等諸國の民は此の謬説を信ずること最も篤きものである。日本人も亦之を信ずるも尙ほ深くはない。故に猶ほ能く維新の改制を成就し富強を致したのである。歐米の人士で此の説を信ずる者あるを余はまだ聞かない。丁度この書の第一版を上梓せるの夕適々杜威博士が上海に來つたので余は特に之を證すべく質せるに博士は「吾が歐米人はただ知るは難い

ものだといふことを知つてゐるだけで、行ふは難しとの説は聞いたことがない」と謂つた。又、某工學博士は余にこんな話をして聞かして呉れた。「自分が初めて或る工學校に入學したとき一教師は一つの實話を引いて知難行易の教訓を與へられた。其の實話といふのはかうであつた。或る家の水管が故障を生じたので家主は職工を雇つて修繕させた。職工はやつて來ると一寸手先きを動かしただけで水管を元通りにした。で、家主が直ぐに修繕代を訊ねると職工は五十圓四十錢だと答へた。家主はかう思つた此の位の勞力で直るものなら自分にも何とかなつたものを……と同時に或る不審を抱いた。それは彼の職工の要求が五十圓とか五十一圓といふのではなく五十圓四十錢といふ端がついてゐることであつた、で、その理由を訊ねた。すると職工の答へといふのがかうであつた。「五十圓は私の知識に對する報酬ですよ、四十錢は私の勞力に對する報酬ぢやありませんか。あなたは御自分の便宜のために私を頼んでおきながら私の勞力の値を除いて知識の値のみに止めやうとなされるのですか」と。これには家主も啞然失笑し、要求の全部を拂つた」と、これ歐米人の社會では行易知難が常識となつてゐることを見るに足るであらう。

第五節 知行總論

總論的に謂へば前章までに擧げた十項の驗證を以て行易知難の鐵案たることが決定されたものと信ずる。換言すれば、之を知るは難きに非ず之を行ふは難しの古説と王陽明の知行合一の格言とは孰れも根本的に覆されたのである。或は謂ふであらう。行易知難の十驗證は現實上の事柄に就ては最早言葉を差挟む餘地を失はしめたが、心性上の行知問題に就ては恐らく悉く然りではあるまいと。余は茲に於て孟子の説を引いて之を實證しやう。

孟子の盡心章に曰く「之を行て著しからず焉、習て矣察かならず焉、終身之に由て而して其道を知らざる者衆し也」と、これ正に心性を指摘しての言葉である。之に由て行易知難は實に宇宙間の眞理であることを知るであらう。之を現實上の事柄に當嵌めても、之を心性上に當嵌めても孰れも然らざるはない。更に論究するならば王陽明の知行合一説の動機は専ら人間の向上心を涵養し人間をして善處せしめんと意から出でたもので彼の眞意を推論するならば彼も亦「之を知るは難きに非ず之を行ふは難し」となしてゐたものである。されば彼は人間が向上發展するためには努力・實行あるのみとの見解から、「難きと雖も畏れてならうものか。已に之を知れる上は之を即行すべし」と主張し、人間に其の難しとする處に向つて進むやう、努めしめんがために遂に知行合一説を提唱して曰く「即知即行知りて行はざれば知らざるも同様である」とし、それを

人に奨励するに善の心を以てしたことは誠に苦衷とせねばなるまい。此の説の如くんば眞理と背馳することがなからうか。難を易とし、易を難とし而して人に奨励するに難を以てしたことは實に人性と相反する者ではないか。之れ前に引證した「之を行て著しからず焉、習て矣而して察かならず焉、終身之に由て而して其道を知らざる者……」云々の孟子の説を誤謬と見做さしめ、不知不識の間に人の心理に畏難の心を植えつけ、敢て實行をなさしめぬやうな反作用を伴つた。王陽明の此の學説は學者によつて盛に傳誦されたがしかし世道人心に裨益する所はなかつたのである。或は謂ふであらう。日本の維新の業は全く陽明學の功である、と。東邦の人士は咸それを信じ「然り」となしてゐる。故に王陽明を尊敬・推稱すること極めて大である。それは次の如き實情を知らぬものの妄信である、

日本は維新の前まで猶ほ封建時代にあつた。其風習・思想は古を去ること未だ遠くなかつた。そして尊朝の氣が尙ほ存してゐた。かくて一朝、外患と其壓迫に遭遇するや憂國の士は幕府の無能無策に義憤し、尊王攘夷の説を唱へて國民を鼓動した。之は恰も義和團が唱へた扶清滅洋と歩を一つにするものである。ただ其異なる所は時勢に幸ひされたか、幸ひされなかつたかにある。而して日本は其攘夷の成らざるに及ぶや急轉して師夷(註 外人を招聘して師となすの意)となつた。維新の業は全く

この師夷の功にある。之れ日本の維新は之を行ひて其道を知らずして成功したものである。王陽明の知行合一説とは實に風馬牛、相關せざるものである。若し知行合一説が果して日本の維新に效果あつたものならば必らずや亦よく中國の積弱を救ひ得た筈であらう。中國の學者が同じく王陽明を尊敬し、しかも其の効果を異にせることは如何なる譯か。

中國の風習は古を去る己に遠く、國民の意氣の衰頹は太だ深きものがあり、顧慮の念、畏難の心などは孰れも新進文明國の國民のそれに較べて甚しい。故に日本の維新はその意義を求めずして實行されたが、中國の維新變法は先づ知るに非ざれば實行を肯じない。而して之を知るに及ばば實行の難きを畏れて敢行しない。蓋し之を行ふは之を知るに較べて難事となすとの謬説に禍ひされてゐる結果である。

夫れ維新變法は一國の大事である。が、多くは之を知らずして行ひ其成功の後に於て之を知るのである。此故に日本の維新は冒險的精神に據る所が多く、其大事たるを知るに先んじて實行され、それが成功を遂げてから之を維新と名づけ、かく呼んでゐるのである。中國の變法は必ず先に知ることを求めて後に實行する。故に永くこれを知ることを得ねば永久に實行の期がない。由此觀之、王陽明の知行合一説は尊王の意氣旺盛であつた日本を阻み得なかつたに過ぎざる耳。未

だ嘗つて之を助けた事實はないのである。而して之を國民の意氣頹廢せる中國に施せば害毒を充足するのみである。

科學の發達した今日の時代と事業とを指摘して説明すれば知行合一説の誤謬なることは更に明瞭となるであらう。王陽明が共學説に於て知・行二方面の事柄を一個人に結びつけて論じてゐる點は今日殊に通用せぬ説である。科學が進歩すればする程個人的立場に於ける知行合一的行爲は愈々矛盾を來すのである。即ち知者は自ら實行者たるを要しないし、實行者は自ら知者たるを要しないのである。知行は明かなる二分野に分れ、一知一行主義が實際的には行はれるのである。經濟學に於る分業の理論が徹底的に行はれることになるのである。其れは即ち分知行たるに外ならない。そこで王陽明の知行合一説は科學的實踐に合しないことが愈々明瞭とされた譯である。

余が煩を嫌はず行易知難の理を明かにすべく篇を重ね、累述してゐるの所以は、中國を救ふの途はこの途に由らねばならぬと確信するからである。

中國近代の積弱不振、しかも奄々として死を待つかの如き悲しき状態にあるのは實に「之を知るは難きに非ず之を行ふは難し」の説に誤まれた點にある。この謬説は深く學者の心理に食ひ

込み、學者から大衆に傳へられ、難きを以て易しとし、易きを以て難とし遂には頹廢畏難の中國たらしめ、畏るべきを畏るに當らずとし、畏る要なきを畏るべしとした。以來、易きは避けて遠ざからしめ、難きに赴き、これに近づいて知るを求め、然る後に行はんとし、始めて之を知るの難きに逢着し、失望落嘆し、遂に一切を放棄する。偶々不屈不撓の士があり、半生の力を傾倒して知得する所あれば直ちに「之を行ふは尤も難しである」となして實行に移そうとはしない。斯様に知らざれば固より行ふことを欲せぬし、知るを得ばまた之を行はず、天下の事遂に一つとして爲すべきものがないのである。これが中國の積弱衰頹の原因である。

「畏難」もとより害があるのではない。畏難の心があつて始めて人をして節勞省事に導くことを得て、より效果的に功を收めることを得るのである。これ經濟の原理である。また人生を裨益する所である。ただ難と易とを逆倒し、趨く所と避くる所とがその欲求に適從せざるがために害となるのである。

中國有史以來の文明發達の跡を曠觀するに其事跡は昭然としてこの事實を物語つてゐる。

唐虞三代のとき甫めて草昧より文明に入り成周に至れば文物は己に盛運を極めた。往時の政治制度・文章・學術・工藝は殆んど近代の歐米のそれに比肩さるべきものであつた。其進歩の速か

で、偉大なりしことは秦・漢以後のどの時代でも追隨し得ぬ所であつた。中國は草昧初開の世から今日に至るまでを二つの時期に分けられる。周以前を進歩時期とし周以後を退歩時期と見るのがそれである。夫れ人類の進化は事象に踵いて増進し繁衍する。それは愈々出でて愈々激しく、かくて無涯の向上へと歩を運ぶのである。中國の歴史は適々この例と相反してゐる。それは何が故か。これ實に之を知るは難きに非ず之を行ふは難しの一説がかくせしめたものである。三代以前の人類は混々噩々、不識不知。之を行ふて其道を知らず、日々に功を積んで進み、遂に成周の治化に達したのである。これ所謂知らずして之を行ふの時期である。周以後は人類の覺醒漸く生じ、知識日に長じ、茲に於て漸進し而して先づ知るを求めて後に行ふの時期に入つた。適々この時期に於て之を知るは難きに非ず之を行ふは難しの説が漸次人心に食ひ入り而して中國人の殆んど多くが祖先の得た所の知識が冒險と猛進によつて齎らされたものなること、並に其初めは之を知らずして之を行ひ、それに嗣いでは之を行つて後に之を知り、最後には己に知り而して自ら率先之を行ふものであることを忘却して了つた。人が或る一事を知得せるためには或は幾世紀の間が費されて之を行つた後に初めてよく之を知り得たか、或は無數の人々の苦心・研究・經驗・實驗が費された後に之を知つたのであつた。かくして知り得た事柄を後人は前人から無意識的に

承け繼いだのである。故に『知るを以て易きとなし而して行ふを以て難し』となしたのであらう。前人の拂つた苦心・苦い體驗などには全然氣付かないのである。之れが恰も知ることを求めて後之を行ふ時代だつた譯である。それが適々知易行難の説に毒され、遂に行ふて而して知るを求め、知ること因つて實行を進むるの事態に復さなかつたのである。これ三代後の中國文化が退歩のみあつて進歩のなかつた所以である。

現代人の眼光を以て世界人類の進化を究むれば分つて三時期となるであらう。第一期は草昧より文明に進んだ期間で『知らずして之を行ふ』の時期である。第二期は文明より更に文明に進んだ期間で『行ふて而して後之を知る』の時期である。第三期は科學發達以後の時代で、『知りて後之を行ふ』の時期である。歐米諸國には幸にも知易行難の謬説がなかつた、ために其文明は些かも障礙されなかつた。故によく草昧時代より文明時代に進み、文明時代より科學時代に進んだ。かくて近代の進化に到達したのである。知らざるも之を行ふ。之を知ればより楽しんで之を行ふ。之れ其進行の熄まなかつた所以で、今日の突飛的進歩を實現した所以もここにある。

昔、元の時、伊太利人「マルコポーロ」は中國に遊仕し、仕を辭して歸國後、旅行記を著して中國當時の社會文明、商工業の發達、藝術の進歩等を記述したが、歐洲人は此の記述を讀んで吃

驚し、世界には未だ此の如き文明進化の國家があらう筈はないと之を信じなかつた。それは恰も中國の人士が約三十年前、張德彝の著した「四述奇」に誌された歐洲文明の情景を指して荒唐無稽な記述だとしたのと同様である。之れにより六百年前に於る歐洲の文物は中國のそれに及ばざること甚だ遠きものであつたことを知り得る。而して彼の最近百年乃至二百年間に於る進歩の跳躍的速かさは吾が夢想し及ばざる所のものである。

日本が維新以後の五十年間に實現した社會の進歩、學術の發達、産業の發展は、彼の數千年間の進歩に優つてゐる。のみならず、其進展の速度は之を歐洲のそれに較べて更に速かなるものである。之皆科學の利用、貢獻によるものである。科學の發達を見てより人類は乃ち始めてよく具さに「知るを求め」ることが可能となつたのである。故に始めてよく「之を知りて後之を行ふ」の第三期の進化に進むことを得た。

夫れ科學は體系の科である。條理の科である。凡そ真正にして偉大なる知識は必ず科學から來る。科學的根據によらぬ知識は多く眞正な知識ではない。中國に習傳されてゐる「天は圓にして地は方なり」とか「天は動にして地は靜なり」等の數千年來の思想見識はこれを學び傳へて、自然——眞理——の如く信ぜられ、其非を知る者は極めて少ない。若し科學的研究に基いて其眞

否を驗證したならば謬説でないものがあらうか。たとへば吾々は養子のことを俗に螟蛉めいれいと呼んでゐる、これなども螟蛉が螟蛉の子に變へるとの古説から來てゐる。古籍で見ると螟蛉は桑虫で、螟蛉は似我蜂ちがはちである。似我蜂は雌がないので桑虫を生捕つて土中に埋め殺し、其の骸を擁つて、我れに似よ、我れに似よと呪文を唱へてゐると何時か己が子と化するといふのである。吾人が肉眼にて此の虫と虫との間に生じた變化を眺めたならば——即ち外觀的觀察にとどめたならば恐らく古人と同様の判斷を下すであらう。しかし科學的に之を研究したならば第一に物類の變化には斯くの如き偶發的事實のあり得べからざることを知るであらう。更に研究方法に従つて次のやうな實驗を試みるとする。即ち(一)桑虫を生捕つて土中に埋め殺し其の骸を擁りつつある状態にある澤山の似我蜂を採集し、其變化の日順に分類し之を同時に研究する。(二)一匹の似我蜂に就て其桑虫を生捕つてから似我蜂となるまでの變化に就て實驗する。

斯様な實驗によつて其の變化の状態を研究したならば先づ第一に似我蜂が桑虫を生捕つて土中に埋め殺した事實は認められるが、其の骸を擁つてゐるのではないことが發見される。即ち土中に埋め殺した後に桑虫の體内に似我蜂の卵を生じ、似我蜂の子が成長するまで桑虫の體を糧となしてゐることが發見されるのである。俗に骸を擁つてゐると信ぜられてゐることは實は桑虫を匿

つて似我蜂の子を養つてゐることなのである。似我蜂が桑虫の骸を變じて己が子となすのではなく、桑虫の肉を己が子の糧となしてゐるのである。茲に於て吾々はまた次ぎのやうな事を發見し得るのである。其れは醫學上の一妙術を似我蜂の方が人類よりも先きに行つてゐたといふ事實である。即ち麻睡藥の使用が其れである。似我蜂は桑虫を土中に埋めると先づ聖劍にて毒液を桑虫の腦髓に注射し麻睡させる。即ち酔はしめて殺さず、活かしておいて動かしめない状態におくのである。若し桑虫を即死させて了つたのでは其の肉體は腐敗して糧となすに適せない。若しまた生命を與へおき自由に活動し得たならば土を破つて脱け出すばかりか、似我蜂の卵も孵化せず了ふ。即ち保存することも子の成育も得難い。そこで似我蜂は必要に迫られて麻睡術を創始し之を試みるやうになつたものである。

西醫が麻睡術を醫學に應用するやうになつてからまだ百年を滿たない。しかも期せずして似我蜂がこれを試み始めてから幾許の世紀を経、來つたことであらう。由此觀之、凡そ必要に迫られて能く工夫し、創造發明を招來するのは獨り人類ばかりではなく、物類また此の良能を有してゐるのである。「行ふは易く知るは難し」これ人類に於てのみならず物類に於ても亦然りである。ただ人類は何時の日に於てか之を悟るの望みがあるが、物類には永遠に之を知り能ふの期がな

。

吾が國人は謂ふ。「之を知るは難きに非ず」と、しかして其知れる所は概ね、天は圓にして地は方なり。天は動にして地は靜なり、若しくは桑虫が似我蜂の子となるの類ひである。人群の進化は時間的に之を質せば三時期に區別される。上述せる如く、曰く知らずして之を行ふの時期、曰く行ふて後之を知るの時期、曰く知りて後之を行ふの時期の三期である。

而して人類に就て之を謂へば次の三つの範疇となる。一は先知先覺者で創造・發明する者である。二は後知後覺者で模倣・推行する者である。三は不知不覺者で竭力・樂成する者である。この三個の型の人類はそれぞれ人類生活の上に必要な役割を使命づけられてゐる。さればこそ、かの大禹の九河疏通も達成し得たし、秦始皇帝の長城築造も其目的を達し得たのである。然るに後世の人は之を知るは難きに非ずの說に誤まれ、先知先覺者の發見發明あるも、後知後覺者はことごと之を知るは易きとなして之を忽略し、之を模倣・推行しなかつたばかりか且つ之を目して理想難行となしたのである。茲に於て不知不覺者は即ち之が竭力樂成をなすにやすががなかつた。秦・漢以後の事績が一つとして大禹の九河、始皇帝の長城に比すべきものの無き所以はこれが爲である。豈に慨嘆せずにおられやうぞ。

方今、革命發端の始め、吾が國數千年來未曾有の局を開くの時、適々科學昌明の時代に際會す。之を知らば必ず能く之を行ふ。之を知らば之を行ふは易い。吾が四億萬の優秀なる文明の民族を以て、據るに四百二十七萬方哩の領土「較ぶるに日本前有の領土は十四萬方哩、現有領土亦二十六萬方哩に過ぎず」と世界唯一の廣大の富源を以てする、正に所謂用ゐるに之を爲すの人あり、據るに之を爲すの地あり、而して遇するに之を爲すの時あり、といふべきである。若し吾が國の後知後覺者をして能く毅然、之を知るは難きに非ず之を行ふは難しの迷信を打破せしめ而して奮起以て先覺者の言に效つて、革命の目標たる三民主義、五權憲法を推行したならば世界最高の文明進歩の中華民國を建設するは誠に掌を反すが如く易々たるものである。若し余の言を誇大なる妄言と謂ふ者ならば余は米國の革命と日本の維新を以て明かにするであらう。

米國の革命は三百萬人を以て大西洋沿岸十三州の地に據り英國と苦戰八年、乃ち英國の羈絆を脱して獨立し得た。其地たるや野蠻未開の大陸で内には紅蕃の抵抗があり、外には強敵の侵略があるといふ炊煙乏しき漁村にて國家の經營を開始したのであつた。當時科學は未だ大なる發達を遂げておらず、其地位其時機ともに吾が今日の優越に如かない。其建國の資、之を爲すの具、又斷じて吾が今日の豊富なるに如かない。其革命參加の人數たるや吾が今日の百分の一にも及ばな

かつたのである。而も其三百萬の衆は、皆冒險の精神と遠大の壯志を懷き、發奮爲す所あり、積極、猛進した。故に千七百七十六年七月四日獨立を宣言した日より今、民國八年に至る百四十二年間を過ぎざるの期間に於て米國は世界第一の富強國となつた。

日本の維新の當初に於ては其人は吾が十分の一に及ばず、其土地は吾が四川一省の大きさにも及ばなかつた。其當時の學問、知識は猶ほ遠く我の今日に如かない。しかるによく翻然、覺悟する所あり、鎖國の非計なるを知るや直ちに攘夷を變じて師夷となし、各國の人材を招聘し、歐米の良法を採取し、力めて改革を圖り、米國が百餘年を要したる強盛の地位を日本は僅か五十年に過ぎざるの時間に於て之に達した。實に三分の一の時間である。これに準じて推斷するならば中國が富強の地位に達せんと欲するに於ては恐らく十年の時日を要せずして足るであらう。或は猶ほ不信を抱く者があるならば請ふ暹羅の維新を觀られよ。

暹羅は元來中國藩屬の一つであつた。土地は大體四川一省に等しく、人口は八百萬に過ぎない。其の中には華僑の子孫も約二三百萬ある。それを除いた餘は皆半開化の蠻族である。其國民の知識を論すれば斷じて中國に及ばない。其全國の生産事業は悉く我が同胞——華僑の手に操られてゐる。其國勢を論するならば英佛兩強の領土の間に介在し、國境は日に削取され、二十年前

に於ては岌々として危く、朝に夕を保し難き状態にあつた。然るを王室の親近達が驟然奮起し、雄々しくも日本の維新に倣つて外國の人才を聘し、西歐の制度を採用し、今日に至る十餘年にして全國の状態を一新し、文化ぼつ／＼として日に上騰し今や居然として東亞の完全なる一獨立國として其國際的地位は竟に中國の上を馳するに至つた。今日東亞の獨立國はただ日本と暹羅がある耳。中國は猶ほ未だ完全なる獨立國と稱し得ない。半獨立國と謂ひ得る耳。蓋し吾が國の領域内には猶ほ他國の租界があり、他國の治權が行はれてゐる。而して吾が海關は外人の掌中に緊く握られてゐる。日本、暹羅は完全に此の羈厄から離脱した。是れ暹羅の維新は日本のそれに較べて更に速かであつたことを知る。暹羅之を能くす。如何でか中國が之を成し能はぬことがあらう。道はただ之を行ふにあるのみ。學者はここに至つて「之を行ふは易く之を知るは難き」の眞理なるに想到したであらう。故に天下の事たる唯に知る能はざるを患となすのみ。若し能く科學の理則に由りて其眞理を知り得ば之を行ふは決して至難な事ではない。之已に十數回に互つて余が反復實證した所であるから最早疑義の餘地はない筈である。しからば之を行ふの道は如何にすべきか。そは後知後覺者が自ら惑ひ以て人を惑はさざるに在るのみである。上述せる如く文明進化は三つの型の人間によつて實現されるものである。一は先知先覺者、即ち先驅者である。二は

後知後覺者、即ち鼓吹家である。三は不知不覺者、即ち實行家である。由此觀之、中國は實業家の無きを患ひとしない。蓋し其處此處に充滿してゐる國民が皆之である。吾が黨の士がよくこんな事を謂ふ。「某は理想家である。某は實行家である」と。かく二三の人を以て國事改革の實行家だと目してゐることは、まことに誤謬の甚しいものである。外人が上海に建設せる宏大なる工場、繁華なる市街、偉大なる高層建物、これらの實行家は皆中國の勞働者であつたことを知らないか。而して外國は理想家、設計家であつたのである。彼等は自ら其建設の實行に當つたのではない。故に一國の建設、經營に於て得難きは實行家ではなく、理想家、設計家である。然るに中國の後知後覺者は皆實行を重じて理想を輕する。之れ猶ほ化學を治めて三軒村の豆腐屋の主人公を忽ち裴在輅、巴德斯等の先輩として崇拜し、又醫學を治めて似我蜂の桑虫を豐す事を以て忽ち麻睡藥發明の名醫なりと崇拜するやうなものである。蓋し豆腐屋の主人公は生物化學の實行家で似我蜂は麻睡術の實行家であるといふのである。之は正しい理窟であらうか。今日の後知後覺者は悉くこの種の病弊に中毒されてゐる。輿論を鼓吹し、文明を倡導し能はざるの所以である。しかも却つて是を非とし惑亂せしめ進化を阻撓してゐるのである。此故に革命以來、建設事業の進行が不可能だつたのである。之れなる哉である。余は茲に於て飽迄も徹底的に行易難の眞理を闡

明にし之を主張せざるを得ないのである。かくて後知後覺者をして従來の迷誤から解脱せしめ、翻然改心させて似而非説を以て世を惑はし、吾が其處彼處に充滿せる實行家を阻撓するの誤りを再び爲さしめなかつたならば建設の前途に大なる希望が齎らされるのである。

第六節 能く知れば必ず能く行ふ

當今科學昌明の世に於ては事物の作製は必らず先に其實體を探究し然る後に實行に従ふのが普通である、蓋し錯誤に原因する時間的浪費と實踐上の失敗を免がれしめ、最少の勞力を以て最大の効果を冀ふからである。此故に凡て知識に従つて意思を構成し、意思に従つて條理を生み出し、條理に基いて計畫を編み、計畫を按じて作業に移る。されば其事物の如何に精巧なると事業の如何に浩大なるとに論無く短時間に完成せぬといふことはない。最近の無線電信、飛行機等の事物の如何に至精至妙なることよ。又米國の百二十餘萬哩の鐵道（千九百十六年十二月三十一日米國が其全國の鐵道を政府の管理に收めた當時の鐵道合計哩數は二十九萬七千十四哩。資本總額は百九十六億弗、中國の金額に換算して三百九十二億元であつた）、「スエズ」、「パナマ」兩運河の事業の如何に浩大なることよ。然り科學の原理に基いて四圍の情況を悉知した後、技師に由て計

畫を定め、計畫に按じて之を實行するのであるから困難は發生しない。實行に移つた後は最早無難のことと謂へやう。この事實は彰然として存在するのだが吾が國民はこの事實に就て其の言の眞なるを知るべきである。

余の革命建設たるや世界進化の潮流に基き各國既行の先例を採り入れ、其利害得失に就て深慮熟考を拂つた結果の所産で其内容はそれぞれ根據を有する。然る後、革命方略を訂立し、革命進行の道程を三期に分定した。則ち第一期は軍政時期、第二期は訓政時期、第三期は憲政時期である。第一期は即ち破壊期である。此期間に於ては軍法を施行し、革命軍を以て滿清の專政を打破し、官僚の腐敗を掃除し、風俗の惡習を改善し、奴婢を不平等から解脱せしめ、阿片の流毒を洗淨し、風水の迷信を根絶し、國內稅關の障礙を撤去する等、稅政一掃の破壊事業を擔任遂行せしめる。第二期は即ち過渡期である。此期間に於ては約法（民國元年創定のものに非ず）を施行し地方自治を建設し、民權の發生を促進する。以て一縣を自治の單位とし、縣の下に郷・村の二區を分設して縣を以て之を統べさせる。各縣は敵兵が驅逐され、戰爭が停止された日に於て直ちに約法を頒布し、之を以て人民の權利・義務と革命政府の統治權を規定する。其期間は三年を限度とする。三年の滿期後、人民は自縣の官吏を選擧する。三年の期間内と雖も縣自治局が上述の積

弊を掃除し、且つ過半数の人民が三民主義を了解して民國に歸順し、人口が調査され戸籍が制定され、警察・衛生・教育・道路各事項が約法規定上の最低程度に照し確實に其緒につける場合は自縣の官吏選舉を行ふことを得る。かくて縣は完全なる自治體となる。革命政府はこの自治體に對し、約法の規定に照して訓政權を行使する。全國平定の後、六年を俟つて各縣が已に完全なる自治に達したならば、夫々代表一名を選出することを得る。この選出代表を以て國民大會を組織せしめ以て五權憲法を制定し以て五院制の中央政府を樹立する。一は曰く行政院、二は曰く立法院、三は曰く司法院、四は曰く考試院、五は曰く監察院である。憲法制定後、人民投票に由て總統を選舉し以て行政院を組織し、代議士を選舉し以て立法院を組織する。其他三院の院長は總統より立法院の同意を得て之を委任する。但し總統法院に對し責任をもたない。而して五院は皆國民大會に對し責任を負ふものとす。各院職員の職責上の怠慢過失は監察院より國民大會に向つて之を彈劾する。監察院職員の職責上の怠慢過失は國民大會自ら彈劾を行ひ之を罷黜する。國民大會の職權は専ら憲法の修改及び公債の職責上の過失に對する制裁を司る。國民大會及び五院の職員並に全國大小官吏の各資格は孰れも考試院に於て之を定む。之が五權憲法の概要である。憲法が制定され、總統及び議員の選出後、革命政府は政權を民選の總統に返還するを要し、かくて訓

政時期はここに終りを告げる。第三期は即ち建設完成期である。此期間に入りて始めて憲政が實施される。此時各縣の自治體は直接民權を行使する。人民は自縣の政治に對し普通選舉權・創制權・複決權・罷官權を享有する。而して一國の政治に對して選舉權を除く爾餘の權利は之を付託した國民大會の代表をして代行せしむる。この憲政時期は即ち建設告竣の時であつて革命が完全に其功を收攬した日である。之が革命方略の要である。

民國建立の當初、余は極力革命方略の施行を主張し、革命建設の目的を達成せしめ、三民主義政治の實現を期したが、吾が黨の士の多くは口を極めて之を不可となした。余も亦之に屈せず幾度となく或は説明し、或は論駁を加へたが遂に成果を收め得なかつた。而して余の理想を甚だ高しとして「之を知るは難きに非ず之を行ふは難し」とせぬ者はなかつたのである。嗚呼、之れ豈余の理想の高きが爲ならんや。當時黨人の知識の低級たりしにあらざるか。茲に於て余の心は曇り、意思は冷却した。夫れ革命の持つ破壊と革命の持つ建設とは因より相因關係にあり、相補的に行はるべきものである。今、革命破壊の後にて革命建設の端を開く無く、故に革命建設のあらう筈なく、革命建設の事無きに安ぞ革命の總統を要しやう。之れ余の退志の萌せる所以である。さればこそ余は南京政府成立後、停戦を繼續し和議を開催したのであつた。願れば今や事は過

ぎ情は遷つた。今にして猶ほ民國建立の後、和議を允し總統を甘讓せるは不當であると余の態度を怪む者が多い。さりながら假りに余が總統の職に在つても黨員の多くは革命の破壊成功後に於て革命の誓約を守らず、領袖の主張に従はなかつたのである。故に縦へよく革命黨を以て中國を統一するも革命の建設を實現するは不可能であつた。其効果は新官僚を以て舊官僚に代るに過ぎぬのである。其國家治化の源泉たる國民生活上の根本的の計は毫も補救さるる所なくただ暴を以て暴に易るのみである。夫れ斯くの如くんば余が總統となるの要、何處にかあらう。或者は事情を察せず、余の當時の努力が袁世凱に及ばず故に彼と和議せざるを得なかつたのだと謂ふ。暫く之に答へることを待たう。更に甚しき手輩は余が袁世凱から百萬元の贈賄を受け遂に總統を彼に譲つたのだと譏誣した。事今日に至る已に辯明を待つまでもないであらう。苟も余が貪慾者ならんには百萬の金のために何ぞ總統の地位を去らう。觀よ、今日一督軍一年の聚斂は幾許なるぞ。一師長一年の吞噬は幾許なるぞ。余を貪慾者と目し誣する者の愚なることよ。

民國建立の後に於て余の努力が袁世凱に及ばずと謂ふに至つては言語同斷である。夫れ當時民國は己に十五省を有し、山東・河南の民黨も亦蜂起した。直隸省に於てすら軍隊の内應を見たのである。數月後には全國一律に光復することも疑ふ餘地は斷然なかつた。當時の事情を差しおい

て前後の事情に徴してみるも余が袁世凱の勢力を畏れて和議に應じたのでないことは明かである。革命成功以前余は曾つて十回の失敗を経験した。しかも奮闘の意氣、精神は毫も挫けず衰へもしなかつた。民國二年袁世凱が己に全國を統一した時には余はもう政治を問はず、實業開發に従事してゐた。この時彼は暗殺手段を用ひ、遂に宋教仁を斃した。余、時に寸兵をも有しなかつたが猶ほ彼を畏れなかつた。而して袁世凱討伐を議し、これを絶叫した。惜むらくは南方の同志が大事をとつた爲に機先を制することが出来ず失敗に遭遇した。討袁軍の失敗後同志みな頽喪不振、敢て革命の再擧を主張する者が無かつた。余は袁氏が自ら王座に即き帝制を敷くは必然的成行であることを知つたので中華革命黨を組織して之に備へ、黨員を各省に散布し帝制反對を提倡した。之が故に袁氏の帝制の未だ成らざるに之が反對は己に人心に吹き込まれてゐたのではなかつたか。而して帝制ひとたび發するや全國即起して之を撲滅した。由此觀之、即ち余が袁世凱の勢力を畏れて總統を去つたのではなく、革命建設の實現の不可能なるに退志を萌し總統の椅子を去つたものであることは國人の胸に氷解されたことであらう。かくて余の志を明察されたならば更に余の革命建設の微意を領知されたい。

革命建設とは何を謂ふか。

革命建設は非常事の建設である。また速成の建設である。尋常の場合に於る建設に於ては社會の自然的趨勢に隨ひ、因勢利導を原則とするが、革命の建設は之と異なる。革命は非常なる破壊性を有する。帝制は之が爲に斷絶され、專制は之がために完全に顛覆せられるのである。されば其の他面の作業として非常的建設が無ければならない。革命の破壊と革命の建設とは必ず相輔的に行はねばならない。其れは恰も人間の兩足、鳥の雙翼の如き關係のものである。民國創始以來、既に非常の破壊を経たが之に嗣ぐ非常の建設がなかつた。之れ禍亂相尋いで江流日に下るの觀を呈し、武人の專横、政客の蠢亂、而して收拾の法を失つた所以である。蓋しこの非常の時に際し必らずや非常の建設が爲さるべきであつた。かくてこそ人民の耳目を一新し、國家を更新せしめることを得るのである。之れ革命方略の必要なる所以である。誠に世界史を飾る民國以前の大革命を觀るに其最も轟々烈々たりしは米國と佛蘭西のそれである。米國はひとたび革命を経た後、其定めたる所の國體は今に至る百餘年、不變の状態を保つてゐる。黒奴解放問題から生じた一回の南北戰爭を除いては大變亂はなかつた。誠にひとたびの革命を経た後、其國體は一成不變、長治久安と謂ふべきであり、文明の進歩、經濟の發達は世界に冠絶してゐる。

佛蘭西はどうだつたか。其最初の革命を経た後、大亂は相ひつぎ、國體は五度更變された。二

度の帝制と三度の共和と……其八十年後に至つて兵に窮し、武徳を潰した皇帝は外敵に敗れ、身は捕虜となり、かくて共和の局が定つた。之を米國に較れば其治亂得失に於て天壤の差がある。そは何故か。説く者多く謂ふ「ワシントン」は仁讓の風あり、開國の初に黃袍——皇帝の御服——を拒けた。而して「ナポレオン」は野心勃々、天下を鯨吞するの志を有した。それが爲に共和に起つて帝制に終つたのである」と。しかしこは、一國の趨勢は民衆心理の造成する所のものにして其勢ひの己に成るや一二の徒の利益のために、或は之に乗ぜんとするものの智力のために覆さるべきものでは斷じてないことを知らぬ者の偏見である。

夫れ「ワシントン」「ナポレオン」兩者の米佛の革命に於ける立場は共に最初からの主唱者ではなかつた。米國の十三州が既に抗英宣言をなせる後、「ワシントン」は出でて之が指揮者となつた。佛蘭西に於てもまた革命勃發後、「ナポレオン」を將佐の間より拔選したのであつた。假りに兩者をして地を易へて處さしめたならば、想ふにまた同一の結果を見たことであらう。此故に「ワシントン」と「ナポレオン」の趣を異にせるは個人的の賢明と否とに關係しないのである。其國家的因襲が兩者をして斯くの如き異なる結果になさしめたのである。

「アメリカ」大陸は元來は、英帝國統治の域外に在つた野蠻大陸で、英人の其地に移住してよ

り二百餘年を経たに過ぎなかつた。英人は本來、冒險的精神と自治的能力に富める民族で、その米國に移住した後は即時に自治體を組織した。それが遂に十三州の自治體を形成し、英國皇帝の統治下に歸したとは謂へ、長鞭馬腹に及ぶべくもなく、海外の扶餘(註、扶餘國は今の朝鮮と吉林の隣接地方で支那の統治下に在つた時に於ても支那は事實上支配)で、英國は之に對し僅かに繋留してゐたに過ぎなかつた。其の一度び些か苛酷なる徵税に及ぶや十三州は聯合、團結して之に抵抗したのであつた。これが其革命の起つた由來である。血戰八年而して獨立權を獲得し、遂に「アメリカ」聯邦を創成し、共和國を樹立した。其未だ獨立せざりし以前に於て十三州は己に各々政治を行ひ、地方自治は己に極めて發達してゐたのである。故に獨立の後、政績はポツポツとして日に上騰した。其政治的基礎の強固なるは全く地方自治の發達したる賜である。爾餘の中米・南米の各拉丁人種の殖民地に於ても百數十年來、米國に倣ひ、相前後して母國から離脱し共和國の建立を試みたが、其政績上の進歩は米國のその如くではなく、變亂が常態的に繰返へされた。其原因は凡て地方自治の基礎が鞏固でなかつたことに根ざされてゐる。しかも其の一度び母國の統治から脱離して共和國を建立したる後、大小十九個の國家は「メキシコ」が外兵の侵入を受けて帝制に強改されたのを除いては、一國として共和の覆された國はない。かく各々其立國を全うし得たのは一に新天地たるの賜であ

る。これがために人心に舊くから染めづけられてゐた汚點——專制政治から受けてゐた因襲的奴隸心——を洗淨し得て永遠に君主政治から脱離し得たのである。

佛蘭西は然らずである。佛蘭西は歐洲文明の先進國で、人民の聰明と勤勉、且つ革命前に在つて久しい間、民權の哲理が鼓吹されてゐたにも拘らず、又、米國の先例を模範としたものではあつたが、猶ほ革命に因つて一躍、共和憲政の治を獲得することが出来なかつた。それは何故であらうか。彼の國體は本來、君主專制國であつた。同時に其政治は中央集權を原則としてゐた。故に新天地的地理上の革命要素と、他の一つの要素たる自治の基礎とに缺如してゐた。

吾が中國の革命に對する缺陷の主要點も亦悉く佛蘭西の場合に於るそれと同様である。しかも吾が人民の知識・政治的理解・能力等は更に遠く佛蘭西國民のそれに如かない。かかる状態に在りながら余は猶も革命より一躍共和立憲政治の實現を希望し之を欲求してゐる。然らば其道は何に由ると謂ふのか。之れ余が實際政治上の過程として過渡時期を創案し、之に由て其缺陷を補救し、颶風の危険から免かれしめやうとした所以である。此過渡時期に在つては約法政治を施行し、人民を政治的に訓導しつつ地方自治を實行するのである。惜むらくは當時、余の同志は其重大理由と眞意を明知せず、余の主張を容れなかつた。而してただ余の口にせる約法の名のみを採

つた臨時憲法を定め共和の治礎となした。さりながら其道に由ることなくして如何でか一躍、遠大なる望みを達成し得やう。當時、衆人の希望したる所こそ實に妄想と名づけらるべき類ひのものである。然るに却つて余の方略・計畫を目して行ひ難しとなした。何ぞ思はざるの甚しきよ。余が革命を鼓吹し中國に共和制を創建せんと擬した當初、歐米の學者も亦多く之を目して不可となした。蓋し彼等は最近百年來の世界の歴史に鑑る所があつたのである。

民國の建立された一年前のことであつた。余は遇々倫敦を過ぎた。その時、英國の名士、加爾根氏が突然余を「ホテル」に訪ねて來た。氏は嘗つて中國を遍遊したことあり、吾が國の風俗人情に精通してゐる人で、その著書では中國の事物に關し極めて多くのことを語つてゐる。就中、『中國の變化』の一書は最も主要なものである。彼は余が中國を改革して共和制を實施すると提唱してゐることを耳に挟み、滿腹の懷疑と同時にそれは斷然不可能なことだと考へてゐたらしく「ホテル」に余を訪ねて、余と數日に互つて意見の交換やら議論やらを交したが、余の説明も遂に彼を納諾せしめることが出来なかつた。處が余が革命方略の三時期を示すと彼は渙然氷解し、欣然として余の説に服したのであつた。そして彼はかう謂つた。斯様な計畫を有されるならば武人の専制・政客の攪亂から免がれることを得るであらう。王朝が倒れて民權の確立を見る危

險期に於けるそれを……。猶ほ今後、自分も貴下の革命鼓吹を援助するであらう。と、余に援助の約束を與へた。武漢起義の直後、東亞に於る英字新聞は筆を揃へて、吾が民國建設の計畫が完全なる準備を有し成算胸にあるものとして不日之が施行を見るであらうから中國に同情をもつ親友は目を拭ふてその成功を見られよ。云々と喧傳した。これ皆加爾根氏が倫敦の各新聞に吾が計畫を賞揚し説き廻つて呉たからである。惜むらくは余、總統の職に就ける後、此種の計畫が同志の遮る所となつて實行されず、遂に歐米の吾が同情の士をして失望せしめて了つた、而して以後、歐米學界の吾が計畫を知る者も敢て再び吾が説に肩をもたなくなつた。そればかりか真相を知らざる者の多くは中國人民の知識程度はまだ幼稚であるから共和政治を實現するは不可能だと斷じて了つた。之が故に米國著名の憲法學者たる「グッドナウ」氏は袁世凱に帝制の舉を勧めた。中國人は「グッドナウ」氏の勸袁帝制の舉に對し次の如き點から頗る怪訝に感じたことであらう。彼は共和國の一學者でありながら何故共和に與せず、帝制を推揚したのであらうか、と。そうして多くの人士は其理由を説明し得ないであらう。余は此の間の事情を明白に諸君に語ることを得る。彼は共和國の國民である、それだけに共和政治に關しての種々な經驗をもつてゐる。米國人は知識程度の低い人民の共和制に及ぼす弊害を飽喫してゐる。米國の外來人民は米國境内に居住

後、數年にして民權を享有する。又、米國の黒奴は解放後直ちに民權を享有した。そこで米國の政客は此の兩種人民の民權を利用して屢々意外の政争を捲き起した。其都度正義を尊ぶ識者をして聳聳・懊惱せしめた。で、遂に「文盲者は國民の權利を享有し得ず」との禁令が定められ、政争上の禍因が防止された。斯様な苦い經驗をもつ彼等、米國の學者達は知識程度の低い人民が共和國建設を欲してゐると聞いただけでも痛心疾首し、口を極めてそれを不可とするのである。「グッドナウ」氏の帝制勸告の心理も茲に在る。中國人民の知識程度が低いことは固より隠蔽すべくもない。且つそれに加ふるに數千年來の專制の毒牙が深々と民衆の脈を刺し貫いて心臓に食ひ入つてゐる。まことに米國に於ける黒奴及び外來人民の最も知識の低級な民と大差ない。然らばどうしたらいいのか。袁世凱一派の手輩は言ふまでもなく中國人民の知識程度は斯様に低級であるから共和は絶対に不可能だと思惟し、また堅く信じてゐる。曲學の士も「亦專制不可に非ず」と謂つてゐる。嗚呼、牛でさへ能く之を教うれば耕すものを……。馬でさへ能く之を教うれば乗すものを……。況や人間に於てをや。今一人の幼童を見出し入學させて讀書せしめんとした場合、幼童の父兄達が「此の兒は字を知らぬから學校に入れて讀書させても駄目だ」と答へたとするならば随分可笑しな話ではないか。字を識らねばこそ讀書を急務とするのではないのか。況や現

在、世界の人類は已に其進化の過程に於て幼童の域に達してゐる。故に自由平等の思想は日を逐ふて發達しつゝある。所謂世界の潮流はこれを拒否し、又はこれを抑壓することは絶対に不可能なのである。故に中國が今日、共和政治を採り入れんとするのは恰も童幼の入學讀書のその如きものである。然り入學兒童に對し最も肝要な事柄は良師と良友とによつて之を教育することにあり。中國人民は今日初めて共和の治下に進んだのであるから先知先覺の革命政府を以て之が教育を擔當せしめねばならない。之れ即ち訓政の時期であり、それは專制から共和政治に入る過渡期に於て必要とする所の施政である。これに由らずんばそれは必然的に亂に流れるであらう。

同盟會成立の當初、會員中には革命方略の實行し難きを疑ふものがあつた。彼等はかう謂つた、清朝の偽立憲は人民に許すに九ヶ年間の猶豫期間を以てしてゐる。今吾が黨の方略は、定むるに軍政期三年訓政期六ヶ年を以てしてゐる、これでは清朝の九ヶ年と等しいではないか。吾等の治を望むは甚だ急なるものである。故に革命に身を投じたのであつて、若し革命成功の後に於て猶ほも九ヶ年の時日を費して始めて憲政の治を得るのだとは、迂遠極るではないか。云々、余はそれに答へて常に謂つた。この方略に據らぬ限り完全の民國を創成する望みは無いのである、と。今、民國改革して茲に已に八年矣。獨り憲政の治の期し能はざるのみか、清朝の一時的偷生

をすら欲求するも得ないではないか。尙ほ何をか望む、九年の完全なる民國の出現をやである。或は又、訓政の六年を疑ふことによつて曲學者の唱へた開明專制——本質的には全然同じからざる——それをでも得ることが出来たか。

開明專制は專制に目的がある。而して訓政は共和制の樹立を目的とするものである。之れ天壤の別ある所以である。譬へば今次の世界大戦争の如き、凡そこの大戦に参加した國は共和國たる君主國たるとに論なく皆一律に憲政を停止して軍政を行つた。從來の人民の行動の自由、言論の自由、集會の自由は皆之を剝奪された。甚しきは飲食に關する營業權まで一切政府の掌握する所となつた。しかも舉國的に異議がなかつた。且つ其身命を捧げて國家の犠牲となつた。其目的は戰勝と國家の存續に繋がれた。人の已に憲政を行ふ猶ほ且つ之を停む。況んや憲政尙ほ未だ發生せず、まさに革命手段に訴へ血戦によつて之を求めんと欲す。豈に開戦の初期に於て憲政を施行し得やう、これを一圖に求むるはこれまことに幼稚・無經驗の思想といふべきである。今、民國成立已に八年矣。吾が黨の士はこの八年間に於て應に無量の經驗と多少の知識とを得たことであらう。若し能く余が十數年前になせる訓誨、主張を回想し能ふならば、まさに恍然大悟し而して再び余の言を以て理想難行の大風呂敷となさぬであらう。

夫れ中國は數千年來の專制のために退化し、しかも被征服の國民族たるに甘ぜねばならなかつた。一旦革命光復し、ここに共和憲治の國家を成立せんと欲するならば、訓政の一道を棄てては他に斷じて其目的を達成せしめるの道はない。米國が比律賓の島民を扶助して其獨立を望むや先づ訓政より着手し以て其地方自治の基礎を醸成せしめることに努めた。以後、今日に至る三十年を過ぎずして一大變化を招來した。半開化の蠻族は一躍して文明進化の民族となつた。今や比律賓の他力自治は發達の極點に達し、全島の官吏は總督が依然「アメリカ」人であるのを除いては他は悉く土人が任命されてゐる。斯様な状態にあるから不日必らず完全な獨立を見るべく、將來の政治的進歩、民智の發達は世界の文明國に劣りはせぬであらう。これ訓政の効果である。米國は何故比律賓に對し、即時其獨立を許さなかつたか。而して訓政の時期を經過せしめたのか。これ往年の黒奴解放後の紛擾に鑑み、この政策を行つたのである。

吾が中國人民は久しく專制下に緊縛され、奴性既に深く牢として抜くべくもない。故に訓政時期を経て其の舊く染めづけられたる汚點を洗淨せねば、どうして民國の主人公たるの權利を享有し得やう。袁世凱帝制の時、勸進者の多かつた所以もここに伏在してゐるのである。

夫れ中華民國は人民の國である。君政時代は大權の總攬は一人の手にあつた、今や則ち主權は

人民全體に屬してゐる。故に四億萬の人民は即ち今日の皇帝である。國內の百官は上げ總統から下は巡查まで皆、人民の公僕である、而して中國四億萬の人民は祖先の誕生以來、專制君主の奴隸であつた。從來は多く主人となることを識らず、敢て主人とならうともせず、また主人となり能はなかつた。而して今や皆主人となつたのである。その忽如としてこの地位に登り得たことは、誰が之を爲し、誰がここに致らしめたのか、それは革命が成功し、專制が破壊された結果である。これ吾が國有史以來未曾有の變局で吾が民族、破天荒の創舉である。かるが故に民國の主人は實に生れたばかりの嬰兒に等しい。革命黨は即ちこの嬰兒を生んだ母である。既に之を生む。之を養成し之を教育し、かくして革命の責を盡さねばならない。革命方略に政訓時期を有するものも之がため、既に嬰兒であるこの主人公に政治的教育を施し立派な成年に育て上げた後、これに政權を返還する。昔に在つても商の伊尹はその國主、太甲成王が未だ執政能力を有しなかつた期間、訓政を行つた。專制時代の臣僕尙ほ且つ斯の如くである。況や中國未曾有の基礎を開いた革命黨が民國の幼主を育成し、國基を鞏固にするの行爲を誰が容めやうぞ。惜むらくは當時の革命黨員は多く之が必要事たるの所以を知らず、遂に責任を放棄し天職を失脚し、革命の事業としてただ能く破壊の功を收めたるのみにて建設の業を成就せしめなかつた、故に革命の結果は

僅かに中華民國の名を獲得したに過ぎない、悲しい哉！。而してまことに呪はしい言葉ではあるが破壊の革命は成功して建設の革命は失敗したのである、それは何故であるか。之「知れりと知らざりし」の故である。

余の革命に於るや曾つて十起十敗した。當時大多數の中國人は猶ほ滿洲族の征服せる所なるを知らず、故に醉生夢死、革命を視て大逆不道とした。其後革命の風潮漸次旺盛となり人々多く覺醒するや滿清朝の倒壊、漢民族の復活の當然たるを知り、遂に能く一舉にして滿清を覆すこと掌を反すが如く容易ならしめた。ただ建設の革命に對しては一般人民は固より未だ之を知らず、革命黨員もその妙策を知らなかつた。革命事業は本來、その破壊作業は至難で、建設作業は容易である。現在その至難とされる方面に於て成功し、容易とされる方面に於て却つて失敗した。それは又何故であらうか。之は、その容易なるが故に人多くその必要を知らず之を忽略した。これその失敗の所以である。何を以て之を容易と謂ふ。因に破壊已に成れば革命黨のために忌しかつたあらゆる阻力は悉く消滅、撤去されたのである。阻力がひとたび滅滅すれば吾人の意のままとならぬ事はない。即ち活動の自由は與へられたのである。慎重に行動せねば不測の災禍の伴つた破壊策謀時代に較ぶれば天濶の差を其處に見出すではないか。然り黨人は排滿革命の救國上必要な

ることを痛感するや難を犯し險を冒して之を成就した。さて破壊既に成つて安全容易の建設過程に入り、幾多の事業が續出したが最早革命的手段を必要としなかつた。この建設事業の墮落した所以に就て今最も平凡な事柄を以て之を實證するであらう。

吾人が同盟會を創立し革命の任を負ふて立つや先づ革命の鼓吹に従つた。かくて天下國家に任ずるの有志を集めて、偕に三民主義の實現を精神とする中華民國の創立を目的とすることを誓約した。この信條を信仰せぬ者は縦へ正式に宣誓を行ふとも吾が革命黨員たることを余は承認しなかつた。最初、一般の志士は吾が黨の宣誓儀文を見做して形式上の事位にしか考へず、それは革命進行の上に何等裨益する所のものではないと思つてゐた。處がどうであつたか。數年間に革命黨の努力は膨脹し黨は強い團結力によつて固く結ばれ、遂に能く清朝を倒壊し得た。其の成功はこの宣誓儀文のあつたことに因つて黨が心理的に結合されてゐたことに歸するのである。一黨猶ほ斯の如し、況や一國に於てをや。

常に人はかう謂ふ「中國四億萬の人民は實に一握りの散沙に等しい」と、今この四億の散沙を聚めて一有機體たる法治國家としてその結合に向はしめんとする。其道は如何にすべきか。それは宣誓に従ふ正心誠意の表示に端を發せねばならぬ。而して後、修齊治平の望も期待されるので

ある。

今世の文明法治の國は宣誓を以て法治の根本手續とすることに於て一致してゐる。故に其歸化入籍の民に對しては其國體を尊崇し其憲法を恪守し、義務に忠實なることを宣誓せしめ、以て誠心の表示を必要とする。かくて初めてその國民たることが允許される。然らざれば終身その國に居るも外國人として取扱はれ、國民としてその權利を享有し得ない。其自國の官吏、議員に對しても亦必ず宣誓を行はしめて後職權を授けられる。若し遇々國體の改革あらば則ち新國家の政府は全國人民に一々宣誓せしめ以て新政府に對する賛同を表示させる。然らざれば敵人と見做し國境外に放逐する。これ近世文明法治國の通例である。請ふ觀よ。今回の大戰後、歐洲の新成國家、或は革命國家にして即座に國民の宣誓を行つた國は治り、これを行ふことを得ず或は之を行ふことを知らざりし國は常に大亂が繰返されてゐる。中國の現状も之が爲である。

夫れ吾人の革命黨を組織するや、革命黨を以て先天國家——將來の日を約束された國——と目した。果せる哉、革命黨によつて民國は創成された。建元の初に當り余、初めて宣誓して總統の職に就いた。で、これに従つて凡そ文武官吏、軍人、人民は一律に宣誓して民國に歸順せるを表示し、忠勤を盡すべきである旨を布令せんとした。處が吾が黨の同志は悉くこれを以て急務と

認めず、口々に不可とし極端に反対したので余も如何とも致し方なく暫くにして論ずることを罷めた。其後袁世凱が余に繼いで總統に就任せんとするや余はこの點を特に重要視したが、同志の多くは之を漠視してゐた。余は、先例もあるのだからその理山から事を粗略に附するは不可である旨を極力主張した。袁氏もこの宣誓の一事をさして重大事と見做さなかつたものの如く余の命に聽從した。茲に於て彼は共和を服膺し帝制を永絶する旨を宣誓し表示したのである。其後不幸にも袁世凱は果然、誓約に背ひて皇帝を潛稱するの舉に出でたが、この一宣誓があつたために彼を討罰するの絶大理由を吾人に與へた。而して各友邦も亦我を正しとし彼を非とし、茲に於て帝制取消勸告の舉に出でた。袁世凱の帝制失敗はこの帝制取消が最大の原因をなすものである。蓋し帝制取消のために袁世凱を圍繞せる面々がそれぞれ夢見てゐた王侯の望は悉く果無き空想に終りそれがために鬨志は全く挫かれた。これ陳宦が寢返つて獨立を宣言した所以であり、袁世凱は之がために斃れた。帝制の取消を餘儀なくされた直接原因は列強の勸告である。列強の勸告を由來したのは民黨の袁世凱反対が極めて十分の理由をもつてゐたからである。其具體的理由として内外に表示された所は袁世凱の宣誓違背である。若し當時、袁世凱にかの宣誓の一事がなかつたならば、その皇帝潛稱の日、民黨の反対、抵抗あらうとも列強は民黨の態度を目して愚にして煩

事を構ふるものとなし勸告措置にも出でず帝制も取消されず、袁世凱の舉措は或は失敗を致さなかつたかも知れない。何故か蓋し袁世凱は本來君主の臣僕で、共和を主張したことはない。而して民黨が昧然總統を袁世凱に讓つたことは、民黨自ら共和の犠牲たるに甘じたものである。既に甘じて之を放棄せる者が後に至つて又之と争ふことは愚にして事を構ふる行爲でなくして何であらう。ただここに宣誓の事があつたために然らざるのである。故に列強の公明なる主張を獲得することに成功し、中國の共和が維持されたのである。由此觀之、宣誓豈に重しとせずや、乃ち吾が黨の士が民國建設の當初、宣誓の事を以て不急の務であるとして之を罷めさせ且つ余の主張を以て理想となしたが、これらの事柄の多くは孰れも平凡極る事柄なのである。

吾人は結黨の時に宣誓の儀を遵守實行した。然るに開國の初、國民更始の日に於て法治上の根本手續たる宣誓の典禮を罷めたことは建國失敗の一大原因とせねばならぬ。若し革命黨が當時余の言葉を誇大妄想の言と見做さず、民國の行進もまた組黨の際の如く、凡て歸順の官吏と新進の國民とは必ず民國に對し正心誠意の宣誓をなして民國の擁護、民權の扶植、民生の促進を表示せしめ、それは必ず宣誓の典禮に照して行ひ、かくて民國の國民の權利を享有せしめ、然らざる者は清朝の臣民と見做し、かく宣誓せる後に於て民國に對する違背行爲あれば叛逆の罪を以て之を

罰すれば、初めて法律上の根據がそこに發生するのである。今日の中華民國の如きは若し法理論を以て之を論ずれば、少數の革命黨員及び袁世凱だけが民國擁護の宣誓を行へるために良心上、法律上民國に背叛し得ないのであつて、其餘の四億の人民は良心的にも法律的にも些かの責任をも負ふの要がないのである。而して昔日革命黨員を逮捕殺せし清朝の廷臣、革命黨員を焼き殺したる軍人又は革命黨反對の指嗾者等が今日民國政府の總長・總理・總統に納つてゐるのを目のあたり見る。しかも毫も良心の自責・法律の制裁がない。これを想へば八年の間に屢々國體が變易したことも何等怪しむに足らない。

夫れ國家は人類の集合體である。人は心の器であり國家の政治は一つに人群の心理的現象である。之を以て建國の基は當に端を心理に發すべきである。故に清朝の臣民より民國に歸順するには先づ正心誠意の表示をなさしむべきである。これ宣誓の大典を必要となすの所以である。革命黨は結黨の時には之を行つたが建國の時には之を行はなかつた。之を以て黨人時代に於て奮勵し無涯の宏願と魄力を有し遂に能く破壊の功を遂げたが、建國後はこの能力を失ひ遂に建設の成す無きに致つた。これを行ひしと行はざりしの効果的作用である。行はざりし所以は、能はざるに非ずして其必要なることを知らなかつたのである。故に曰く「能く知る者は能く行ふ」と。理

想と云ふ乎。革命黨は既に余の主張せる民國建設の計畫を理想の太だ高きものとした。而して由るべきの道施すべきの策を知らず、革命後破壊あつて建設無きの局を造成して、中國人民をしてこの八年の苦痛を受けしめた。民國の建設が一日不完全なれば人民の苦痛は一日深かまる。而して國治民福は永へに達成さるべきの期が無い。故に今後の建設の責は獨り之を革命黨にのみ委すべきでない。而して先知先覺の國民は當に、仁に當つては譲らず而して之を自負すべし、である。

夫れ革命の先烈は既に身命を投げ捨て、血流をもとせず其極難、極險とされた所の破壊事業の目的を達成したのである。國民は宜しく奮勇繼進して、容易・安全たる建設事業を完成すべきである。國民よ、國民よ。急起直追せよ。萬衆一心、先づ國基を方寸の地に奠め、去舊更新の第一歩として良心上の建設を打ち建つべきである。余は率先之を行ふであらう、誓ふて曰く。

孫文、正心誠意、衆に宣誓す。之より去舊更新、自ら立つて國民となり、盡忠竭力、中華民國を擁護し、三民主義を實行し、五權憲法を採用し、務めて政治を修明し、人民を安樂にし、國基を永固に措き、世界の平和を維ぐ、此誓

中華民國八年正月十二日 孫文立誓

この宣誓典禮は本來政府に於て執行すべきであるが、今日の民國政府にはそれ自身にこの元素

を有せぬのでこの典禮を執行するを得ない。望むらくは有志の士は各々自縣に地方自治會を組織し、發起者、相互に式に照して宣誓し、會の成立せる後は各會員に由て全縣人民に向ひ之を執行し、必らず誓章に自筆署名せしめ、右手を舉げて衆に向ひ之を宣讀せしめよ。其誓章は之を自治會に藏し、證明書を發給せよ。必らず全縣の成年男女に普及せしめ、一縣告竣せば他縣の自治會成立を助け以て之を推行せよ。凡そこの宣誓の典禮を行ふや良心に問ひ、法律に按じて始めて憾みなきを得。而して中華民國の國民と稱することが出来る。然らざれば仍ほ清朝の遺民となすのみ。民國の成立すると否とは吾が國人がこの民國歸順の典禮を樂んで行ふか、否かによつて視られる。愛國の士の率先之を行はんことを。

附錄 陳其美(英士)の黃興(克強)宛書翰

克強我兄足下。

余(陳其美)猥りに非才を以て諸公に追隨し國事に奔走する茲に年有り。毎々に德音を懷ひ、誼骨肉を逾ふ。去夏征風東發の時、余病を養ひて院に在り、握手して素情を傾けんとせるも我が心の獲る莫く、足下の行期は定つた。復事を以て先日道に就く、卒に一面して區々の意を足下に商議するの機の無かりし、縁の何ぞ慳なることよ。日者、日友宮崎君と語る。近狀に述及

し、益々國事に眷々たるに彌々余をして彼の美風に動ぜしめ君子の思を滋くした。

溯に辛亥以前、二三同志、譚宋の輦が上海を過ぎるとき吾が黨の鬪士に談及すれば必らず交に足下を推した。以て孫氏を理想、黃氏を實行となした。而も足下が革命實行家たることは海内の賢愚の異口同音せざる莫く、而も足下に影響する所が無い。ただ中山先生は理想に傾くと謂ふこの一言は吾人の腦裡に入り、遂に中山先生は一切の政見は凡そ施行易からざるものと見做した。今日に追ふも猶ほこの言を持して中山先生に反對する者がある。さりながら過去の諸々の事實に徴するに吾が黨の重大なる失敗は、果して中山先生の理想の之を誤れるに由るか、そもまた中山先生を誤認し之に反對して失敗を致せるものなるか。前回の失敗が中山先生の理想を誤認した結果にあるとして今日再び中山先生の主張する所を理想なりと輕視し之に従はざれば再び悔を他日に貽すに至るであらう。これ余が既往を追憶して吾が非を洗滌せんと欲する所以である。爰に昔日中山先生に反對し失敗を招致せる點を明かにし中山先生に負けたる數事をつらね告げるであらう。足下また之を聞くを樂しまるるや否や。

中山先生の總統に就職するや海内の風雲・擾亂未だ熄まず、中山先生の政見は一つとして實行を見なかつた。而して財政上の逼迫は更に之を掣肘した。對露借款は臨時參議院の極端なる

反對に遭ひ、海内の人士は利權喪失に藉口し悪口罵言を浴びせた。其實相を點檢するに手取九七、利息年五分、擔保は固とより存したが吾が利權を障礙する種のものではなかつた。後日の袁氏の五國財團借款は如何。手取八二、鹽稅を擔保とし更に擔保不足の故を以て四省の地租を重加した。且つ財政監督の全權を允許した。その利害得失は孰れにあるか、豈に之を同日に語れやうぞ。吾が同僚は之を察せず、終に經濟的影響を受けて政府の行動は妨げられ中山先生は束手無策の立場に立つを餘儀なくされ、國家は一層の危態に瀕した。偏見を固執して大局の誤を貽したことは中山先生に負けたることの其一である。

南北和議以後に及んで袁氏が臨時總統に當選した。當時中山先生が最も重要視して熱心に主張した點が三つあつた。一は袁氏は須く南京で就職すべし、と主張したことがある、中山先生之に對する意見はかうであつた。南北の聲氣は未だ完全な調和を見てゐないに因り雙方の舉動、時に誤解を生ぜぬとも限らない。且つ之が共和民國統一の前途に幾多の障礙を來す事を深く恐れる。此障礙を除くには袁氏が南京に於て就職するにあらざれば其功を納めることを保し難い。それが又南北の感情を結びつける所以であると共に袁氏の民黨に對する信用を堅め而して民黨の袁氏に對する嫌疑を一掃するものである。二は民國は須く南京に遷都すべきであると

なした。北市は明清兩朝の首都で帝王の癡夢は自由の鐘の醒し能はないところ。また官僚の遺毒は江河の水の濯ぎ能はない所であるからその憑る所を失はしむべきである。專制の藥を刈り取るには地を遷す事を最良とする。以て一般の汚穢は蕩滌される。三は清帝は退位の詔を以て全權を袁氏に授け共和政府を組織せしめる權能はないとした。中華民國は臨時約法に根據する人民代表の公意を採擇して後に構成さるべきものであつて清帝が袁氏に私に授受し得る所のものではない。袁氏の臨時總統は乃ち國民の公選する參議院議員に因つて選舉さるべきもので清朝が任意に之を與へ得べきものではない。中山先生はこの點には再三注意した。中山先生は當時、この三事は最も適當なる主張であるとして死力を賭して之を争ふことを惜まれなかつた。其後袁氏は南京就職、人民の公意採擇の前言を食みて約法を反古にし共和を覆さんとし之が後患を演成した。則ち中山先生が當時主張せる政見の實現を阻んだことが斯様な事態を招來したのではないか。試みに問ふ。中山先生の主張の政見の實現を見なかつたことは複雑な事情もあるであらうが、其重要原因は黨人の當時の識見がここに思ひ及ばず同意を表せなかつた事がここに到らしめたのではないか。中山先生に負けたる事の其二である。其後中山先生は退職し、同志を率ゐて純粹の在野黨に立ち教育の普及、實業の振興に専ら従ひ、民國國家百年の根本大

計を樹てんと欲し政權を袁氏に悉く讓つた。吾人は其時も亦中山先生の態度を目して理想の世界を空歩するものとして之に反對したが、間もなく政府は徒らに地方行政に干渉の態度を採り(註、袁世凱が國民黨系の四都督、湖南の譚延闓、江西の李烈鈞、安徽の柏文蔚、廣東の胡漢民に對し軍民分治の實行を迫り、汪瑞閔を江西民政長に任命し李を高壓した事件)卒に朝野氷炭、政黨水火の分裂状態を出現し、袁氏の忌を惹き、天下の疑を起した。而して中山先生の謀國の苦衷、經世の碩畫を天下に表白し其效を收むるを不可能ならしめた。中山先生に負けたることの其三である。以上の事柄は總じて一般黨人の無識に屬すること余と足下の過ではない。宋案(宋教仁暗殺事件)發生の時、中山先生は適々上海に歸來し在り袁氏が專制政治を蒸返し民國の付託に負かんとするの意あるを知られてゐたので之を除去するの意を固められた。之が所定の計畫は二途あつた。一は日本との聯絡であつた。この對日聯絡の舉は袁氏を孤援に陥れ、吾黨の勢力を厚くするものである。日本は吾が鄰邦である、鄰邦と親善關係を結ぶことは吾黨にとつて祝福すべきことで、、が我を援助せば我れ勝ち、、が袁を援助せば袁勝つ。これ中山先生の言である。中山先生は對日聯絡を最も重要視され、自ら折衝に赴くことを決意された程だつたが、吾々は之を漠視し、之を力行せんとはせず、孫氏の舉措を輕率として深く怪んだが、間もなく袁氏はその猿臂を伸し、孫寶琦、李盛鐸を東使とした。見よ、中山先生の企圖に

出でざりし爲に我々は與みする所を失つた。(

(八行削除)

二は速戰である。中山

先生はおもへらく、袁氏は手に大權を握り、號令發出、軍隊出動の行動を採るには極めて自由な地位にあるが、吾方はたゞたゞ其不意に出て攻むるに其備無く、迅雷耳を掩ふの暇も與へず、人の先を制すべきであると。且つ謂ふ、宋案の證據は已に確鑿され、人心激昂し、民氣は憤りに漲つてゐる。此の時を利用すべきである。然らざれば時機は逝いて戻らず後悔終嗟するも及ばないと、之また中山先生の言である。然るに吾人の遲鈍は又之を信せず、靜かに法律的解決を待たんと欲し宣戰準備を等閑にした。此の優柔不斷が却つて其亂名を受けやうとは……

法律は遷延を以て效を失し、人心は澁滯を以て冷却する。時機を慢然と失し、計畫は成らず、事の全きを欲求して適々其反對の結果を得た。吾人が逸早く謀をめぐらしたならば斯様な悲憂を招くことはなかつたであらう。中山先生に負けたることの其四である。宋教仁刺殺事件は袁趙の徒が國法を蔑視した行動であつたに拘らず遅々として團結しなかつた。五國借款は又國會の承認を得ざる違法の成立である。此の時反對の聲は國を擧げて狂瀾した、が、吾人は國會も在り、法律も在り、各省都督の力争も在ることだから袁氏は結局は屈服し、之を取消さざるを得まいと觀た。中山先生は謂つた、國會は口舌の争闘場だ。法律は暴力の前に何等の抵抗力を有しない。各省都督の多くは袁の鼻息を窺ふもので主義主張を固執するものではなく、智雄を自誇する擁兵自衛の野心家で恃みとなすに足らない。解決を欲求するならばたゞ武力に訴ふるあるのみと。而して其主張せる所の方法は一は速かに問罪の師を興し、他方全國人民の名を以て借款不承認の公意を五國財團に表示することであるとされた。五國財團は中山先生の忠告に基いて二週間内には現金を交付せぬことを承諾した。中山先生は乃ち廣東に獨立を電命したが廣東は命を聽かなかつた。で、親ら廣東に赴いて事を主持せんと欲したが吾人は之を阻み之を聽かなかつた。已むを得ず余をして上海に獨立せしめんとしたが、吾人は又上海を彈丸の地と

なすに忍びず更に之に聽従しなかつた。此の時海軍側との交渉で海軍は獨立宣告を希望し中山先生も之に大賛成であつたが、吾人は海陸同時に驟起すべきであるとの證を固持し海軍の率先的獨立を欲しなかつた。嗣で北軍は上海に來つた。余は海上邀撃によつて上陸を不可能ならしめんと擬し、中山先生も然りとされたが、足下は之を非計とされたのであつた。其後、海軍は袁の命を奉じて煙臺に向け拔錨した。中山先生は此の報を聞くや之を抑止しやうと欲して謂つた、海軍我を助くれれば我れ勝ち、海軍袁を助くれれば袁勝つ、我れを助くることを欲するによつて其北行を引留めよ。煙臺に向へば恐らく變を生せん、と。余と足下とは海軍は曩に獨立の同意を表示せるにより後日に至つて豹變する如きことは斷じてなしと主張し共に其言を聽かなかつた。海軍は北上するや袁氏の藥籠中に入つた。次いで又吳淞砲臺の軍艦砲撃の擧あり、海軍側の猜疑と憤怒とを招き茲に於て海軍は完全に我から離れてしまつた。且つ中山先生は當時屢々南京獨立を促したが、某等は猶ほ下級軍官なるを以て運動成熟せず、中山先生は自ら南京に赴き獨立を宣言せんと決心されたが、二三同志はみな軍旅の事は足下の長ずる所であるとし茲に於て足下の南京の役を見た。中山先生今次の主張政見は孰れも借款の破壊、袁氏の倒壞を計つたものであつた。が、時日は遷延され、逡巡として進まず、慢然時機を失し、卒に功を見

なかつた。而して公理は武力に屈し、勝算は遂に金錢に敗れた。信用は外人に繋げず、國法は袁を凌ぐことを得ず、袁氏は人を欺くの語を借りて二千五百萬磅の外債を獲得し、之を善後の政費に用ゐず、軍器の購入、軍費の充當、議員の買収、奸物の行賞に亂用し以て南方を蹂躪し民黨を屠殺し、總統攫取の資とした。當時能く中山先生の言を信じ即時獨立を敢行したらんには勝敗の數、尙ほ知るべからざるものがあつたであらう。蓋し當時聯合軍は十萬、地は數省を擁し、李純未だ江西に至らず、段芝貴の南下を聞かず、我れ銳師を率ゐ、曉天の勇氣を鼓し以て國賊を征討せば天下の爭衝も難争でなかつたであらう。惜むらくは廣東、湖南諸省の借款成立の當初、獨立するなく、また李烈鈞、柏文蔚諸公の都督取消の際に難を發するなく、外人の助袁、都督の更迭、北兵四布の時に及んで始めて起つて之を討つ。蓋しまた晚し矣。中山先生に負けたること其五である。中山先生の識見は事に遇へば燭光の隈なく照すが如く洞穴に光を觀るが如きである。而して余かの時昧然と之に反對し、足下の主張政見に賛成しただ及ばざるを恐れた。さりとて余の感情は此の間に於て分け隔てをつけたるに非ず亦以て識の人に優らず、智の物を慮るに闇く「孫氏は理想」の一語に溺してゐた。蓋し中山先生の提議せる所はみな事實に遠きを免れない故に懷疑を抱き自ら足下と近づいた。豈に尺寸を拘守して尋文を失し

誤ちを國事に貽す之に由らざるはなしといふものか。さりながら過去の不明は將來の師である。前車既に覆る、車輪を代へて補救するも時猶ほ晚からず、機尙ほ失せるに非ず、余の所見は斯の如しである。未だ意を悉く盡し得ないが足下は以て如何となすや。今後竊かに願ふ所は足下と共に之を勉めんのみ。夫れ人の才識は時と共に並進する、昨の非を知り而して今未だ必らずしも是とせざるも能く其の善を取り斯の人に從ふを厭としない。卑見を以てすれば理想は事實の母である。中山先生の革命を提唱する二十年前に始まる、當時之に反對することに於て全國の人士は殆んど一致してゐた。二十年を経て卒に諸々の實現を見たのは理想の賜である。吾人は二十年前に其説に賛成した。見られよ、理想の懸るところ遅ること二十年の久しきを。かくて始めて效を收め得た。抑も吾人が二十年後の今日に於て猶ほも之に反對せば中山先生の理想は何時の日に於て實現を得るや、或は終に成果を見ることなく埋れて了ふかも料り難たい。故に中山先生の理想の能く實現するか否かは全く吾人が能く之を了解し賛同するか否かに在る。以て遵奉して悖らざれば幸ひである「既往を觀察して將來を驗せよ」これ中山先生の言である「東に於て失ひしを西に於て收む」これ即ち余等の言である。足下は明敏にして余に優る萬々、當に茲に及んで何ぞ余の喋々を待たう。しかも余が言を收めないのは中山先生の意

に謂ふ「革命事業は旦夕を期す可きも待つに五年の星霜を以てする事は必らずしも遠いとは謂ひ得ない。さあれ民困蘇らず、匪亂靖まらずして軍隊の驕横、執政の荒淫等は皆こゝに原因してゐる。亂國を以て足るに兼ねて此の事がある。如何でか有終の美を得やう。陰、極まれば陽を招き、悲運極まれば泰かたるを得、循環の理は毫髪の隙もない。機に乗じて起ち、積極進出せば亂をうち正道に返へすは掌を運ぶが如し」とあるからである。余暗愚と雖も之に微力を盡すことを願ふ。庶ふところは中山先生の理想の實現實行をして滿清倒壞のそれの如く二十年後を待つに至らしめざることである。想ふに中華革命黨の組織も亦時勢の必迫によるものである。願るに斯黨の成立以來、舊日の同志間に誹謗頗る滋く、改變の事のみ多くして人を中傷し之を斥くることのみを計るは同盟會當時の祕密時代を忘却したものである。辛亥以後一變して國民黨となつて形式上では黨の範圍は日に擴大し勢力の膨脹を見たが、精神上では面目全非、分子複雑、黨齋器を同ふし、良莠齊からず、腐敗せる官僚分子は朝に秦に走り、夕に楚につく。齷齪たる敗類は更に雨を覆し雲を翻さんとし、言は發して庭に盈つるも誰か其の咎を執る。才を操りて同室するも人をとがむるに由ない。此故に敗群を免れんと欲するならば流毒者を去らすべきである。事の更張を欲すれば必ず弦を改むる事を要する。二三同志の亦以て中山

先生の滲澹たる經營と機關改組の苦衷を諒とするものあるや否や。其の定むる所の誓約には「先生に追隨し命令に服従」云々の言がある。これ中山先生が前回失敗の原因の多くが、少數無識黨人の平等自由の眞意誤解に由るに深く鑒みる所があつたからである。蓋し辛亥光復以後、國民が未だ平等自由の幸福を享有せぬに先ちて其上に臨む個人間に規を越した行爲が行はれ、權利は之を叫び争ひ、義務は全く顧みやうとしなかつた。更に彼我相ひ統攝するなく如何でか完全なる功を收め得やう。上下の心かく違背しては精神の一貫を達通するは更に難い、所謂「既に令する能すんば又命を受けず」である。是か否か。故に中山先生は茲に於て同志を相卒ひて正しき規道に納めんことを欲し、以て事權の統一を庶ひ、同志の官途に就くを強制し、自由行動を封じたに外ならない。余思へらく、今後革命の目的を達せんと欲せば中山先生の主張を重視し、衆星の北辰に繋かりて亂れざるが如く、江漢を東海の宗として流派の紛糾を惹起せしめず、目的に向つて赴かしめ、而して力を分散せしめず、指示者ありて方向を示したらんには船はその目的とする港に到達するであらう、と。然らずや？、苟も黨員にして吾人の如く昔日中山先生に反對せる者が、將來に於ても反對を繰返すならば中山先生の政見は再び些少な原因のために大きな誤りを招くであらう。故に誓約を遵守し、命令に服従することは當然の

天職と余は認め疑義するところ絶無である。足下、同志として降心相従ふことを許すや否や。竊に惟ふに余、足下と共に大局安危の責を負ふ、實に患難の交を結ぶ多年、意見或は些か差異あるも宗旨の一貫を務めて求む。憾むらくは地を隔て、情意の十分を盡し得ず、傳聞する所と詞の異なる點もなしとしない。殊に緩進急行の舉措に誤解も多からん。されば疑義を除くために座を共にして語りたく、足下の重來を望むこと望歳の如し。迢々たる湖の濶く、人を懐ひて思ひ長く、嚶々たる鳴鳥の友を求むる聲の切なる。足下、日を約して駕を命じて歸來し難鉅に肩を並べられんことを祈る。歳寒の松柏は老ひて彌々堅し。中空の雲霞に情の纏ひて獨り苦しみ、陰霧四方を塞ぐのとき携手同仇を相期し、滄海の横流に直面して和衷共濟を頼む。嗚呼、長蛇封豕の列強は方に薦食の謀を逞ふし、社鼠城狐の内賊は愈々穿城の技を肆にす。風飄々と屋を揺がし、緞帳未雨の恩を忘れず。同舟して音頭を取り、揖をとつて激浪を撃たんか。望風懷想依々盡さず、微意を掬まれて偏に指示を求む。寒氣尙ほ重し、國家のため養生あらんことを。言、意を盡さず。陳其美頓首

(これ按するに民國四年春の書翰ならん)

第七節 知らざるも亦能く行ふ

或は謂ふであらう「まことに先生の謂はるる如く今日の文明は已に科學時代に進み、凡ての事業作興は必ず先づ知るを求めて後に實行に従事するものである。されば中國の富強事業も之を圖るには先づ教育の普及から従事し全國の人民に悉く科學の知識を與へねば不可であらう。先生の創見に接するに「之を行ふは難きに非ず之を知るは難し」となす。古人も亦「十年の樹木・百年の樹人」と言つてゐる。則ち教育の普及は、これにかすに數十年の時間を以てせねば功を見ることは不能であらう。然るを先生の所論に據れば「一躍よく中國を富強隆盛の地位に達せしむる」とある。其道は何に由らるるか」と余は答へて謂ふ。

君は「之を知りて後に能く行ふ」の一面の理を知りて「知らざるも亦能く行ふ」の他の反面の理を知らない。科學のまだ發達を見なかつた時代は全然「之を知らずして之を行へるの時代」に屬する。則ち之を行ふて猶ほ知らざるものである。故に萬事を天數運氣に委した。而して人力を以て敢て之を轉移せんとしなかつたのである。人類の漸やく覺醒するに及び始めて「行ひありて後に知る」の域に達した。茲に於て甫めて人事を盡すことを欲するやうになつた。が、しかし依

然として天命に聽かねばならなかつたのである。今や時代は科學昌明の時代となつた。かくて始めて人事は天に勝るものであることを知つた。所謂天數運氣とは凡てみな心理の作用であつた。さりながら科學は發達進歩し、世の中の事は之によつて明確に解決されるやうになつたと言へ人類の事は仍ほ悉く「之を先に知りて之を後に行ふ」といふ譯にはゆかないのである。其の「知らずして之を行ふ」ことは仍ほ「知りて後に行ふ」ことに較べて遙かに多い。且つ人類の進歩は孰れも「知らずして行ふ」ことを以て出發點としてゐる。これ自然の理則である。而して科學の發見・發達も此の理則を更改するまでにはまだ進んでゐないのである。故に人類の進化は「知らずして行ふ」ことを以て必然の經路となすのである。練習・試験・探索・冒險の四行爲は乃ち文明の動機をなすものである。學生・徒弟の習練は即ち行ふて其知らざる所へと到達せしむるにある。探索家の探索は即ち行ふて其知らざる所を以て其發見・發明を求むるにある。偉人・傑士の冒險は即ち行ふて其知らざる所を以て其功業を建てるにある。由比觀之、行ふて其知らざる所こそ實に人類の文明を促進し、國家の富強を企圖せしめ、而して其目的に到達せしむるものなのである。此故に「知らずして行ふ」は人類のみな能くする所のみならず亦人類の必然的所作である。

而して人類の生存發達を欲する上に最も必要とする所なのである。故に國家の富強に志を抱く者は一意、黽勉力行すべきである。

古來、一躍隆盛を來した民族は其數限りない。近世の世界史を飾つてゐる歐米列強の多くも亦然りで、強盛の地歩を占めた後に始めて國民の教育に従事したのである。中國の現在の地位と現有の智識を以てすれば、一躍隆盛を招致し、歐米列強と比肩せしむることに十分の可能性を認められる。其の能はざるの所以は畢竟「不知不行」の點に在る。而して從來の積弱退化の恰も江流の日に下るかの觀を呈したる所以は實に政府官吏の腐敗、それに因る倒行逆施・極惡非道の振舞ひに由來されてゐる。最も憎むべき手輩は一つに私腹を肥すことを企圖しそれを欲する。而して國家を犠牲にして憂ひとしない。また督軍、師長の輩は苛斂誅求を事とし數百萬、數十萬の私財を蓄積してゐる。更にこれに次ぐに種々の弊政が行はれてゐる。それらは一つとして國家の元氣を喪失、剝奪し且つ人民の利益を損傷しないものはない。之を他國の政治——國民の保護、利益増進を以て統治の根本方針とし、學者、軍人を獎勵し、農業を誘導し、工業を激勵し、商業を保護し、かくして其の富強を圖つてゐるに比するならば、吾が國の現状は一つとして之に反しないものはないのである。由此觀之、若し政府の官吏が能く「無爲」にして治め、倒行逆施を排し、

積極的作惡を斥けて國を損ねず民を害することが無かつたならば中國の強盛は必然的に達せられるであらう。即ち發奮企圖といふ如き能動的作用に待たなくもいいのである。今日に於る吾が黨の道は「興利を緩にして弊害を除去する」ことを以て最大の急務とすべきである。若しよく弊害を除去し得たならば自然的推移に托しただけで中國を強盛の地位に達せしむるに十分である。何を以て然りとすか。

國家の貧弱には必ず一定の原因がある。即ち(一)領土の狭少なるがために貧なるものがある。(二)領土の瘠薄なるがために貧なるものがある。(三)國民の少數なるがために弱きものがある。(四)國民の愚昧なるがために弱きものがある。これが國家の場合に於る貧弱の四大原因である。然らば中國はどうか。領土は四百餘萬方米の廣袤を有し、面積の廣大なる點に於て世界の第四位を占め米國の上位にある。物産の豊饒なると寶藏の富裕なる點とは實に世界第一位に在る。人民の數に至つては四億を擁し之また世界第一である。而して人民の聰明にして才智に富めるは自古無匹。五千年の文化を繼承し、世界に未だ其の例を見ない。千餘年前に於て已に世界の雄者であつた。國家貧弱の四大原因は其の一つをも認め得ないのである。然らば何が故に貧弱此處に至つたのであらうか。曰く、官吏の貪汚、政治の腐敗が害を及ぼせるためである。若し此の害を一掃

し得たならば中國の富強はまことに素晴らしいものがあらう。昔、異族專制の時代に於て官吏は君主の手先きとなつて國民の上に高居し、勝手なる惡事を爲し得た。國民はそれを如何ともし難かつたのである。が、今や革命を経たことによつて專制政治は完全に覆り、人民は一國の主となつた。官吏は人民の僕に過ぎない。今日彼等は人民の監督・制裁を受くべき地位に移された。善良なる官吏は吾が人民が之を任用し、極惡劣性なる者は之を淘汰するばかりである。人民はただ害物を除くことを知つてゐればそれで十分である。之が必要とする所は必ずしも普通教育や科學知識の普及を要としない。而して人間は其の身に迫る處の直接の利害に就ては皆能く之を知り能く之を行ふものである。自衛的本能である。國害を一除せば國利は自ら興り、富強の基礎はこゝに確立される。故に中國今日の情況は富強を欲すれば富強たるを得るのである。飛躍的努力の功を待つまでもない。

中國は世界最古の國である。それは數千年の文化を繼承して東方に冠絶せるの國である。歐米との交易がまだ開かれなかつた時代に於ては中國の亞洲に於ける地位は斷然匹敵するものは無く、まゝ外族の入寇に遭遇したが、元清兩朝の如き中國の潛主は中國の儀禮、法典を奉ぜざるを得なかつた。其他四隣の國々は或は入貢して藩と稱し、或は來朝して親善を求め、中國の文化を羨望

せぬ國はなかつた。而して中國を以て主國となした。中國も亦眼中他國無しと謂つた態の尊大なる態度を持続して來た。従つて其習性は自然と孤立性を醸成した。故に従來何か改革を欲するやうな場合には其方法の採擇は自國に據るのみであつたし、其資源、資料も亦悉く自國の自給に待たねばならなかつた。取材借助を他國に仰ぐといふことは全く有り得なかつた。之れ恰も孤人が荒島に處するが如く其需要する所は悉く一人にして満して行かねばならなかつた。自ら耕して食ひ、自ら織りて衣るばかりでなく、自ら炊いて後に始めて食ふことを得、自ら織つて後に始めて衣ることを得たのである。其勞苦繁劇は思ひ半に過ぐるものがあらう。然り此の荒島の孤人の習性も亦自然的に社會の相互的便宜と人類交通の廣益を知らないものである。若し時勢が變移して此の荒島が一朝、世界航路の中樞港となり海の旅客達が踵を接して訪れ、かくて一旅客が此の荒島の孤人の勞苦を憐んで彼にかう勸告したと假定する、「君よ、君は生活上の事を悉く自分で爲すを要しないのだ。自己の得意とする一事業に専念すればそれだけで結構なのだ。爾餘の事は他の人々が君のために働いて呉れるから……」と、しかし此の島男は此の親切な勸告をきつと信じないであらう。而して「自己の才力と所作とによつても爲し得ざる事は絶対に不可能な事だ」と思ふであらう。彼の多年の習性が彼をしてかく思はしめるのである。之は恰も今日の中國人が中國

の富強は坐してゐても達し得られるものであることを信じないのと同様である。蓋し中國の孤立自大の由來は已に久しい。而して今日まで未だ國際互助の利益といふことを知らない。故に人の長所を採り自己の短所を補ふことが出來ない。中國の未知の事柄や不可能の事柄は之を可能ならしめる術がないと堅く誤信してゐる。さあれ鎖國自守が局外の力に打破される所となつて已に六七十年。而して思想は猶ほ之れ鎖國時代の思想そのものである。故に猶ほ外國資本を流用し、外人の才能を利用して以て中國の富源を圖ることをなさない。今日の世界に立國した人として社會に處してゆくには相互の資を流用し合ひ、互助の力によつて始めて立ちゆくものである。中國の國家状態はどうかといふに、廣大の土地、無量の富源、衆多の人力を擁してゐる。之れ一家豪翁が廣大な田園と倉に盈るの財寶と澤山の子孫をもちながら家治を善くせぬために田園は荒蕪に任し財寶は死藏されて用ひられず、子孫は毎日遊蕩を事とし而して一家を擧げて飢寒に迫まられ朝に夕を保ち難い窮狀にあるのと異なる所がない、これ實に今日の中國の姿其のものである。嗚呼。これ誰の罪か、何人がここに到らしめたのであるか。吾が國人は果して知るや、天下の興亡は匹夫もその責有るを、されば人々よ自奮せよ。

中國の人を以て中國の地に處せしむ。しかも今日の時勢に際會し中國を富源の域に到達せしめ

んと欲する。其道は固より多い。余は今ここに其の一つを述べやう。

今回の世界大戦に於て各國が新設した諸般の工場を利用し吾が富源開發の利益となす。これが今から述べる内容である。

今指摘した新設の各工場は孰れも戰需品供給の目的から増設された工場で大戦の已に終熄した今日これらの工場は廢物にならうとしてゐる。同時にこれらの工場に雇用されてゐた數百千萬の勞働者も亦失業に瀕しやうとしてゐる。更にこれらの工場に投じてある數十億元の資本はこれを回收決濟する途がない状態にある。これが現在、世界大戦後に於る歐米の社會全體を通じての大煩悶の材料となつてゐる最大問題である。しかも彼等歐米各國の政治家は今日に到るも其解決の方法を發見出來ずにある。若し吾が中國人が能くこの機會を利用し、廢物化せんとするこれらの諸工場を借受け吾が無窮の富源開發に導くの舉に出でたならば各國も必ず雀喜して此の要求に應ずるであらう。これ所謂「天與の機」である。語に曰く「天與の機を取らずんば必ずや其禍を受けん」と。若し吾々が此の好機を失し、何等企圖する所がなかつたならば、三五年の後、歐米の産業界は悉く原狀に復し、其の發達は既往に十倍し、より進撃的な經濟戦の出演を見ることになるであらう。其の必然的結果として吾人に豫測される所は何であるか。則ち吾が中國の幼稚な

る手工業は彼等の新式機械・大規模の組織により工業に對し競争を不可能とされるであらう。斯様な慘憺極る吾が産業の失敗はこれを十年以内の時期に於て見ることを得やう。而して今にして之を圖らば數年の間に吾が機械工業も亦發達を招來し此の禍から免がれ得る。これまことに實業救國の道である。國人之に注意されよ。

今日の米國は吾人の知る處に於ては世界の最大富強國である、然り其富強に到達した所以は實業の發達にある。その實業發達の當初に於ては資本は悉く之を歐洲に仰いだ。人才も亦多く歐洲から聘した。而して勞働者は中國からも招いた。其出發は多く冒險的試みに發足した。従つて計畫・經營は總じて控目に企圖された。往時の歐洲各國の産業はさまで重要な地歩に達してゐなかつたし従つて競争上の壓迫脅威を受ける程度は極めて少なかつた。而して彼の蹶起は恰も吾等の今日のその如き好機に於てであつた。而も其富源は吾が國の豊富なるに及ばなかつた。然るに其實業的發達は今や已に世界の王座を占むるに至つた。

試に鋼鐵、石炭、石油の產出量を以て其實況を見よ。米國の千九百十六年度に於ける鐵產出額は四千萬噸、鋼鐵は四千三百四十八萬噸で吾が中國毎年の鋼鐵產出量は僅か二十萬噸に過ぎない。之を米國に比較すると四百分の一にしか當らない。米國同年度の石炭產出額は五億八千七百

四十七萬噸で九千八百萬馬力に等しい。石油產出量は二億九千二百三十萬樽で千九百七十五萬馬力に等しい。天然瓦斯の產出量は約三百萬馬力、水力發電量は約六百萬馬力を計示してゐる。鋼鐵は産業の主體で石炭・石油・瓦斯・電氣は産業の活動素である。米國の自然力消費量は總計約一億六千六百七十五萬馬力である。今一馬力を八人力と見ると十三億餘の人力を以て生産を幫助してゐる勘定となる。米國の人口は約一億となるから人力工作を除外しても猶ほ一人につき十三人分の機械力がその生活を支持してゐる譯である。しかもこの十三人分の機械力は晝夜兼行即ち二十四時間の連續作業であつて人間の如く休養の時間を必要としない。人間一日の作業時間は大體八時間と定つてゐる。そこで機械力は毎日三人倍分の能率をあげてゐる勘定となる。換言すれば一機械力は勞働者三人に異らないで、上記の十三人分の機械力は實は勞働者三十九人に等しい。大學に曰く「之を生ずる者は衆く、之を食む者は寡く、之を爲す者は疾く、之を用る者は舒なれば則ち財恒に足る矣」と。これ米國の富める所以である。

吾が中國の人口は四億、老幼を除いて勞働に従事し得る者は二億人に過ぎない。しかも工業が發達してゐないために勞働可能者でも爲すべき仕事がなく手を拱ぬき閑を好んで他人に寄食してゐる者が其半數位はあらうから實際の從業者は一億人位に過ぎぬ。且つこの一億人の全部が生産

事業に従つてゐるのではなく、その半數は不生産的事業に従事してゐやうから眞に生産事業に従事してゐる者の實數は五千萬人に過ぎない。由此觀之、中國は消費者八人に對し生産者一人の割合を示してゐる。この國の貧なる所以は恰も韓愈の次ぎの言葉通りである。

「農の家は一にして粟を食むの家は六、工の家は一にして器を用ふるの家は六、商賈の家は一にして焉を資る家は六、奈何にして民窮して且つ盜まざらんや」と。

之を米國の人口一億、生産從業者五千萬と概算し、各人が更に三十九人分の機械力を使驅してゐるのであるから即ち三十九人分半の生産能率を以て一人の供給に當つてゐるの實況に較べたなら諸君は如何なる感情に打たるや。これ米國が其貧を患とせず反つて生産の過剰を憂としてゐる所以である。而してこの供給の過剰は岌々として海外市場の發見獲得を求め、それは恰も大洋の潮流の極りないのと同じやうな凄じい勢となつて現はれつつある。これ貧弱富強の由て分るる所であり、また經濟戰の勝敗の由て決せられる所である。

然らば今日迅速の手段を以て中國の財源を開發し貧弱より救はんことを欲求するとしてさて其道は如何にすべきであらうか。中國それ自身の能力のみを標準として言へば其法なく、殊に迅速的方法などあらう筈がない。若し中國の實業を十年の間に米國の現在の程度に發達せしめんと

してもそれは中國人の知り能はぬことであり、不可能な事であつて全く夢想だに及ばぬ所である。之は丁度荒島の孤人が自己一人の力を以てその荒島の發展を望むやうなものである。かの荒島の園を悉く闢き、道路を悉く修築し、港灣を擴張し、市場を繁榮にし、樓宇を林立し、公園を宏大に、居宅を壯麗に、生活を安逸にせしめたならばその壽命をして萬年に延ばすものであるが、彼はこれらの事業を完成するの術も知識も有してゐない。で、若し荒島の孤人がその巖穴に埋藏してゐる澤山の金塊寶珠を提供することを承諾して訪客に謀つたならば、其荒島は發展し、繁榮華麗なる島の都と成り、而も金塊寶珠に對しては價格相應の報酬を支拂ふものがきつとあるのである。かくして得た資金をもつて經營し、計畫し、人才を招聘し、諸種の資料を網羅したならば、年を期せずして諸般の事業は完成するであらう。即ち荒島の孤人は心の欲するがままに坐して其成功を享けることが出来る。中國が其商工業を發展せんと欲するならば其道も亦これと同様である。故に問題は、能く知るとか、知り能はぬとか、又は能く行ふとか、行ひ能はぬとか言ふ點にあるのではなく、直ちにそれを「欲するか、欲せざるか」にある。中國の地位と中國の富源とを以て、今日の時機に處するに若し國人が能く舉國一致して外資を歡迎し、外國の人材歡迎し、吾が生産事業の發展を圖つたならば十年内に吾が實業の發達は必ずや能く歐米と比肩するに

至るであらう。若しこの言を信ぜぬなら請ふ米國の産業發達が如何に速かであつたかを見よ。然らば自ら首肯する所があるであらう。

十年前米國の議會は「パナマ」運河の繼續開鑿を決議し、最初二十ヶ年の豫定で竣成すべく工事に着手した。然るに愈々工事を進め出すと八ヶ年目に完全なる竣成を告げた。この事實は何を語るか、即ち數年前に知り得た作業能力よりも二倍半に相當する能力増進がその數年間に齎されたのである。更に米國の對獨宣戰後に於る戰時工業の進歩は人をして不可思議とさへ思はしめずにはおかない。往時數十年間を要せねば成就することの不可能であつた大作業も今日では僅か一年で之を成就し得るのである。造船事業の如きは昔、一二年間の時日を費して漸く一艘を建造し得たのだが今では二十餘日の日子で可能である。若し戰時の大規模・大組織の作業能率を以て「パナマ」運河の開鑿に應用したならば一ヶ月間にしてよく開鑿の成功を遂げることも容易であらう。これ非常なる作業上の能率増進と謂はねばならない。若し吾が國人が能く互助の利、交換の利益を悟り、人の長所を用ひて吾が短所を補ふの資としたならば數年の間に中國の産業は今日の米國の地位に到達することが出来やう。中國の産業的發展は其利益の及ぼす所、固より中國一國の利益にとどまらない。世界も亦必ず其利益に均霑する。故に世界の經濟専門家に於て中國

の發展、活躍を歡ばぬ者はなく、かの海の旅客が荒島の孤人の活動を欲すると同様である。余は最近各國政府に『國際共同中國實業發展計畫書』を致したが已に米國の大なる賛同表示を得た。想ふに其餘の各國も必ず米國に追隨するものと信ずる、果して然らば、残されたる問題は中國人民の之を欲するか否かにあるのみ。若し之が興國の要圖にして救亡の急務たるを知るならば能く萬衆一心、舉國一致し而して列國の雄厚なる資本、博大なる規模、宿學の人才、精練の技師を觀迎し之を吾が計畫に移し、吾が組織に移し、吾が經營に移し、吾が訓練に移し斯の如くして十年を期せずして吾が國の大事業は必ず國內に林立し、實業方面の人才も亦同時に竝起を見るであらう。かくて十年後には外資は陸續返償し人才は續々就業し、吾が獨立經營の實現を見ることも期して待つのみである。若し吾が教育の普及、智識の完備を待ち而して後に始めて行ふとせば清河の日無く、必ずや好機を失する。そはまことに惜むべきである。故に根本的治療と改善を先決問題として窮狀を救濟することを急務とすべきである。衣食足りて禮節を知り、食廩實ちて榮辱を知る。誠に實業の發展、民生暢達の時に至つて教育の普及に着手して可なりである。今は宜しく歐洲大戰終告の機に乗じその戰時工業の大規模を利用し以て吾が中國の實業の發展を計つたならば、まことに掌を反すが如く容易にその目的を達し得るであらう。故に曰ふ知らざるも亦能く行ふと。

第八節 志有れば竟に成る（孫文自傳）

凡そ事には天理に順じ、人情に應じ、世界の潮流に適し、民衆の需要に合するものがあるが、先知先覺が志を決して之を行へば斷じて成らずと言ふことは無いものであつて、古今の革命維新興邦建國等の事業は皆斯の如きものである。余が中國に共和革命を提唱するや幸に既に破壊の功を達し、建設事業は未だ其の緒に就かざるも希望日に佳なるあり、究極に於て必ず完全に目的を達成し得べきを敢て信ずるが故に、茲に革命の起源に遡つて追述し、來者を勵まし又以て自ら勉めんとするものである。惟ふに民國建元以來各國文人學士の中國革命に關する著作は千數百種を下らざるも、類として多くは途上傳聞する所と大差なく、能く革命の事實を知ること鮮く、革命の起源に遡つて記述せるものに至つては更に少く、然も之等は概ね余の「倫敦被難記」第一章の「革命の事由」を根底として書かれたものである。然るに該章に述ぶる所は甚だ簡略であり、且は二十餘年前革命の成否も定かならざりし時代のことであつて、當時英京に在りしとは言へ尙ほ事毎に忌諱する所多く、爲に余が興中會の創立者であり、其の本旨が清朝の傾覆にありしことは敢て表示しなかつたのである。故に今之等の點を修正補足し、余の三十年來の記憶に據り茲に改め

て本篇に事實を記載することにする。

志を立ててより同盟會成立に至る迄は殆ど余一人の革命であつて事甚だ簡單である爲、賛同援助の勞を惜まなかつた要人は一々遺す所無く之を録し得るが、同盟會成立後は事態日に繁く、附和する者日に多數となりし爲、熱心なる海外の華僑、忠烈なる國內の志士等の各重要人物も一々本篇に輯録し得ず、之等は革命黨史編纂の時を俟つて悉く補録する考へである。

余は乙酉對佛戰失敗の年（一八八四年）初めて清廷傾覆、民國創建の志を決し、之より學校を以て革命鼓吹の場所とし、醫術を藉りて人世の媒介とし、十年一日の如くであつたが初め廣州の博濟醫學校（註、The Medical School of Canton）に在學せし頃、同學中に鄭士良なる人物あり。號を弼臣と言ひ、人と爲り豪俠にして義を尙び、交遊頗る廣く、江湖の士と結んで、嶄然頭角を現はしてゐたが、余は一見して之を奇とし、稍々之と相識るに及んで共に革命のことを談じたるに、士良は一度余の説を聞いて悦服し彼が會黨（註、三）に投じ居るを以て他日若し事有らば會黨を動かして余の指揮に従はしむべきを告げた。

廣州に在ること一年、香港に英文醫學校（註、The Hongkong Medical School）開設さると聞き其の内容比較的優秀にて環境の自由に恵まれ革命の鼓吹可能なるべきを思ひ、轉じて同校に入り、

（註、一八八七年十月、孫文二十二歳）業を學ぶこと數年、其間學課の餘暇には常に革命の鼓吹に力を致し、香港澳門の間を往來して憚る所なく宣傳に従事したが、之が結果として來り和する者は香港の陳少白、尤少執、楊鶴齡、上海の陸皓東の四人に過ぎず、其他の交遊は余の言を聞いて或は大逆不道となし或は狂人となしたに過ぎなかつた。余と陳、尤、楊の三人とは常に香港に住んで朝夕來往し、談ずるものは悉く革命、抱懐する所は總て革命思想、研究は皆革命問題のみであつた。斯くて四人相依ること甚だ親密、數年一日の如く革命を談じて歡と爲し、爲に同地の親戚友人は皆余等を四大冠と呼ぶに至つた。之れ余の革命言論時代である。

卒業後余は澳門、羊城の兩地に醫を開業して事實上の革命運動を開始し、鄭士良は會黨と結んで防營との聯絡をとり、基礎略々定まつた後余と陸皓東とは北方京津の地に遊んで清廷の虚實を窺ひ、更に深く武漢に入つて長江の形勢を觀察し、其後甲午の役（日清戦争）起るや好機乘すべしとなし、布哇と米國とに渡つて興中會を創立し、海外の華僑を糾合せんとしたが、人心硬塞して風氣未だ開かず、布哇に在つて革命を鼓吹すること數ヶ月、而も應ずる者寥寥、僅に鄧蔭南と同德彰の二人が家財を傾けて援助せんことを願ひ出た外、親友數十人の賛同を得たに過ぎなかつた。時に清兵屢々敗れ既に朝鮮を失ひ旅順威海衛次いで陥落し、京津亦岌々として危く、清廷の

腐敗は悉く曝露され、人心は頗る激昂してゐたのであるが、此時上海の同志宋躍如から來函あり、余の歸國を促し來つた爲遂に渡米を中止し、鄧蔭南等數名の同志と共に歸國して革命の進行を策し、廣州を襲つて之に據らんとし、先づ香港に乾亨行なる小店舗を開いて本部とし、羊城に農學會を設けて運動機關とした。當時本部の事務を執つた者は鄧蔭南、楊衢雲、黃詠商、陳少白等であり、機關の活動を助けた者は陸皓東、鄭士良及歐米の技師、將校等數名であつた。余は常に廣州香港の間を往復し慘憺として經營に當り半載を過ぎて既に計畫準備共に整ひ、同志の數も多數に上り、一撃よく絶大なる影響を與へ得べく思はれたが、不幸運送中の拳銃六百挺を海關に發見され、事露はれて黨の健將陸皓東は竟に之に殉じて斃れた、之れ中國有史以來第一の共和革命の犠牲者である。此の外連累者として死んだ者に丘四、朱貴金の二人があり。捕へられし者計七十餘人、廣東水師統帶程圭光も其の一人であつて彼は後竟に獄中で病死し、其の餘の者は或は投獄され或は保釋された。之れ乙未九月九日（一八九五年）の出來事であつて予の革命の第一回の失敗である。

敗後三日余は尙ほ廣州城内に在つたが、十餘日の後險を脱して間道より香港に至り、次で鄭士良、陳少白と共に日本に渡り不取敢横濱に住むことになつた。然るに何時歸國し得べしとも見え

なかつたので、余は頭髮を斷り装ひを改めて重ねて布哇に遊ぶことに決し、士良は歸國して餘衆を收拾し一切の手配を繞らして捲土重來を謀り、少白は獨り日本に留つて東邦の國情を考察することとし、余は彼を嘗て布哇にて知合ひ現在日本に居住する余の友人菅原傳に紹介した。後少白は彼から曾根俊虎を紹介され、曾根を通じて宮崎寅藏の兄宮崎彌藏を識るに至つた。之れ革命黨と日本人士と相交るに至つた始めである。

余は布哇到着後再び同志を糾合して興中會を擴張せんとしたが、舊同志の中の或者は失敗の爲既に望を絶ち、又或者は新に道を聞いて義に赴き、概して人心閉塞し、進行遲滯し、久しく布哇に留るも些したる效果無しと思はれたる爲、布哇に較べて遙に多數の華僑を有する米國に渡り彼等華僑と聯絡をとることに決し、出發數日前の或日、郊外散歩中前方より車を驅つて來る者に遭つたところ、其れが意外にも余の師康德黎氏 (J. Cantle) と同夫人であつたので、余は一躍して車に登つたが彼等は訝しげなる様子で余を暴漢とでも思つたらしかつた。之れ余が服裝を改めてゐた爲氣付かなかつたものであらう。依て孫逸仙なることを告げたる後互に笑つて握手し、何故に此地に來りたるかを問ひたるに、彼は歸國の途次此地に寄航し下船して觀光してゐる旨を答へた。次で余が案内役となり同車して回遊し、終つて彼等が乗船する際余は今世界一周を志し不日

渡米し、次で英國に渡る考であるから遂からず相見ることが出来るであらうと告げ歡んで握別した。

其後余は渡米したが在米華僑の風氣の蔽塞せることは布哇よりも一層甚しく、東岸の「サンフランシスコ」より上陸し、「アメリカ」大陸を横断して西海岸の「ニューヨーク」に行く途中、沿線の各都市に數日或は十數日滞在し、各地に於て祖國の危急と清朝政治の腐敗とを説き、民族主義による根本改革の外急を救ふ方法なく、改革の責任は各人にある所以を以て諄々として説いたが、聽く者は終に藐々として感銘なく、革命主義を歓迎したものは各地とも僅に數人或は十餘人に過ぎなかつた。米國各地の華僑は當時多く洪門會館なるものを設立してゐたが、此の會は康熙の初め明朝の遺老によつて創立されたものであつて、康熙以前に於ては明朝の忠臣烈士は猶多く明廷の恢復を力圖し、清朝の臣とならざることを誓ひ、生を捨てて義に赴き、屢々蹶起して決死的努力を續け而も終に明朝の滅亡を救ひ得なかつたのである。然るに康熙の世となつては清の勢力既に盛となり、明朝忠烈の士も殆ど死亡し盡し、二三の遺老も大勢既に去り挽回す可らざるを見て、民族主義の萌芽を培ひ之を後世に傳へんとし、之が爲に反清復明の主旨に基く團體を結び、後世志ある者の資助たらしめんとしたものである。之が洪門會創立の本旨であるが、其事た

るや當然の歸結として秘密に附せられ、政府に發覺することを妨ぐと同時に、政府の爪牙たる官吏 官吏の耳目たる士紳等、所謂大夫の類を忌避し、全く之と關係を絶つてゐた爲に、よく其の命脈を保ち得て異族の專制政府の下に闇に成長し來り、群衆の心理に合して民族國家の思想を傳へ得たものである。故に洪門の集會には概ね劇を演じ、其の群衆の心を動し易きを利用して所期の思想を傳布し、不平の心を導いて復仇の事を思はしめ、斯くて人の感情を激發せしむるに努め、臺詞に於ても此の主旨を言外に暗示し、又鄙俚粗俗の言辭を用ひて品格を重んずる士大夫の嗜好に適せしめず、彼等を遠ざくることに努めたものである。而も彼等の團結は頗る固く、相互に博愛を施し、艱難あれば互に相扶けし爲最もよく江湖の旅客、家無き遊子の需むる所に合し、隨つて民族主義を傳布し反清復明の目的を達し得たものである。而して國內の會黨は常に官吏と衝突し乍ら猶清朝と反對の位地にあることを忘れず、反清復明なる標語の意義を解するものも多かつたが、海外の會黨は多く他國の自由政府の下に在つた爲、會員の需むる所よりして其の目的も單に相互扶助の範圍を脱せざるものとなり、全く政治的意味を失ひ、反清復明の標語の如きは其の意味を知らない者が多く、余が米國に在つて革命を鼓吹せる時も、洪門會の人は初め全く余の主旨を解せず、反清復明の何たるかを問ふたが多くは答へ得なかつた位であつて、其後在米の革命

同志が數年間鼓吹したる結果、彼等は初めて洪門會がもと民族革命を目的とするものなりしことを知り得たのである。余の在米當時は斯の如く、革命の初期播種時代と言ふべき時であつて、革命の前途に大なる影響を與へ得べき何も無く、そののみか却つて之が爲に清廷の忌む所となり、倫敦に到るや直に大使館の陥策に遭ひ、不測の難に逢着するに至つた。幸に余の師康徳黎カントウレイの盡力によつて難より救はれ漸く危険を脱することが出来た。布哇に於ける邂逅は眞に天祐と言ふべきものであつて、此事がなかつたならば余は彼等の歸國を知らず、彼も亦余の倫敦に來つたことを知らなかつたであらう。

倫敦に於いて危険を脱したる後暫く歐洲に留つて政治風俗を視察し、朝野の賢豪と交はり、斯くすること二年、見聞に據つて教へらるる所頗る多く、初めて國家の富強は民權の發達によるべきものであり、歐洲列強の如きも未だ斯民の樂土を現前し得ずして猶志士の社會運動が存在することを知つた。茲に於て余は一勞永逸の計をなさんとし、民生主義に準據して民族、民權の兩問題をも同時に解決せんとした。之が余の主張たる三民主義の由つて完成された所以である。

時に歐洲には猶留學生なく、又華僑も少く、革命鼓吹に其の道無きにより、革命を唯一の天職とする余は久しく歐洲に留つて革命の時日を曠廢することを欲せず、遂に日本に赴いた。其地が

中國に近く消息を通じ易いからである。日本に到るや民黨領袖犬養毅は宮崎寅藏、平山周二の二人を横濱に遣して余を歓迎せしめ、導かれて東京に至つて會見したが、一見舊知の如く掌を拍つて天下の事を談じ甚だ痛快であつた。時に日本は民黨初めて政權を握り大隈重信外相に任じ、犬養は其の參謀格にてよく之を左右してゐた。後犬養の紹介により大隈、大石、尾崎等とも會つた。之れ余と日本の政界の人物との交際の始めである。次で副島種臣及び在野の志士頭山、平岡、秋山、中野、鈴木等と識るに至つた。各日本の志士は中國の革命事業に對し前後多くの援助を與へたが就中久原、大塚を最とし、革命の爲に奔走して終始懈らざりし者には山田、宮崎の各兄弟及び菊地、萱野等があり、革命の爲に盡力せる者には副島、寺尾兩博士がある。以上は余と直接干係ある者のみに就き略々之を記して備忘となしたに過ぎず、此他にも間接に中國革命黨の爲に奔走し盡力した者が多いが茲に其の全部を一々記することは不可能であり、之が詳述は革命黨史に俟つべきものである。

當時日本には一萬餘人の華僑があつたが、風氣鋼塞し概ね革命と聞いて畏れを生ずること他處の華僑と異なること無き爲、我黨の同人が横濱神戸の間を往復して革命主義を鼓吹したるも、義を慕ふて來り歸する者は數年にして百數十人に過ぎず、當時の日本に於ける華僑の總數に比較し其

の百分の一に及ばなかつた。海外の華僑に革命主義を傳播することの困難なること斯の如く、國內に傳布することの困難なるは推して知るべきである。當時革命排滿の言を聞いて怪と爲さざりしは只だ會黨の黨員のみであつて、然も彼等は皆知識程度低く團結力薄弱にて何等頼むに足らず、共鳴は望み得るも用ひて革命の原動力たらしむることは出来なかつた。乙未初めて敗れてより庚子（一九〇〇年）に至る五年の間は實に革命の進行最も艱難にて困苦を極めた時代であつた。蓋し余既に失敗し國內の根據、個人の事業、活動の餘地並に十餘年來建設した革命の基礎等は悉く潰滅し、海外の運動も何等の効果無く、偶々保皇黨が発生して清廷擁護、共和革命反對を旗幟とした爲、事態益々不利となり、希望殆ど絶えて革命の前途は暗澹たるものであつたが、同志は尙落膽しなかつた、蓋し此時代は又革命の曙光の漸く見え初めた時代であつたのである。則ち余と陳少白とは香港に還り中國報なる新聞を發行して革命を鼓吹し、史堅如に命じて長江に入つて會黨と聯絡せしめ、他方鄭士良に命じて香港に革命機關を設けて會黨を招待せしめた結果、長江、兩廣、福建の各會黨は皆興中會に併合さるるに至つた。次で清廷が排外運動を起し拳黨を藉りて自衛し、外人を殺し公使館を圍みし事件發生し、八國聯合軍による戰禍起るや、好機逸すべからずと爲し、鄭士良に命じて惠州に入り同志を招集して擧兵を謀らしめ、史堅如をして羊城に

入り同志を集めて之に呼應せしめんとし、計畫準備共になり、余は外國軍人數人と道を繞つて香港に至り、香港より内地に潜入し、親ら健兒を率ゐ一つの秩序ある革命軍を組織して危急を救はんと企てたが圖らずも、奸人の密告する所となり、香港に入港するや直ちに香港政府の監視下に置かれ竟に上陸し得ず、之が爲に遂に計畫を實行し得ざるに至つた。依つて惠州に於ける擧兵の事を鄭士良に一任し、楊衢雲、李紀堂、陳少白等をして香港に在つて之が供給救濟のことに當らしめ、余は折れて日本に還つて臺灣に渡り、臺灣より法を設けて潜かに國內に渡らんとした。然るに時の兒玉臺灣總督は中國の革命を熱心に賛助せんとし、北方既に陥りて無政府状態なりしを以て、後藤民政長官をして余と折衝せしめ、許すに擧兵後の援助を以てした。茲に於て余は一面原計畫を擴張充實し、當時吾黨に新知識を有する軍人無かりしを以て、同地に於て將校を聘用し、他面士良をして即日兵を擧げしめ、既定の計畫を變更し、直に省城に逼らず、先づ沿海一帯の地點を占領し、多くの黨衆を集め、余の至るを待つて進んで省城を攻取せしむることとした。士良は命に接して即日内地に入り、親ら既に三洲田に集合せる衆を率い、出でて新安、深圳の清兵を攻撃し、悉く其の武器を奪ひ、次で龍岡、淡水、永湖、梁化、白芒花、三多祝等の處に轉戦し、向ふ所皆捷ち、清兵敢て其の銳鋒に當らず、遂に新安大鵬を占領し、惠州平海一帯の沿海地に至り

余と幹部との至るを待ち、又武器の供給を待った。然るに惠州の義舉より旬日にして圖らずも日本の政府が更迭し、新内閣の總理伊藤氏の中國に對する方針は前内閣と大いに異り、臺灣總督と中國革命黨との折衝を禁じ、武器の輸出と日本軍人の革命投入とを併せ禁じたる爲、余の渡惠せんとした計畫は竟に畫餅に歸するに至つた。依つて余は山田良政と同志數人とを鄭の軍營に遣して一切の事情を報告し臨機應變の處置をとる可く命ぜしめた。山田等の鄭士良の軍營に到着したのは事を起してより、既に三十餘日の後であり、士良は連戦月餘に及びたる爲、彈藥既に盡き、然も集合の衆は一萬餘人に達し、彼等の幹部將校及び武器の到着を渴望することは甚だ切なるものであつたが山田よりの報道に接し、遂に立ろに解散を命じ、原存の數百人のみを率きて間道より香港に出た。途中山田良政は道に迷ひ清兵の爲に擒へられて害せらるるに至つた。惜い哉。之れ外國の義士にして中國共和の犠牲となつた第一の人である。

鄭士良が惠州に於て苦戰中、史堅如は廣州に在つて屢々之に呼應して起たと謀つたが、皆意の如くならざりし爲、遂に意を決し單身爆彈を投じて兩廣總督德壽の公署を爆破し、德を斃さんとしたが不發に終り、史は擒へられて害せらるるに至つた。之れ共和の爲に殉難せる第二の健將である。堅如は聰明にして學を好み、眞摯懇誠、陸皓東と並び稱すべく、其才貌英姿も亦皓東と

並稱すべき者であつて、兩人共に詩を能くし畫を能くし、皓東は沈勇にして堅如は果毅、皆當時の英才であつたが惜むべし事敗れて犠牲となつて了つた。先達の選良を喪ひ、國士の淪亡せること眞に革命の前途の爲に大不幸と言ふべきである。二人の死節の壯烈なりしと其の浩氣英風とは實に後に死する者の模範と爲すに足るものであり、一念及ぶ毎に無窮に仰がるべきものであつて、二公死すとも其の英靈は常に吾人の胸裏に生くるものである。

庚子の役は余の第二回の失敗であるが、此の失敗後中國の人心を回顧すれば前回と異なるものがあるのを覺ゆる。即ち前回の失敗に當つては舉國の輿論が皆余を目して亂臣賊子、大逆不道と爲し、呪咀慢罵の聲は耳に斷へず、吾人の足跡の到る所、凡そ識者と認めらるる者も殆ど余を視ること猛獸毒蛇の如く、敢て吾人と交遊せんとする者がなかつたが、庚子革命の失敗後は一般人の惡聲を聞くこと鮮く、有識の士にて吾人の爲に扼腕歎惜して事の成らざりしを恨む者多く、前後相較ぶれば雲壤の差あり、余等は此の情勢を睹て衷心自ら慰め言狀す可らざる喜びを感じた。斯くて國人の迷夢も漸く醒むるの兆あり、加ふるに八ヶ國の聯合軍は北京を破り、清の後帝は蒙塵し、和議の結果は九億兩の賠償金支拂となつた爲、清朝の威信は地を掃ふて餘り無く、人民の生計は之より日に蹙まり、國勢危急を告げ、岌々として救はる可くも見えず、有志の士は多く救國

の思を起し、革命の風潮は次第に萌芽するに至つた。偶々各省が初めて留學生を日本に派することになつたが、之等赴東求學の士は多くは新智識を有し、志氣亦凡ならず、革命の理想に對しても感受極めて速く、彼等を通して瞬く間に革命思想の高潮を見るに至り、當時の東京留學生界の思想言論は皆革命問題に集中された。劉成禹は留學生の新年會に於て革命排滿の大演説をなし、駐日清公使の爲に放校され、戡元成、沈虬齋、張溥泉等は國民報を發行して革命を鼓吹し、斯くて留學生先づ提唱し、國內學生之に附和し、各省に於ける革命風潮は之に従つて漸く興るに至つた。而して上海には章太炎、吳稚暉、鄒容等あり、蘇報を通して革命を鼓吹し、清廷の危諱にふれて太炎、鄒容等は捕へられて租界の監獄に投ぜられ、吳は歐洲に亡命した。此の事件は清帝個人の事に關し、清廷と人民との間の初めての訴訟事件で、清朝未曾有のことであり、訴訟は清廷の勝となつたが、章、鄒の兩名は僅に入獄二ケ年に過ぎなかつた爲に民氣大に壯となり、鄒容は革命軍なる一書を著して痛烈に排滿を唱へ、華僑は頗る之を歓迎し、此書が華僑を啓發したことは甚大なるものがあつた。之れ則ち革命風潮の初めて盛となつた時代である。

壬寅、癸卯の交（一九〇二年、一九〇三年）安南總督賴美氏は屢々東京駐紮の自國公使に託して余の來訪を囑望し來つたが、余は多事なりし爲に行き得ず、其後河内に博覽會の開催されしを

機會に安南に渡りたる所、總督は既に任を離れて歸國した後であつたが、其の旨秘書長に囑しありし爲、其の招待は頗る懇懇であつた。河内滯在中に余は黃龍生、甄吉亭、甄璧、楊壽、彭會齊等の華商と相識るに至つたが、彼等は後結んで同志となり、欽廉河口等の役に於ては尠からず盡力するところがあつた。

河内博覽會の終りたる後、余は再度世界漫遊の途に上り、道を日本布哇に取つて歐米に赴いたが、途中日本に至るや、廖仲愷夫婦、馬君武、胡毅生、黎仲實等多數の者が來り會して革命に賛成を表したるを以て、余は彼等に日本在住の識者有志學生を以て團體を結び、以て國事に任ぜんことを託した。後同盟會の成立には之が與つて力ありしものである。

惠州の失敗より同盟會成立に至る間に革命の風潮を受けて義舉を起した者には廣東に李紀堂、洪全福があり、湖南は黃克強（黃興）馬福益があり、何れも成就するに至らなかつたが人は多く之を壯とした。海外の華僑も漸次東京留學生界及び國內の革命思潮に影響され、之が爲に余の此度の漫遊は到る處歓迎を受け、往昔に較ぶれば大に異なるものがあつた。次で乙巳（一九〇五年）の春、余は重ねて歐洲に渡つたが、其他の留學生も既に多くは革命に賛成せる者であつて皆新に内地又は日本より來歐し、近く一二年來深く革命思想の陶冶を受け、言論より既に實行の域に達

せる類の者であつた。余は茲に於て平素抱懐せる三民主義、五權憲法を掲げて彼等に號召し、革命團體を組織して第一回の會を白耳義の首府「ブラッセル」に開きたるに加盟者三十餘人あり、次で第二回を伯林に開き加盟者二十餘人、第三回を巴里に開き加盟者十餘人あり、第四回は東京に開いて加盟者數百人に達し、中國十七省の人皆之に與り、只だ甘肅は未だ日本に留學生を派遣して居らなかつた爲之に加らなかつた。之れが革命同盟會成立の始であつて、當時尙ほ革命の二字を口にすることを憚りたる爲、單に同盟會なる名稱を以て呼ばれ、後世も此名を通して著名となつたものである。

革命同盟會成立後に於ける余の希望は、之を以て一新紀元を開かんとするに在つた。蓋し之より以前に於ては身は百難の衝に當り、世を擧げて非笑唾罵する所となり、一敗再敗し尙ほ險を冒して猛進し乍ら、未だ敢て革命排滿の事業が、余の生存中に成就すべしとは思はなかつた。然も百折不撓なりし所以は人心を警醒せしめ、憂國の情を振起し、斯くて余の志を繼いで奮起する者によつて之を成就せしめんとしたのである。然るに乙巳の秋全國の俊英を集合し、東京に於て革命同盟會成立するや、余は初めて革命の大業が余の生涯に成る可きを信するに至つたのである。茲に於て中華民國なる名稱を制定し黨員に公布し、夫々本省に歸らしめて革命主義を鼓吹し、中

華民國の思想を傳布せしめたが、其の結果は豫期以上の成績を收め、一年を出でずして加盟者一萬人を逾え、支部も亦前後して各省に成立し、従つて革命の思潮は一日千丈の勢となり、其の進歩の速かなることは人の意表に出づるものがあり、當時の外國政府も中國の革命黨に對して多くは刮目して之を看るに至つた。一日余が南洋より日本に赴く途次、吳淞に碇泊中の余の乗船に佛國武官布加卑なる者が陸軍大臣の命を奉じて來訪し、自國政府に中國の革命事業を援助する好意あることを傳達し、兼ねて革命の現勢力如何を問ひたるを以て、略々告ぐるに實情を以てせるに、更に各省軍隊の聯絡如何を問ひ既に機熟し居らば佛國政府は直ちに援助するも可なりと語つた。之に對し余は未だ充分の見込立たざるを以て人員を派して援助し、調査聯絡の事に當られんことを請ふ旨を答へて置いたが、其後彼は天津駐紮の參謀部より武官七人を余の爲に派し來つた。依つて余は廖仲愷に命じ、天津に往きて機關を設立せしめ、黎仲實に命じて某武官と共に兩廣を調査せしめ、胡毅生と某武官とは四川雲南の調査をなさしめ、喬宜齋と某武官とを南京武漢に赴かしめた所、南京武昌兩地の新軍は皆大いに之を歓迎した。次で南京では趙伯先が營長以上各官を集めて秘密會議を開いて協議し、武昌にても劉家運が同志の軍人と議して教會に於て日知會を開會せる所、來り會する者甚だ多く、新軍の鎮統張彪も變裝して此の會に潜入した。次

で開會するや各人大いに革命提唱の演説をなし、佛國武官も賛成演説を試みたが、事遂に秘密を保ち得ず、湖廣總督張之洞は某國の海關員をして前記佛國武官を尾行せしめ途上之と接近し中國革命の同情者を装ひしに、前記武官は之を疑はず、爲に秘密の内容を探知せられ、張之洞は遂に此の事を清廷に奏上した。其の報告文中に書かれた革命黨の計畫は眞否相半せるものであつたが清廷は報を得て嚴しく佛蘭西公使に抗議した。佛國公使はもと事情を知らなかつた爲、布加卑等の處分につき本國政府に請訓せるところ不問に附すべき旨を回答し來り、清廷は之が爲に如何とも爲し得なかつたが、幾何もなくして佛蘭西政府交迭し、新内閣は此の舉に賛成せず、遂に布加卑等は歸國を命ぜられ、其後劉家運も此の事件の爲逮捕されて犠牲となつた。之れ革命運動が實際交渉を起した初めてのものである。

同盟會成立後間もなく民報を發刊して三民主義を鼓吹し、之に因つて革命思潮は全國に瀰蔓するに至つたが、之は我國に於ける雜誌新聞始まつて以來會つて無き大成功と言ふべきものであつた。時に義を慕ふの士は皆風を聞いて興起し、獨力一幟を樹立して義を建つる者が踵を接し、其の最も著名なる者には徐錫麟、熊成基、秋瑾（女史）等があり、丙午（一九〇六年）萍醴の役の如きも同盟會會員の自發的義舉であつた。革命軍が萍醴にて清兵と苦戰中、東京に於ける會員も

悉く激昂慷慨して怒髮冠を突き、速に故國に飛び渡り死を決して戰線に立たんことを思ひ、機關部に來つて軍に投ぜんことを請ふ者日々甚だ多數に上り、要求の稍々閑却さるるや多くは痛哭流涕し、死處を求めて得ざることを大なる苦痛とし、其の義憤と雄心とは眞に稱するに足るものがあつた。只だ惜いかな萍郷の舉は會員の自發的行動に出で本部は事前は何等知る所無く、従つて準備も整はなかつたのであるが然も會員の歸國從軍する者は紛々として續いた。次で萍醴の役に敗れ禹之謨、劉道一、寧調元、胡英等は竟に清吏の爲に捕へられ、其他にも獄に投ぜられ又は殺さるる者が多數に上つた。之れ革命同盟會第一回の流血である。而して此後に於て革命風潮が澎湃として全國に漲つたことは前例を見ない程であつて、同盟會本部も東京に在つて久しく沈黙を守り得ないこととなり、他方清廷も大恐慌を起し屢々日本政府に向つて余等を國外に放逐せんことを交渉し來つたので、余は漢民、精衛の二人を伴つて安南に至り、河内に機關部を設けて籌備進行し、次で潮州、黃岡に兵を擧げたが竟に不利に終つた。之れ余の三回目の失敗である。次で又鄧子瑜に命じて惠州に擧兵せしめたが亦不利。之れが余の四回目の失敗である。時に偶々欽廉の兩府に抗捐（註、砂糖稅反對、穀價吊上げ反對）の事起り、清吏が郭人漳、趙伯先の兩人に各々新軍三四千を與へて之を平げしむるや、余は黃克強を郭人漳の營に、胡毅生を趙伯先の營に派遣して彼等を説かし

め、以て革命に賛成せしめんとしたるに兩人皆首肯し、正々堂々と革命の軍を起すことあらば、彼等は必ず戈を反して相應せんことを約した。茲に於て一面人を派して欽廉兩府の紳士郷團と一致の行動をとるべきを約し、他面萱野長知をして資金を携へて日本に歸つて武器を購入せしめ、且つ安南に於て同志を招集し佛國退役軍人多數を聘用し、武器の到着次第防城を占領し、東興一帯の沿海地方に至つて軍隊の組織に便せんとした。東興と佛領の芒街とは僅に一河を隔て橋を渡つて達する事が出来、交通甚だ便利であるから武器到着次第、我黨は二千餘の正式軍隊を組織し得べく、然る後欽州の各郷團六七千人を集め、更に郭人漳、趙伯先兩名所屬の新軍約六千人を併せ斯くて強大なる一つの大軍隊を成し、之に訓練を加へて一層精銳なるものとし、兩廣を掌中に收めて後長江に進出し、南京武昌の新軍を合すれば破竹の勢となるべく、革命は完全なる効果を收め得べしとなしたのであるが、圖らずも東京本部の黨員が忽然紛擾を起し、武器の購買運輸の計畫は之が爲に破壊せらるるに至つた。此の時防城は既に破れてゐたのであるが、武器の來らざる爲余は武器彈藥受取りの同志と郷團の士とに信を失ひ、又防城に攻め人つた同志は武器の來らざるを見て轉じて欽州に逼つて郭軍の來援を求めたが、郭は我軍の薄弱なるを見て敢て來らず、我軍は遂に進んで靈山を圍み、趙軍の來援を求めたが郭の猶來らざるを見て彼も亦敢て來らず、我

軍は力薄くして進み難く遂に退いて十萬大山に入つた。之れ余の第五回の失敗である。

欽廉の計畫が不成功に終りたる後、余は自ら黃克強、胡漢民、佛國將校及び安南の同志百數十名を率ゐ襲ふて鎮南關を取り、三要塞を占領して其の降卒を收め、之より十萬大山の衆を集合し之と會して龍州を攻めんとしたが、十萬大山の衆は圖らずも道遠くして至り得ず、遂に百餘の衆を以て三砲臺に據り、龍濟先、陸榮廷等數千の敵と連戦七晝夜の後、退いて安南に入つた。然るに余が諒山を過ぐるや清國の探偵の察知する所となり、之が清吏に報告したる爲清廷は其後佛國政府と交渉して余を安南より放逐せしめた。之れ余の六回目の失敗である。而して余は河内を離るるに際し黃克強をして再び欽廉に入つて該地の同志を集合せしめ、又黃明堂をして河口を襲ひ進んで雲南を取つて我黨の根據地となす計畫を樹てしめた。後克強は二百餘人を以て安南に出で欽廉上思一帶を横行し轉戦數ヶ月、向ふ所敵なく敵人聞いて畏れを生じ、克強の威名は之が爲に大いに著れたが彈盡き援軍絶えて竟に退出した。之れ余の七回目の失敗である。

余が新架坡に渡つて數ヶ月後、黃明堂は百數十人を率ゐ襲ふて河口を取り、邊防督辦を誅殺して其降衆千餘人を收め、此地を守つて幹部の來つて指揮するを待つたが偶々余は遠く南洋に在り、且つ再び佛領に入り得ず、自ら戦線に赴いて指揮し難かりしを以て黃克強に電命し行きて指

揮せしめんとしたが、途中克強は佛蘭西官憲より日本人なりとの嫌疑を受け遂に拘留されて河内に送還され、次で清吏が之を知り佛國政府と交渉したる爲領土外に追はれ、河口の衆は指揮者無く竟に進取に機を失するに至つた、然らざれば蒙自は必ず我が有と爲り、雲南府も亦抵抗の力を有しなかつたであらうと思はれる。蓋し當時の雲貴總督錫良の求援の電文を觀れば其の蒼徨として措置を失してゐたことを窺ひ知ることが出来る。

他方黃明堂は待つこと月餘、軍に紀律なく、人思ひ思ひに戦ひ、然も敵兵四集し其數我軍に十倍せるを以て、河口遂に守らず、明堂は六百餘人を率ゐ退いて安南に入つた。之れ余の第八回の失敗である。其後黨人は佛國政府の手によつて佛領外に送り出され、次で英領新架坡に赴きたるところ、入港の日英國官憲に阻止されて上陸を禁ぜられた。依つて佛國領事は英國側と交渉し、之等の六百餘名は河口の戦に敗れ退いて佛領に入りたる革命軍にて、佛國政府は彼等が來新の希望あるを聞き送つて此地に來りたる者なる旨を告げたるに、新架坡の總督は中國人民と其の本國との戦ひは交戦團體と認むることを得ず、従つて國事犯と見做す能はず、單なる亂民と見るべきものであり、亂民を領土内に入ることとは本國政府の禁する所であるが故に上陸を禁止する旨を答へ來つた。依つて佛國郵船は其儘二日間岸壁に碇泊したが、其後佛國政府が河口の革命戰爭當

時佛國政府は中立の態度を採り、事實上革命黨の交戦團體たることを認めたるに等しく、故に今回來新せる黨人は亂民として取扱ふこと能はざるものなる旨を聲明したる爲、新架坡政府は漸く上陸を許可するに至つた。之れ革命の失敗後に發生したる國際問題である。

黃岡の役より河口の役に至るまで、余と同盟會幹部とが直接事を擧げて失敗すること前後六回、此の六回の失敗を経て精衛は頗る失望し遂に同志數人と共に北京に入り、死を決して虜酋に一撃を與へんとしたが成らず、黃復生と共に捕へられて獄に繋かれ、武昌に於ける擧兵後漸く保釋せられた。

同盟會成立前出資して義軍を助けしは余の親友中少數の者に過ぎず、其他敢て助くる者は無かつたが同盟會成立後に至つて初めて外部より資金を集むるに至つた。當時出資して最も勇且つ多額なりしは張靜江であり、彼は巴里に在る其の店の所得六七萬元を悉く提供して軍費を補助した。更に出資に勇にして眞摯なりしは安南の黃景南であつて彼は一生の蓄積數千元の全部を軍資金に提供した。斯の如きは他の爲し難い所であつて誠に貴ぶべき行爲である。此他安南西貢の巨商李卓峯、曾錫周、馬培生の三人があり、各々數萬元を出資したが之等も亦當時多く其の比を見なかつたものである。

余は數度の失敗後安南、日本、香港等中國と近接せる地方に於ては皆自由に居住し得ざることとなり、既に中國に對する活動の地盤を完全に失却せるを以て、國內一切の計畫を黃克強と胡漢民との二人に委託し、再び漫遊の途に上り、専ら資金の籌備に任じ以て革命の進行を援助することとなつた。

後、克強と漢民とは香港に還り南方に於ける革命運動の中央機關を設け、趙伯先、倪映典、朱執信、陳炯明、姚雨平等と謀り、廣州の新軍を以て事を舉げんとし、機運既に熟し庚戌（一九一〇年）の正月某日に兵を舉げんとしたが、新軍中過度に昂憤せる者あり、豫定の日に先んずること一日、遂に小事より紛擾を起したる爲、倪映典は蒼惶として營に入り、親ら一部の兵を率ひ沙河より進んで省城を攻めんとし、横技岡に至つて敵の爲に撃破され、映典は敵彈に中り擒へられて後死し、軍は主を喪つて遂に潰亂した。之れ我黨第九回の失敗である。

時に余は桑港に在り、失敗を聞きたる後道を布哇、日本にとつて東方に歸り、途中日本に於て潛かに上陸したが警察の探知する所となつて在住を禁ぜられ、遂に横濱より彼南^{ビナン}に渡り此地にて伯先、克強、漢民等と會して捲土重來の計畫を商議したが、時に敗殘の後を受けて最も精銳なる黨の機關と最も便利なる地盤とを失ひ、加ふるに新軍の同志にして南方に亡命し來る者頗る多

く、其等の者の爲に安住の計畫を樹つること困難なるのみならず、吾人の住食の費用、運動の資金を得ることすら難く、前途を慮つて衆皆憂色あり、將來の計畫を談じて嘘啼太息せざるなく、相視て無言であつた。依つて余は一敗何等失望するに足らず、曩に余の失敗せる頃は殆ど世を擧げて余を棄てたるものにて、今日の狀態に較べ其の困難なりしこと百倍せるものあり。今日我が同志が窮するも革命の風潮は既に盛んとなり、華僑の思想も既に開けたるを以て、今後は只吾人の計畫無く勇氣無きを憂ふるのみであり、若し果して衆志衰へざれば、資金は余が法を設けて集むべきを言ひ、以て之を慰めた。時に各人親しく彼南に於ける同志の窮狀と、我等の窮地に亡命した苦しさを目撃し、日常の費用も支給されず、活動資金なきを託つて居たが、余は再三必ず法を設け得べきを彼等に告げた。而して伯先は若し再舉を圖らんとせば直に人を遣し數千金を携へて歸國せしめ、以て某處の同志を救濟し彼等の散去するを防ぎ、然る後之を集合し再び機關を設けて進行を謀り、余等も次で香港に歸り、各方面と聯絡をとるべきであり、之が爲には兩三日中に五千元の資金を要し、さもなくば數十萬の大金を要する旨を主張せるを以て、余は此の地に華僑同志會を召集し、大義を説いて求むる所ありしに、一夕の間に八千餘元の醜金を得、更に同志が分擔して各地に勸募した結果、數日の内に五六萬元に達した。斯くて資金を得たるを以て、

更に分擔して遠地に至つて募集することとなり、余は英、蘭兩屬の南洋を遍遊せんとしたが、和蘭は余を拒み、英領、暹羅も亦前後して余を逐つた爲に東亞大陸の廣き、南洋諸島の多きを以てして竟に余の爲には一寸の足を立つべき地も無きに至り遂に歐米に去らざるを得ないこととなつた。其後渡米し、各地に遍遊して革命資金醸出方を華僑に勧誘したところ、喜んで出資する者が多數に上り、之が爲に辛亥（一九一一年）三月二十九日廣州に於て擧兵することが出來た。此の役は各省に於ける革命黨の精銳を集め、乾坤一擲の擧に出たものであつて、事成らざりしも、黃花岡初め七十二志士の烈々たる氣概は全世界を震撼せしめ、國內の革命氣運は全く之に依つて醸成せらるるに至つた。之れ余の第十回の失敗である。

先に陳英士、宋鈍初、譚石屏、居覺生等は香港軍事機關と廣州の役を應援すべき旨を約束したが、再度廣州の戦に敗るるや轉じて武漢に移らんとした、蓋し余が曾て佛國士官を派して武漢新軍と連絡をつけしめた後、同軍の革命思想は日々進歩し、當時既に之が成熟の域に達してゐたからであるが、只だ清吏の監視が日に増し嚴重で、端方は兵を調へて四川に入り、湖廣總督瑞徵は最も革命思想に富む一部の兵を端方に隨行せしめて患ひを未然に防がんとした。然るに廣州の役後各省は既に風聲鶴淚、草木皆兵であつて、清吏は悉く怯え武昌が殊に甚しく、之が爲に瑞徵は

先に某國領事と約し、其の軍艦の武漢に入らんことを請ひ、革命黨が事を起さば之を砲撃せんことを願つた。而も尙ほ彼は一日數驚する状態であつた。一方孫武、劉公等は頻りに積極行動をとり、軍兵も亦躍々として動かんとしてゐたが、忽然黨機關を破壊され黨士三十餘人が捕へられた。時に胡英は武昌の獄中に在つたが、之を開き法を設けて陳英士等の來武を止めしめんとした。然るに砲兵及び工兵の營士にして革命黨に投入せる多くの者は既に彼等の名簿が押收され、明日にも逮捕さるべしと聞いて、待つは攻むるに如ずとし、自存の計を樹てんとして態秉坤先づ第一に銃口を開き蔡濟民亦衆を率ゐて進撃し、總督公署を砲撃したるに瑞徵は砲聲を聞いて直に漢口に逃れ、前記某國領事に約束に依り砲撃せんことを請ふた所、庚子條約により一國の自由行動は不可能であつた爲に、領事團會議を開き、多數決によつて砲撃平定せんとしたが、各國領事は此事に對して定見無く、只だ佛蘭西領事「ロ」氏は余と舊交あり、深く革命の内容を理解してゐた爲に、席上孫逸仙派の革命黨は政治の改良を目的とするものであり、無意味なる暴擧に非ざるを以て義和拳と同視して干涉を加ふ可きに非らざる旨を力説した。當時同地の主席領事は露國であつたが、之が佛國領事と一致の態度をとつた爲各國領事も多く之に賛成して不干涉主義をとることに決し、中立の布告を宣布した。瑞徵は某領事が違約して恃むに足らざるを知るや、上海

に逃れ、次で張彪亦走り、清朝側は斯くて統制を喪ひ秩序も大いに亂れた。而して革命黨側は孫武が爆薬を造らんとし誤つて傷つき未だに平癒せず、劉公は謙讓に違なく、且つ上海よりの人員も至り得ない爲に同盟會々員蔡濟民、張振武等は黎元洪に迫つて湖北都督に就任せしめ、斯くて漸次秩序を恢復し、其後黄克強等も到着したが時既に湖南、湖北對立の萌しあり、號令の不統一を如何ともし得なかつた。

惟ふに武昌の成功は意外のことであつて、其の主要原因は瑞徵の逃亡であり、若し瑞徵が逃亡しなかつたならば張彪も斷じて走らず、従つて清軍は統制を失せず、秩序も亂れなかつたであらう。當時武昌の新軍中革命に賛成せる大部分の者は既に瑞方に隨つて四川に行き、留りし者は只だ砲兵工兵の小部分に過ぎず、其他の武昌に残留せし新軍は尙ほ毫も定見無き者のみであつた。然るに此の小部分が機關の破壊により危険を感じし結果、險を冒して功を圖らんと決意し、成敗を念頭に置かずして決行し、初め一撃にして奏功すべしとは思はなかつたもので殆ど天心漢を助けて胡を亡したるかの感がある。

武昌に於ける根據は稍々持久し得べき状態となつたが、武漢を救ひ革命の成功を促さんとせば武漢に限らず、各省に於て之に應ずるの必要があり、吾黨の士も約せずして皆其の然る所以を考

へたから、各自各地に於て戦をなし、數ヶ月ならずして十五省は皆光りを復した。中にも響應の最も有力で全國に與へた影響の最大なりしものは上海であつて、陳英士は同地に在つて積極的に進行し、漢口一度失はるるも彼は能く上海を取つて之に據り、此地より南京を窺取せんとするの計を樹てた。後漢陽の失はれし際吾黨が南京を奪つて之に據り革命の大局は之が爲に益々振つたが、之れ上海に於ける英士の一木の支へが他に較べて尤も多かりしことを物語るものである。

武昌義舉の翌日の夕刻、余は途中十餘日前に受取つた香港發黄克強よりの來電と共に米國「コロラド」州「デンヴァ」に到着し、豫め運送して置いた行李を開き暗號表を取出して電文を翻譯せるに、居正が武昌より香港に來り、新軍が必ず發動すべき旨報告ありしを以て、速に送金して急に應ぜられんことを請ふとあり。然れども當時余は「デンヴァ」に在り資金を得る方法なきにより、直ちに返電して發動を中止せしめんとしたが、既に夜に入り、終日車中に在つて身心疲勞し思慮紛亂せるを以て、翌朝睡りより醒め精神清爽となるに及んで再び詳思審度し、然る後返電するに如かずと思ひ、一睡して翌日午前十一時に起床し、空腹を覺えたるにより先づ食堂に入つて朝食を攝らんとし、途中廻廊にて新聞賣場を経、一部購入し携へて食堂に入つて閱覽したるに着座して新聞紙を展ぐるや否や、武昌が革命黨の爲に占領された旨の電報が掲載されてあるのが

目についた。茲に於て心中躊躇未決の返電に關する懸念は氷釋したから、克強に返電遷延の理由と余の今後の行動とに就いて打電した後余は更に東に向つた。余は太平洋を経て潜かに歸國し二十餘日を経て上海に到り、親らも革命の戦に參與す可きであつたが、其の頃吾等が革命事業に盡力するに當つては、力に訴ふるよりも、寧ろ樽俎の間に折衝する方がより多くの効果を擧げ得た爲、意を決して先づ外交方面に力を致し、此の問題の解決を俟つて歸國せんとした譯である。當時の各國の情勢として米國政府は支那に對して門戶開放、機會均等、領土保全の政策を採り、革命に對しては定見無く、同國の輿論は大いに我々に同情を表し、佛國は政府民間共に革命に對して好意を有し、英國は民間には同情を表す者多く政府の對支政策は只だ日本の動向を見て決せられ、露獨兩國の當時の趨勢は多くは清政府に與する傾きがあり、吾黨は之等兩國の政府及び民間と交際少き爲、其の政策を變更せしむる方法無く、日本は中國と最も密接なる關係を有し、其の民間の志士は單に我々に同情を表すのみならず、身を捨て力を致して革命を援助する者も尠くなかつた。只だ其の政府の方針は實に測る可らざるものがあり、既往に於て一度余を國外に逐ひ、一度余が上陸を拒んだ事實よりするも其の中國の革命事業に對する態度を窺ひ知られるが、庚子條約(註、門戶開放に關する列國の聲明)後であつた爲、單獨行動をとり得なかつたものである。要するに中國と最

も關係深き以上の六強國中米佛二國は革命に同情を表し、露獨二國は革命に反對し、日本は民間にては同情を表せるも政府は反對し、英國は一般民衆は同情せるも政府の態度は未定であつた譯である。故に此の間に於ける余の外交工作は一舉一投足悉く成敗存亡の係る所であつて、殊に英國が我に與するに於ては日本は患を爲し得ない状態にあり、此の見地より余は東して「ニューヨーク」に赴き船を覓めて渡英することにした。途中「セントルイス」に於て新聞を購讀し、武昌の革命軍は孫逸仙の命令を奉じて起つたもので共和國を建設し、初期大統領として孫逸仙が就任する筈である云々の記事が掲載されてゐるのを見た。爾來余は特に慎重なる態度を採り、記者との會談は一切之を避けた。蓋し虚聲を悪んで實際を圖らんとしたのである。次で「シカゴ」を経由して同志朱卓文と會し共に渡英することとなり「ニューヨーク」に於ては廣東の同志が事を發せんとしてつあるを聞き、流血の慘を免れしめんとし、兩廣總督張鳴岐に電報を致し城を獻じて投降せんことを勧め、同志に命じて其の生命を全うせしめたが、後果して之が目的を達することが出来た。渡英後米人同志咸馬里が代つて四國銀行團主任と會談し清政府との借款中絶方を交渉した。清廷は先に四國銀行團と川漢鐵道借款一億元、幣制借款一億元の契約をなし、此等の内一つは既に債券を發行し、收金して交付を待ちつつあつたものであり、一つは契約完了したるも債券未發行

のものであつた。余は銀行團をして前者の交付と後者の債券發行とを停止せしめんとしたのであるが、銀行團の主任は中國借款に對する進行は全部外務大臣の主管に屬するものであり、此事に關する限り外務大臣の命に聽く外なく、自由裁量の餘地無き旨を答へ來つた。茲に於て余は維加砲廠の總理に委托し、余の代表として外務大臣と商議せしめ、英國政府に向つて三項の要求を提出した。其の第一は清廷との一切の借款を停止すること、第二は日本の清廷援助を制止すること、第三は英領各地に於ける余の放逐令を取消し、余が道を藉りて歸國するに便ならしむること等であつたが、皆英國政府の許可を得るに至つた。次で余は再び銀行團の主任と折衝を開始し革命政府との借款を交渉したが、該主任は英國が既に余の願ひを許し、銀行團も清廷との借款を停止せるにより、今後銀行團と中國との借款は只だ新政府との交渉に俟つべきものなるを以て、余が歸國し正式政府が成立せる後に於て必ず改めて商議することも不可能にはあらざるべく、銀行團は某銀行の取締役を余と共に中國に派遣するにより、正式政府成立の日を俟つて之と商議されたき旨を答へ來つた。

余は余の在英中個人として能ふ限り盡力し義務を果したるを以て、道を佛蘭西にとつて東に歸ることとし、途中巴里を経て朝野の士と會談したるに、皆極めて余に同情を寄せ時の首相格プリミエールに

は最も余を厚遇した。其後、佛蘭西を離れ、三十餘日を経て初めて上海に達したが當時南北の和議既に開かれ、國體は猶定まり居らず。余の上海着前中外の各新聞は皆余が巨金を持ち歸つて革命軍を助くべきを傳布してゐた爲に、余が甫めて上海に到るや同志の余に所望する所と、中外各新聞記者の余に問ふ所とは、皆此の資金のことに就いてであつた。故に余は一文の資金をも持ち歸らず、余の携へ歸りしものは革命精神のみ。革命の目的を達せざれば和議の言ふ可きもの無き旨を彼等に告げた。次で各省の代表は南京に選舉會を開き余を臨時總統に選舉した。依て余は西曆紀元一千九百十二年正月一日就任し、直に布告を發して國號を中華民國と定め、同時に中華民國元年と改元して陽曆を採用した。茲に於て余が三十年一日の如く中華を恢復し、民國を創立せんとした志は竟に成るに至つた。